

及ハスト雖  
財產取調及公  
賣ノ期日ハ報  
告スヘキモノ  
トス

差出セシ鑑定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ村役人ニ於テ總入  
札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ取立裁判所ヘ  
差出ス可シ

第二項 財產取

調ノ節被告ハ  
立會サルハ  
家族又ハ隣佑  
ノ者ヲシテ立  
會シムヘシ原  
告人立會サル  
ルハ其儘ニテ  
取調ヲ爲ス  
ヲ得財產公賣  
ノ節ハ原告  
人共立會ハサ  
ルルト雖其  
處分ヲ了スル  
ヲ得ヘシ

○五年九月第二十七號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督  
ヲ其子ニ譲リ隱居別宅シテ財產ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候  
分其証券中本家ノ戶主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財產ヲ  
目的トシ貸シ與フ筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ  
候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分產異居ノ者ハ其財產ノミヲ以  
テ之ニ當テ身代限りニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

▲參看

○五年九月司法省第九號布達

凡ソ動產不動產取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告双方ノ内一方ノ  
者負公事ニ決ナル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代  
限り申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公  
事ニ相決シ直ニ濟方不相成候時ハ身代限りノ方法ヲ執行可致候事

▲參看

第三項 抵當物

公賣ニ付テモ  
身代財產公  
賣ト同様心得  
ヘシ

○七年三月第三十四號達

從前布告中裁判上入札又ハ糶賣ノ定メ有之候處右處分ノ儀各地方  
ノ便宜ニ隨ヒ裁判官見込ヲ以テ兩様ノ内取計ヒ苦カラス此旨相達  
候事

●千葉縣伺

明治十六年七月九日

凡ソ一村又ハ一部落若クハ數人共有ノ物件ハ各自財產ニ算入スヘカラサルヲ以テ其  
人身代限り場合ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ無之哉

右相伺候條速ニ御指令有之度候也

○司法省指令 十六年七月十九日

伺之趣一村又ハ一部落ノ公有ナル物件ハ其村內若クハ部内ノ一人身代限り處分ニ遭フモ  
之ヲ差押フヘキ限ニアラスト雖數人ノ共有ニシテ分ツ可ラサル物件ハ之ヲ差押フヘ  
キモノトス

●千葉縣伺 明治十六年八月三日

身代限り財產取調ノ際共有物件差押方ノ儀客月九日相同同十九日御指令相成候處右ハ數  
人ノ共有ニシテ其分ツ可ラサル物件ハ全部ヲ公賣ニ付シ其代價ハ共有者ニ分割シ身代  
限りヲ爲ス者ノ分ノミ其債主ヘノ配當金ニ加フルハ勿論ナルヘシト雖若シ他ノ共有者ヨ  
リ其物件代價ノ一部即身代限りヲ爲ス者ノ分ヲ辨納スルニ於テハ固ヨリ公賣ニ付スルニ  
及ハサル儀ト存候得共爲念相伺候條至急御指令相成度候也

○司法省指令 十六年八月廿日

伺之通

●栃木縣伺 明治十六年八月八日

負債者身代限ノ處分ヲ受ケ財産取調ノ際無謂差拒ニ又ハ一時所在ヲ晦匿スルニ方リ處分方昨十五年八月中相伺候處戸長又ハ債主ヨリ其裁判所へ申出處分ヲ受ケ可キ旨御指合有之然ルニ官報第十九號千葉縣伺第二項被告八立會サル所ハ家族又ハ隣伍ノ者ヲシテ立會シメ其處分ヲ了スルヲ得可キ旨御指合ノ趣相見へ前顯當縣伺ノ旨趣トハ聊カ異ナル儀トハ存候得共畢竟所在ヲ晦匿スル等ノ所爲ハ時日ヲ遷延シ其貯産ヲ賣却シ或ハ隱匿スルノ故意ニ出ルモノニシテ實際上不都合不尠殊ニ郡長職制中ノ件ニ付右等ノ場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ待タズ其家族又ハ親族若シクハ隣伍ノ者立會シメ直チニ取調可然哉此段相伺候也

○司法省指令 十六年八月廿三日 伺之通

●福井縣伺 明治十六年八月十一日

官報第十九號ニ掲載有之千葉縣ヨリ身代限財産取調之際共有物件差押方ノ儀ニ付御省へ稟請候處其御指令ニ曰ク一村又ハ一部落ノ公有スル物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限處分ニ遭フモ之ヲ差押フ可キ限ニアラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツ可カラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトスト有之右御指令ノ旨意ハ公有ト私有トヲ大別サレタタル儀ニテ假令分別シ得ル物件ト雖モ一村若クハ一部落ノ公有タル上ハ差押ユルヲ得ス亦假令分別シ能ハサル物件ト雖モ私有タル上ハ可差押旨ヲ示サレタル儀ニ候哉聊疑似ニ涉リ候間否仰御指揮候也

○司法省指令 十六年八月三十一日 伺之通

●栃木縣伺(電報) 明治十六年九月十日

身代限財産調ノ際本人ハ勿論家族親族及ヒ隣家之者マテ立會ヲ拒ム時ハ戸長ニテ直チニ取調可然哉至急御指揮ヲ乞フ

○司法省指令 十六年九月十九日

身代限財産調ノ儀ニ付伺ノ趣ハ見込ノ通タルヘシ但シ戸長ニ於テ財産調書ニ本人等立會ヲ拒ムニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

●佐賀縣伺 明治十六年十月一日

一隱居及尊族ノ動不動産ハ全居別居ヲ不問戸主身代限ニハ連及セサル者ト心得然ル可哉

一子弟及卑族ノ動不動産モ亦尊族ノ財産ト全様心得然ル可哉

一妻ノ動不動産ハ戸主ノ財産ニ加ヘ可然哉

一以上ノ財産之ヲ區別スルモノニ候ハ、條例成規アル簿冊ニ記名アルモノハ勿論建物船舶等ノ如キ賣買讓與ノ規則アリテ公證ヲ受ケタルモノ及ヒ現ニ其所有ヲ證スルニ足ルモノヲ以テ區分スヘキヤ

右差掛候儀之レ有候ニ付至急御指揮相成度此段相伺候也

○司法省指令 十六年十月二十九日

伺ノ趣家族ノ財産ハ其全居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓渡シ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

●佐賀縣伺 明治十六年十月八日

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ差拒ミ候者アル所ハ裁判執行ヲ拒ム者ニ付戸長ヨリ直ニ裁判所へ出訴爲致來候處官報第七十一號栃木縣伺ニ對スル御指令ニ依レハ身代

限ノ處分ヲ受クル本人ハ勿論其家族親族及隣伍ノ者ニ於テ立會差拒ニ候場合ニ於テ戸長直ニ取調ノ手續ヲナシ其旨調書ニ付記可致旨ニ有之聊カ疑義相生候條爲念此段相伺候也

退テ裁判所へ出訴ヲ要セス戸長ニ於テ直ニ調査スル儀ニ候ハ、若シ本人又ハ代理人等ニ於テ其調査ニ故障ヲ唱差拒候節ハ戸長ヨリ直ニ警察官ノ公力ヲ要スル儀ニ候哉又ハ此場合ニ於テ裁判官へ通知スル儀ニ候哉合テ御指令相成座候也

○司法省指令 十六年十月三十一日

身代限財產取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アル時ハ戸長ニ於テ直ニ警察官ニ對シ公力ヲ要求スルコトヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求めヘシ

但栃木縣伺ニ對スル指令ハ立會ヲ差拒ム場合即チ立會サル時ノ處分ヲ示シタルモノト心得ヘシ

●和歌山縣伺 明治十六年十月廿三日

第一條 爰ニ刑事ニ關シ乙ヨリ甲ニ對シ告發ヲ爲シ裁判所ニ於テ豫審ノ末無罪ノ申渡ヲ受ケタルモノアリ因茲甲ハ乙ヲ被告トシ損害要償ノ訴ヲ爲シ乙ハ其損害ヲ償フヘキノ申渡ヲ受ケタリ然ルニ乙ハ其償ヲナサス所有財產ノ幾分ヲ長男丙（全籍中ノ者ニテ未タ戸主ノ地位ヲ讓ラズ單ニ財產ノ幾分ヲ讓與ス）ヘ讓渡シタル後損害金ノ幾分ヲ償却シ其不足金渡シ方延日ヲ求ムルモ甲之ヲ肯ンセス終ニ裁判執行ノ訴ヲナシ原被示談身代限ノ申立ヲ爲セリ右身代限財產處分ノ上償金ニ不足ヲ生スルモ曩ニ丙（長男）ヘ讓渡シタル記名ノ財產ニハ及ホサル儀ニ候哉

第二條 前同様ノ事實ナル無記名ノ財產ハ戸主ノ身代限ニ組入ルヘキ儀ニ可有之哉

○司法省指令 十六年十一月十日

伺之趣左之通心得ヘシ

第一條 償金ニ不足ヲ生スルモ甲ハ丙ニ對シテ更ニ辨濟ノ請求ヲ訴ルヲ得ヘシ

第二條 見込ノ通

●山梨縣伺 明治十六年十月三十日

官報第拾九號伺指令ノ欄内千葉縣ノ伺ニ對シ御省ノ御指令ニ一村又ハ一部落ノ公有物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限ノ處分ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ非ラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツヘカラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトスト有之候處右ハ今後右御指令ニ依リ取扱可然哉

○司法省指令 十六年十一月廿一日

伺之通

●三重縣伺 明治十六年十一月十九日

官報第百四號中ニ佐賀縣ヨリ戸主身代限ノ際非戸主ノ財產處分之儀御省へ伺指令登載有之右御指令ニ家族ノ財產ハ其同居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財產ニ組込ムヘキモノトストアリ然ルニ村邑僻地ニ至テハ伯叔父母兄弟等籍ヲ分タスシテ別居シ毫モ本家ノ保護ヲ受ケスノ活計ヲ營ミ自力ヲ以テ產ヲ興シ恰モ一戸獨立ノ姿ヲ爲ス者往々有之若シ此等ノ者ヲシテ戸主ノ身代限ニ連及セシムルモノトセハ多年ノ盡力一朝水泡ニ屬シ甚憫諒スヘキモノアリ右等ノ如キ單ニ戸主ト其籍ヲ同フスルノミニテ其實絶テ本家ト經濟ノ關係ヲ有セヌ一家獨立ノ姿ヲ爲ス者ハ其所有ヲ證スルニ足ルモノニ限リ戸主ノ財產ニ組込マサル儀ト心得可然哉

○司法省指令 十六年十二月十二日

伺之趣別居生計ヲ立ルト雖モ分籍セサル者ノ財産ハ公證記名アル公債證書地所及賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

●福島縣伺 明治十六年十二月五日

第一條 茲ニ前戸主某甲アリ其戸主中ニ爲シタル負債後戸主乙某ニ於テ引受ケ身代限濟シ方承諾ス然ルニ曾テ債主ニ差入アル證書ハ甲者ノ名面ニシテ其抵當タル土地ノ如キモ甲者ノ所有(戸主換ノ節讓渡サ、ルニ由ル)分ナルモ右負債ハ假令乙者ニ於テ代辦スルニ至レリト雖モ債主ヲシテ信ヲ置カシタル其抵當物件ハ財産取調ニ組入レ可然乎又ハ乙者カ甲者ニ代リ其義務ヲ盡スコトヲ原告人承諾セシ上ハ現ニ甲者ノ記名アル地券ノ如キ其調ニ不組入儀ニ候哉

第二條 身代限リ入札拂之節入札上ノ價格不適當ト見認ムル場合ハ之レヲ取消シ再入札ヲ爲サシムルヲ得ヘキヤ果シテ得ルモノトセハ其權限ハ揭示書ヲ發シタル裁判所ニ屬スルヤ將タ郡長ニ屬スルヤ

○司法省指令 十六年十二月廿五日

伺之趣左ノ通心得ヘシ

第一條 乙者代償ノコトヲ債主ノ承諾ノ上ハ後段見込ノ通り

第二條 再入札セシムルヲ得其權限ハ裁判所ニ屬ス

●大阪府伺 明治十六年十二月廿六日

第一條 負債主身代限ニ際シ他人ノ田地ヲ小作スルモノアリ元來小作米ハ其土地作徳ノ幾分ヲ以テ地主ニ納ムルノ習慣ニシテ尋常貸借トハ自カラ性質ヲ異ニスルニヨリ右身代限ノ節其地ノ立毛ハ先一番ニ地主ニ納ムヘキ小作米金ヲ見積ヲ以テ引去リ然

ル后其餘分ヲ身代限財產點數ニ付立可然哉

第二條 前條財產付立之ヲ引去ルヘカラサルモノトスルモ負債主財產公賣金ノ内右立毛ニ對シテハ地主ニ於テ特ニ先取ノ權ヲ有シ候哉

第三條 借地ニ建テアル建物ヲ他ヘ書入質又ハ賣渡ヲ爲サントスルニ地主ニ於テ借地料延滞ヲ名トシ之カ貸地タルヲ證スルノ與書ヲ拒ムヲ得ヘキ哉

第四條 甲ヨリ乙ヘ建物ヲ書入質トシ定約期限中右地所ヲ丙ヘ賣渡スルハ曩ニ甲ヨリ乙ヘ差入タル證書ヘ新タニ丙ノ與書ヲ爲サシメ而シテ長役場ノ書入質記載帳ニ割印ヲ爲スヘキヤ又ハ假令丙ニ於テ新タニ與書ヲ爲サ、ルモ最前甲ヨリ乙ヘ差入タル證書ハ丙ノ與書ナシタルト全一ノ効力ヲ有スヘキ儀ニ候哉

第五條 前條若シ丙ニ於テ新タニ與印スヘキモノナル時ハ已ニ建物書入質約定期限經過スルモ尙與書スヘキ儀ニ候哉

○内務省指令 十七年五月十日

書面伺ノ趣左ノ通可心得事

第一條 小作地ノ作物ハ身代限處分上之ヲ公賣スヘキ時期迄ニ成熟スヘキ者ニアラサレハ差押フ可カラヌ又地主ヘ納ムヘキ小作米金ヲ見積ヲ以テ引去ルヘキモノニアラ

第二條 地主ハ作物ニ對シ先取權ヲ有スルモノトス

第三條 以下事實ニ就キ伺出ヘシ

●福島縣伺 明治十七年一月三十一日

戸主身代限ニ係リ候節家族之財産ハ其全居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及賣買讓渡之規則アル建物船舶ヲ除ク之外總テ戸主之財産ニ組込ムヘキ旨曾テ御指令

ノ次第モ有之右御旨趣ニ基クハ戸主身代限ニ付財産取調之際全人之子弟ニシテ他方寄留出稼キ或ハ官員奉職中ニテ相應之資産ヲ所有スルモノアリ是等之者戸籍上ヨリ見ルルハ分籍シタルモノニ非サレハ無論一家庭中ト見認メサルヲ得ス右一家族タル以上ハ該子弟ノ財産ニ推及可取調儀ハ勿論之事ト被考候得共聊カ疑義ニ涉リ候條此段相伺候也

○司法省指令 十七年二月十九日 伺之通

●兵庫縣伺 明治十七年二月廿六日

父隱居或ハ長次男ニシテ全居スル者一己之負債ヨリ身代限處分ヲ受クルニ當リテハ單ニ一身所有品ニ限リ公賣處分ヲ受ケ戸主ノ財産ニ及ハサルハ勿論ニ付假令本人ニ隨屬シタル妻子アリト雖均シク一戸主經濟中ニ生活スル者ナレハ妻子所有品ニモ波及セサル筋ト考量候得共若シ全戸籍ニシテ異名分産ノ者ニ候ハ、自然財産上分界相立候儀ニ付妻子所有品ト雖記名アル公債証書地所及ヒ賣買讓渡ノ規則ヲ履ミタル建物船舶ヲ除クノ外總テ本人身代限財産ニ組込ムヘキ筋ト心得可然哉

○司法省指令 十七年三月十二日

伺ノ趣戸主ト同籍ニシテ異居分産セル隱居又ハ長次男ニシテ身代限ニ遇フト雖其妻ノ所有品ハ隱居又ハ長次男ノ財産中ニ組込ムヘキ限リニアラス

●福島縣伺 明治十七年三月十一日

第二條 官報第四拾四號ヲ閱スルニ明治十六年八月一日千葉縣ヨリ身代限財産取調之際(中略)數人共有ニシテ其分ツ可カラサル物件ハ(中略)他ノ共有者ヨリ其物件代價之一部即身代限ヲ爲ス者ノ分辨納スルニ於テハ公賣ニ付スルニ及ハサル義ト存候云

々伺ヘ同年同月二十日伺之通ト御指令相成抑モ公賣ニ付スルニ不及トハ如何ナル手續ヲ以物件代價ヲ相定候趣旨ニ可有之哉凡物品代價至當ノ價額ヲ得ント欲スルニハ公賣ト評價ノ二途ニアルナラン果シテ然ラハ御指令ノ趣旨ハ自然評價爲致義ニ可有之哉

第二條 前條果シテ評價ナリトセハ該評價人(二名以上)ハ適宜郡長ヨリ命シ之カ日常料ハ村費等ト同シク身代限財産中ヨリ前收ス可キ者ニ候哉又ハ元來評價人ヲ命スルヤ原被告ノ爲メニアラスシテ他ノ共有者之如何ニ依リ之ヲ要スル者ナレハ之カ費用ハ自然共有者ノ負擔ニ可有之哉或ハ命セシ郡役所ヨリ支給候義ニ可有之哉

○司法省指令 十七年四月二日 伺ノ趣ハ左ノ通り

第一條 共有者辨納申立ノ代價ニ對シ原被告異論アルニ於テハ評價セシムヘキモノトス

第二條 評價人ノ日雇賃ハ共有者ヨリ辨納ノ代金又ハ財産公賣金ノ内ヨリ支出スヘキモノトス

●福島縣伺 明治十七年三月十九日

第一條 戸主代身限之處分ヲ受ケタル時其子弟ニシテ他方寄留官途奉職等ヲ爲シ相應ノ資産ヲ有スル者ハ俱ニ其財産ヲモ取調フヘキ旨ハ曾テ御指令ノ次第モ有之候處然ル場合ニ於テ該財産之取調方ハ先ツ郡長ハ裁判所ヨリ照會ニ依リ本籍戸長ヲ取調(戸主ノ子弟ニシテ寄留等有否)若シ分居(同籍)者有之ハ本管郡長ヨリ寄留地郡長ニ委囑取調ヲ完結スヘキ順序ニ可有之哉

第二條 明治五年第百八拾七號公布華士族身代限規則中外入札ト共ニ入札爲致(町村)

役人ニ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ云々ト有之候處府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事令ニ報告スルヲ得ルノ項目即チ其第三項ニ依リ身代限ノ財產取扱之事ハ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラレ候上ハ前規則ノ(町村)役人ハ理今之郡長ニ於テ査定ス可キ筋ト心得可然哉

第三條 財產取調之際正當ノ事由アリテ立會ヲ要セス取調ヲ完結スルハ貸主預ケ主等ヨリ其家内ニ存在スル物品ノ中返還ヲ求ムルモ戸長ハ其處辨ヲ爲ス可キモノニ無之旨ハ曾テ御指令有之候處尋常(被告人立會)取調ニ際シ(貸借)主(預ケ預リ)主ニ於テ該物品ハ貸借預ケ預リ等之旨ヲ以テ相對ニテ持去ルハ取調ニ臨ミタル官吏ト雖モ之ヲ支ユヘキ權理無之哉又ハ其家宅ニ臨ミタル以上ハ證據ノ有否ニ不拘持去ルヲ止メ取調ハ一旦結了シ其返還ノ處分ハ曩キノ御指令ニ基キ請求スル者自ラ裁判所ニ可申出儀ト心得可然哉

○司法省指令 十七年四月五日

伺ノ趣ハ左ノ通心得可シ

第一條 裁判所ニ於テ其子弟寄留地ノ郡區長ハ照會シ取調ヲ爲サシムヘキモノトス

第二條 見込ノ通

但郡長ハ裁判所ノ認許ヲ得サレハ直ニ落札ヲ達スルノ權ナキモノトス

第三條 後段見込ノ通

●千葉縣伺 明治十七年四月廿六日

客年十一月二日付官報第六號身代限財產取調ノ儀ニ付佐賀縣ヨリ御省ヘ伺ノ御指令ニ身代限財產取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アルハ戸長ニ於テ直ニ警察署ニ對シ公力ヲ要求スルヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求

ムヘシト有之右故障ヲ唱フルトハ此物品ハ他ヨリ借受ケタルモノニ付財產取調書ニ差加ヘベキモノニアラスト申出ルモノ等ヲ指シタル儀ニ候哉右ハ假令他ヨリ借受ケタルモノト申出ルモ其家屋内ニアルモノハ財產取調書ニ差加ヘ裁判所ニ送付スヘキ儀ト相心得居候然ルニ前御指令ニ據レハ裁判所ノ處分ヲ求メタル上財產取調ヲナスモノ、如シ疑義決兼候ニ付此段相伺候也

○司法省指令 十七年五月二十三日

伺ノ趣他人ノ所有ニ係ル旨ノ申立アル物品ト雖モ之ヲ財產取調書ニ記入シ且ツ其申立アル旨ヲ附記シテ裁判所ニ送付シ該物品ノ處分方ヲ求ム可キ儀ト心得ヘシ

●札幌縣伺(電報) 明治十七年四月廿九日

身代限財產ノ内證券印紙郵便切手等所持スル者有リ右公賣ニ附スヘキヤ又ハ義務者ヨリ願ヒ出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ

○司法省指令 十七年五月二十三日

身代限財產ノ取扱ニ付四月廿九日付伺ノ證券印紙野紙ハ地方廳ニテ原價ト引換郵便切手ハ驛遞本分局ヘ廻シ郵便條例第三十六條第三十七條ノ處分ヲ請ヘシ

●和歌山縣伺 明治十七年五月八日

第壹條 身代限財產差押ニ際シ本人及家族不在ノ節ハ隣佑ノ者ヲシテ立會セシメ若シ隣佑者之ヲ肯セサルトキハ戸長ノ立會セシメ其取調ヲナスモ不苦候哉

第貳條 身代限ノ處分ヲ受ケタル節本人職業ヲ爲ス必用ノ書類並ニ器械物品等其金額五拾圓ニ至ル迄ハ引殘スヘキ等ニ候處其五拾圓以上ナルハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者(道具屋ノ類)一人宛差出シ外入札ハト共ニ入札致サセ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其代價ヲ定ムヘキ時ノ費用ハ總テ借主ニ於テ負擔スヘキ筋ニ候哉

第三條 前條ノ場合ニ於テ貸主他郡區ニ涉リ鑑定人ヲ要スルモ一時難呼寄キハ差押人ノ見込ヲ以テ其土地相應ノ者ヲ撰ミ鑑定爲致候モ不苦候哉

○司法省指令 十七年五月二十六日  
伺ノ趣ハ左ノ通

第一條 郡長又ハ戸長ニ於テ直チニ取調ヲナス可キモノトス但調書ニハ本人等立會ヲ拒ミタルニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

第二條 明治九年當省甲第五號布達第十三條ニ據リ身代限者ノ負擔タルヘシ

第三條 明治五年第百八十七號公布身代限規則ニ依ル可キモノトス

○岡山縣伺 明治十七年五月廿六日

身代限財產處分ノ義ハ府縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事縣令ニ報告スルヲ得ルノ項目即チ其第三項ニ依リ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラル、而已ナラス明治五年第百八十七號公布身代限規則中最後ノ項目但書結文ノ趣ニ依リ糶賣代價相當ト見込ムトキハ直ニ落札ノ義ヲ達スルハ素ヨリ郡長ノ權内ト心得居申候處本年四月官報第百廿九號伺指令欄内福島縣伺第二條御指令ノ趣ニ依レハ身代限抵償トシテ差押フヘカラサル品類ハ郡長ニ於テ直ニ査定シ糶賣落札達方ハ裁判所ノ認許ヲ得ルノ手續キ御明有之當縣從來ノ見解ト異リ候ニ付尙ホ彼是熟考候處抑身代限財產處分ノ義ハ既ニ郡區長ノ事務ニ屬シ況ヤ前陳ノ公布身代限規則中最後ノ項目但書結文等詭味スルニ裁判官ノ認許ヲ得サレハ郡長ニ於テ直ニ落札ノ義ヲ達スルノ權ナキモノトノ精神含蓄セリトモ解シカタク且本人ノ望ニ任セ差押フヘカラサル品類ハ郡長ニ於テ査定シ落札達方ノ點ハ裁判所ノ認許ヲ得ルハ聊權衡ヲ得サル餘被存加之糶賣ノ義ハ貸主借主雙方ヨリ鑑定人差出シ他入ト共ニ入札シ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ムル規則ノアル

以上尙裁判所ノ認許ヲ得ルハ聊相成候條至急何分之御明示相成度此段相伺候也  
○司法省指令 十七年六月十二日

伺ノ趣府縣官職制ニ身代限財產取扱ノ事トアルハ其財產ノ取扱ヲ爲スコトヲ示サレタルモノニシテ其處分權ヲ與ヘラレタルニ非ス又身代限規則未段但書ハ入札中ノ高札ヲ以テ其財產即物件ノ價ヲ定ム可キコトヲ示サレタルモノニシテ該物件公賣ノ處分即落札ヲ直達スヘキ權ヲ與ヘラレタルニ非ス依テ落札ノ儀ハ裁判所ノ認許ヲ得タル上相達ス可キ筋ト可心得事

但福島縣伺ニ對シ郡長ニ於テ抵償トシテ差押フヘカラサル品種ヲ査定スヘキ手續ヲ指示シタル儀ハ無之候事

○和歌山縣伺 明治十七年五月二十八日

身代限財產差押ノ儀ハ該家所有物ニ限リ他人ノ財產ニ及ホスヘキモノニ無之處其差押ニ際シ該家中ニ有之財產ノ内他ヨリ借リ品若クハ預リ品有之事實相違無之時ハ差押ニ及ハサル儀ト存候處官報第百廿九號伺指令欄内福島縣伺第三條ハ司法省指令ノ趣ニ據レハ證據ノ有無ニ不拘差押フヘキ旨ニ有之右ハ其證據ノ不充分ナル場合ニ於テハ都テ差押確證(例ヘハ借居住居ノ者ニシテ建具付借用ノ證書差入有之モノハ其家及ヒ建具ハ差押ヘサルノ類)有之双方(貸主借主)異議無之モノハ差押ニ及ハサル哉將タ確證アルモ尙可差押モノトセハ一應郡區長ヨリ裁判所ヘ照會シ認可ヲ得テ其確證アルモノハ之ヲ除クヘキ儀ニシテ其貸又ハ預ケ人ヨリ其取戻シヲ裁判所ヘ直ニ可申出筋無之儀ト相心得可然哉此段相伺候也  
○司法省指令 十七年六月二十日  
伺ノ趣公證記名若クハ賣買讓渡規則アル財產ニシテ他人ニ屬スルモノヲ除クノ外總テ

差押フヘキモノトス  
但差押ヘラレタル物件ノ返還ヲ求ムルニハ其請求者自カラ裁判所ニ申出ヘキ義ト心得ヘシ

●山梨縣伺 明治十七年六月廿四日

寺院ニ於テ其寺院用ノ爲メ金穀ヲ負債シ期限ニ到ルモ返償ナラス竟ニ訴訟ノ未身代限被申付タリ然ルニ寺院身代限財産取調方ハ是迄類例モ無之候得共明治六年第八拾八號公布僧侶身代限規則ヲ適用調査候儀ト心得可然哉  
若シ神社ニ於テ前項ノ場合ニ遭遇スルトキ其財産ハ何等ノ手續ニ據リ調査スヘキ儀ニ候哉

○司法省指令 十七年七月九日

伺ノ趣社寺身代限ニ付財産取調ノ手續ハ通常ノ規則ニ準ス可ク其抵償トシテ差押フ可カラサル物件ハ左ノ通り心得可シ

一 神体佛像及ヒ其附屬物

二 社寺付除稅地

三 寶物古文書類

但別段ノ由緒アル地所建物ハ本文ニ準ス

四 特別ノ契約アル寄附物

五 祭祀法用ニ必要ナル建物及ヒ什物

●静岡縣伺 明治十七年七月廿六日

第一條 身代限地所公賣ノ際之ニ成立スル所ノ作物ニシテ其既ニ成熟スルモノハ地所ト各別ニ公賣スヘキ儀ニ候哉

第二條 前條若シ未成熟ナルトキハ地所ヲ公賣スレハ隨テ作物ハ之レニ附帶スヘキ儀ニ候哉

○司法省指令 十七年八月十三日

伺之趣ハ左ノ通

第一條 別段ノ成規無之ニ付適宜處分スヘキモノトス

第二條 公賣スヘキ時期迄ニ成熟ス可キ作物ニアラサレハ差押フヘキモノニ非ララスト

●愛媛縣伺 明治十八年一月十九日

戸主身代限之節土地建物並ニ記名アル公債證書ヲ除キ非戸主ノ所有ニ係ル動産物ハ總テ戸主財産ニ組込糶賣相成例規ニ有之候得共其内非戸主ノ所有タルヲ明確ナル分取除クヘキ儀ニ候哉

前項若シ否ストナストキハ非戸主カ篤行奇特ノ行爲ニ據リ賜リタル金銀木杯等ハ如何處分致可然哉

○司法省指令 十八年二月十八日

伺之趣左ノ通心得可シ

但主管ニ付當省ヨリ指令ス

第一項 公債證書地所ノ如キ成法上所有者ノ記名アルモノニ非サレハ取除ク可キ限リニアラス

第二項 賞賜ニ係ル金銀木杯等ハ差押フ可キ限リニアラス

●札幌始審裁判所檢事伺 明治十七年三月五日

諸規則違犯者無資力ニシテ追徴金ヲ完納シ能ハサルハ民事裁判官ニ於テ檢察官ノ請



求ニ因リ民事ノ規則ニ從ヒ身代限ヲ以テ追徴ノ處分ニ及フヘキハ勿論ナリト雖其追徴法ハ被告一身ニ止メ其子孫ニ及ホスコトヲ得ザルモノナル手又ハ通常民事身代限ト同ク子孫ニマテ及ホスヘキモノナル手若シ前段ノ如ク一身ニ止ルモノトスル時ハ被告カ既ニ他ニ抵當質入ト爲シタル財産ヲ除クノ外其公賣代金ハ先取特權アル者トスレハ無論六十日間ノ掲示ヲ須ヒス直ニ其財産ヲ公賣ニ付スヘキモノニ候哉

○司法省指令 十七年三月廿一日

伺之趣總テ民事身代限ノ規則ニ從ヒ處分シ其財産公賣代金ハ他ノ債主ト平等ニ分配ス可キ者トス但檢察官ニ於テハ違犯者ノ資力生スル迄其處分ノ請求ヲ延期スルコトヲ得

●福島縣伺 明治十七年五月廿八日

第壹條 戶長役場ニ於テ人民ヨリ徵收シタル租税金ノ内盜難及村吏私借引負等ニ係ル分賠償方當時其筋ヘ及起訴置後日犯人處刑該金員納付スヘキ旨宣告相成候モ本人資力無之カ又ハ等閑ニシテ上納不致キハ其筋ヘ對シ身代限ノ處分ヲ請求スヘキハ勿論ニ可有之候得共該處分ノ上賠償金額ニ不足ヲ生スルハ身代持直次第上納可致旨之證書差出サセ追テ徵收候儀ニ可有之哉

第二條 前條身代限處分之際ト雖モ先取ノ特權ヲ有スル儀ト相心得可然哉

○司法省指令 十七年八月二十日

伺ノ趣左ノ通可心得事

第一條 賠償金ノ不足ハ裁判所ヨリ明治八年第百貳號布告證文裏書雛形ニ準シ身代持直ニ次第皆濟ヲ受クヘキ旨ノ書面ヲ渡ス可キニ付追テ其書面ニ依リ還納ヲ受ク可キ儀ト心得ヘシ

第二條 先取ノ特權ナキモノト心得ヘシ

○第二節 僧侶身代限規則

明治六年三月第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左之通被相定候條此段相達候事

抵償トシテ差押フ可カラサル品類

一 食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一 建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ属スル箇所ハ此限ニアラス

一 寄附帳ニ記載スル部分

一 什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一 法衣寺主並所化及尼共各一通宛

一 時服着替共寺主並所化及婦女共各二通宛

一 夜具寺主並所化及婦女共各一通宛

一 鍋釜及炊具類各一通

一 本人職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等

其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○第三節 全寄附帳什物帳ノ件

六年三月第八十九號布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必要ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置キ可申候

- 一 寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ
- 一 什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ
- 一 右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢査ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役場ニ藏シ一部ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ

右之通相達候事

○第四節 身代限揭示案

七年七月第七十一號布告

明治六年(五月)第百八十一號布告身代限揭示案左之通改正候條此旨布告候事

何村町

何之誰

右之者何(町)何ノ誰ヨリ何々(其事目ヲ掲ク)出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限申付ルニ付若シ何ノ誰ヘ係リ金穀其ノ他諸取引ノ訴有之者ハ當何日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右日限過去訴出ルニ於テハ此度身代限分數金ノ分配ニハ不差加者也

●第二章 處分

○第一節

身代限ノ節 明治八年四月第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奥書割印モ之レアル公正ノ証書ニ付若シ身代限リ財產中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○明治五年九月司法省第九號布達  
凡動產不動產取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告雙方ノ村一方ノ者債公事ニ決スル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限リ申

付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決直ニ濟方不相成候時ハ身代限ノ方法ヲ執行可致候事

○第二節 貸下金上納金 未納ノ處分 十五年二月 第十二號達

貸下金其他諸上納金未納ノ者他ノ負債ノ爲メ裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ自今左ノ通處分ス可シ此旨相達候事

一 貸下金其他諸上納金未納ノ者裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受クル時ハ其徵收ヲ取扱フ官廳ニ於テ通常公文用紙ニ未納ノ金額ヲ記載シ証書ノ寫ヲ添ヘ之ヲ其裁判所ニ請求スヘシ

一 裁判所ニ於テハ該請求ノ金額ニ就テ負債者異論ナキトハ身代限ノ配當金ヲ不足アルトハ定例ノ其裁判所所在ノ郡區長ニ交付シ郡區長ハ之ヲ其官廳ニ送達スヘシ

○第三節 期限未滿ノ者 六年七月第貳百五十二號布告

負債者身代限ニ遇フ節其者ヘ對シ貸金穀其他義務ヲ得ヘキ者定期期限未滿内ノ分處置振左之通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得ヘキ者定期期限未滿内ニハ訴出スルコトヲ許サ、ル規則デレトモ其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルコトヲ得ヘシ

第二條 定期期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ權利ヲ有シ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受クルコトヲ得ヘシ

第三條 請人証人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル証書ヲ取置タル者ハ本人身代限財產糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至リ請人証人ニ掛リ之ヲ訴ルコトヲ得ヘシ

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スルトハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ証明シテ原告人ノ承諾ヲ求ムルコトヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ証明シ原告人之ヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財產糶賣金ノ分配ヲ求ムルコトヲ得ヘカラス

第六條 定期期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴ルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置キタル債主ハ右動不

動產ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ルヘキ金高ヲ求ムルコトヲ得ヘシ

ヲ得ヘキ而已ニ糶賣ヲ爲スヲ拒ムヲ得ヘカラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置キタル者ハ其財產糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ計算シ受取ル可キノ求テ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配スヘキ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ証書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ計算シ受取ルヘキノ求テ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲スヘシ

○第四節

同居異產者身代限處分法

明治五年九月第二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスル者自今一已ニ金銀借受候ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財產ヲ異ニスル者自今一已ニ金銀借受候分其証券中本家ノ戶主保証ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財產ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及候節同居ノ者ハ其身所持ノ品物ノミ分產異居ノ者ハ其財產ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

○第五節

身代限ノ節現在印紙類處分方

明治十七年十月大藏省第七十三號(府縣)沖繩縣ヲ除ク(一)達

民事訴訟身代限リ又ハ税金不納ニヨリ財產全部ヲ公賣スル際諸印紙手形用紙ヲ所持スルモノ及ヒ烟草賣藥營業者廢業又ハ其營業稅不納公賣處分ノ際該印紙ヲ所持スルモノハ損傷汚染ノ分ヲ除キ手數料トシテ代價百分ノ十ヲ上納スルモ之ヲ管廳ニ買上ルコトヲ得但買上タル印紙類ハ各應元受ニ組入レ買上代金ハ收稅長ヨリ主稅官長ヘ別途請求シ手數料ハ雜收入トシテ納付スヘシ右相達候事

○第六節

貸附證文

七年九月第二十三號達

金穀ヲ借り返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四十號ヲ以テ相達置候處詮議ノ次第有之左之通改正候條此旨相達候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文有之時ハ其証文ノ定約期限ノ滿未滿ヲ論セス証文ニ記名シタル負債主ヘ眞偽ヲ尋テ無相違時ハ其負債主ヨリ証文面ノ通り可受取旨

身代限ニ遭フ者ノ債主ヘ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ証書ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其証文ヲ受取ルヲ好マサル時ハ其証文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

但シ定期期限ノ証文マテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テ其負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人ヘ貸付置キタル金穀ノ証文一通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致メサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トヘ金高ニ應シ配當シ其ノ落札証文ニハ一通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及ベキ事  
第四條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之ヲ受取ルニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ証文ニ記載シアル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ請取ントスルニ証文ニ記名シタル負債主モ亦身代限ニ遭ヒテ証文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルハ証文ニ記名シタル負債主ヨリ証文ヲ落札シタル債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ証文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時曩ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書証文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ証書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ  
第六條 証文ヲ落札シタル債主証文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時証文ニ記載シタル債主即チ曩ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタルハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

証文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰儀年號月日身代限申付候ニ付此証文ハ入札ヲ以テ渡入札ヲ以テテ五字ヲ書加フヘシ 某府縣管下某國某郡某町村何ノ誰ヘ相渡候條此証書ノ金額ハ右何之誰ヘ濟方致候上其段當裁判所ヘ可届出事

年號月日

某 裁判 所

○第七節

身代限ノ節區  
入費取立方

九年十月司法省  
第七十號達

大審院

上審裁判所

地方裁判所

身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀ニ付別紙之通御達有之候條爲心得  
此旨相達候事

司法省

別紙內務省伺身代限處分之節區入費取立方之儀朱書ノ通及指令候條  
爲心得此旨相達候事

明治九年十月十二日

太政大臣三條實美殿

人民身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀ニ付伺

人民身代限處分ノ節區入費取立方ノ儀ニ付各縣ヨリ追々伺出候處區  
入費ノ儀ハ縣廳獄舎營繕費其他區戶長給料等人民ヨリ課出スルモノ  
ニシテ租稅同様一般ノ義務ナリ素ヨリ貸借上トハ判然差別有之儀ニ  
付身代限處分ノ節取立方ノ儀ハ租稅同様先取ノ權ヲ有スヘキモノニ

十年七  
十九號  
月廿二日內  
務省達乙八  
十六號  
身代限ノ  
區入費先取  
ノ上尙不足  
アリトモ身  
代持直シ次  
第償却セシ  
ムルニ及バ  
ス

付爾後右處分ノ節ハ先租稅府縣稅區入費ト順序之處分相成候方ト存  
候ニ付右ノ趣ヲ以再應司法省へ及協議候處同省ニ於テモ區入費ハ到  
底先取ノ權之レアル可ラスト申譯ニハ無之區入費ハ人民ヨリ之ヲ爲  
スヘキノ名義ニテハ先取之權ヲ有スヘキ筋ハ無之見込ニ付若シ先取  
之權ヲ有スヘキ見込ノ分ハ府縣稅ノ一部ニ相立候ハ、裁判上先取ノ  
處分ヲナスニ於テ差支無之趣答議相成候然ル處區入費課出ノ儀ハ例  
ヘハ一之土地ヲ所有スレハ其地券ノ代價ニヨリ幾分ノ租稅ヲ納メ幾  
分ノ區入費ヲ出スヘキ規則ニシテ人民營業取締上等ヨリ取立候府縣  
稅トハ素ヨリ別種ノ者ナリ然ルヲ府縣稅ノ一部ニ相立候筋ハ無之儀  
ニ付前陳ノ通身代限處分ノ節先取ノ權ヲ有スヘキハ勿論其順序ニ於  
テモ第一ニ租稅ヲ追シ亞ニ區入費ト順序ノ處分相成候方至當ノ儀ト  
存候條至急何分ノ御裁下有之度候也

明治九年九月廿六日

內務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿代理

右大臣岩倉具禮殿

朱書

伺之通

明治九年十月十二日

### 第十類 [雜則]

#### ●第一章 貿易

##### ○第一節

日本人民在朝鮮國貿易規則  
十六年十月第三十四號布告  
今般朝鮮國ト別紙ノ通日本人民貿易規則並海關稅目ヲ協議決定ス  
別紙

##### 朝鮮國ニ於テ日本人民貿易ノ規則

第一款 日本諸商船朝鮮國ノ通商港ニ入津スルトキハ即時ニ海關ヨリ官吏ヲ派遣シ船口ヲ封鎖シ且其外荷物アル場所ハ相當ノ取締ヲ爲スヘシ商船ニテハ其官吏ヲ丁寧ニ取扱ヒ且之ニ適宜ノ房室ヲ給スヘシ若シ之ニ給スヘキ房室ナキハ右官吏ハ海關ノ番船上若クハ陸上ニ在ルモ其便宜ニ任スヘシ尤其諸費ハ總テ海關ノ支拂タルヘシ船主若クハ代理人等ニ向テ私ニ毫釐ヲモ受クヘカラス但日本形風帆船荷物取締方ニ付テハ海關長日本領事官ト協議シ適宜ノ方法ヲ設施スヘシ

第二款 日本商船朝鮮國ノ通商港ニ入津シタルトキハ其船長或ハ代

理人ヨリ其船書即船免狀荷物送狀ヲ日本領事官へ指出シ其預リ証書ヲ受取り而シテ入港手數トシ其投錨時點ヨリ四十八時以內(但日曜日及ヒ其他ノ休日ヲ除ク以下諸款內時間ニ係ル者ハ皆ナ同シ)ニ右預リ証書入港届書積荷目錄其他船用品及ヒ自餘ノ免稅品(商品ニアラサル者ヲ云)ノ目錄ヲ海關へ差出スヘシ若シ右時限内ニ入港手數ヲ爲サ、レハ其船長ニ銅錢三萬文ノ罰金ヲ課シ尙ホ怠テ手數ヲ爲サ、レハ其時限ヨリ二十四時ヲ經過スル毎ニ更ニ同額ノ罰金ヲ課スヘシ但其總額ハ十萬文ノ外ニ踰ルヲ得ス

本款入港届書ニハ船名噸數(或ハ石數)船長ノ姓名乘組水夫人員船客ノ姓名員數仕出港名發航ノ年月日及ヒ入港ノ年月日時ヲ詳記シ船長或ハ其代理人之ニ記名調印スヘシ又積荷目錄ニハ積荷物ノ記號番號箇數品名及ヒ荷主ノ姓名ヲ詳記シ其正確ナル旨ヲ保證シ船長或ハ其代理人之ニ記名調印スヘシ又船用品及ヒ自餘ノ免稅品目錄ニモ船長或ハ其代理人記名調印スヘシ但諸届書及ヒ其他ノ書類共何レモ日本國文ヲ用ヒ譯文ヲ副ルコトナシ

第三款 積荷目錄ノ遺漏若クハ錯誤ハ入港手數ヲ畢リテヨリ二十四時以內ナレハ之ヲ書入レ或ハ書改ムルヲ得若シ此時限ヲ過ルト

キハ手数料七千文ヲ納ムルニアラザレハ之ヲ書入レ又書改ムルヲ得ス又右ノ時限ヲ過キ誤脱アルヲ知ラスシテ陸揚スル者ハ其物品ニ課スヘキ税ノ二倍ヲ徴ス

第四款 入港手數ヲ畢レハ即時ニ海關長ヨリ開船免狀ヲ付與スヘシ船長或ハ代理人ハ此免狀ヲ本船ヲ監守スル海關官吏ニ示シテ船口其他ノ開封ヲ乞フヘシ若シ擅ニ其封鎖ヲ破開スルコトアレハ何人ノ所爲タルヲ問ハス其船長ニ三萬文ノ罰金ヲ課スヘシ

第五款 輸入荷物ヲ陸揚シ或ハ輸出荷物ヲ船積セント欲スル者ハ先ツ陸揚願書又ハ船積願書ニ仕入書ヲ添ヘ(仕入書ナル者ハ荷物仕入ノ年月日及ヒ地名並ニ其實價及ヒ包裝費日錢保險料運賃其他ノ諸雜費ヲ詳記シ其買主或ハ所有主又ハ船積セシ者或ハ代理人ノ記名調印セシモノヲ云)海關ニ指出スヘシ然ルトキハ海關官吏ハ速カニ陸揚免狀或ハ船積免狀ヲ交付スヘシ荷物ヲ船卸シ又ハ船積スルニハ先ツ此免狀ヲ本船ヲ監守スル所ノ海關官吏ニ示スヲ要ス又荷物ヲ船移スル者モ右ニ准シテ海關ノ免許ヲ受クヘシ

陸揚願書又ハ船積願書ニハ其輸入船又ハ輸出船ノ名及ヒ其荷物ノ記號番號品種等ヲ詳記シ且海關ノ收税ヲ害スヘキ物品ヲ隱匿

第六款 日没ヨリ日出マテハ海關ノ特許ヲ受クルニ非サレハ荷物ノ陸揚船積又ハ船移スルヲ得ス且海關官吏ハ日没ヨリ日出マテノ間船口ヲ封鎖シ其他荷物ノ在ル處ニハ相當ノ取締ヲ爲シ置クヘシ若シ該官吏ノ許可ナクシテ其封鎖ヲ開キ或ハ取締ヲ破ル者アレハ其船長ニ三萬文ノ罰金ヲ課スヘシ

第七款 若シ海關ノ免狀ヲ得スシテ荷物ヲ陸揚船積若クハ船移スルモノ或ハ海關ノ免許ナクシテ兩國議定ノ埠頭外ヨリ荷物ヲ陸揚シ若クハ積出ス者アラハ並ニ本品ヲ沒收スヘシ

第八款 日本人民ハ通商各港ニ於テ荷物ヲ運搬シ或ハ船客ヲ送迎スル爲メ相對ノ約束ニテ朝鮮ノ舟車人夫等ヲ雇入ル、コトヲ得ヘシ朝鮮官吏ニ於テハ決シテ之ニ干渉セス又何船何人ト制限ヲ立ルカ如キコトアルヘカラス但日本商民若シ其雇方ニ差支ヘ海關ニ願出ルトキハ海關ニ於テ相當ノ周旋ヲナスヘシ

第九款 輸出入品トモ其通關ノ時本書附錄ノ稅則ニ從ヒ海關稅ヲ納ムヘシ又船中自用品ト雖田之ヲ陸揚シテ賣拂フトキハ稅則ニ照シテ納稅スヘシ但從價稅ヲ徵收スルトキハ荷物ノ產出地若クハ製造



地ニ於テノ實價ニ該地ヨリ其荷物ヲ陸揚スル港マテノ運送費保險料及ヒ口錢等ノ諸費ヲ合算シ之ヲ原價トナシ其定則ノ稅ヲ賦課スヘシ

第十款 税金ノ過納或ハ不足納ノコトアリトモ納稅ノ日ヨリ三十日ヲ過キサル間ハ海關ヨリハ其不足ヲ追收シ又納人ヨリハ其過納ノ返還ヲ請求スルコトヲ得ヘシ但荷物入量ノ不足又ハ損傷ヲ發見シタルカ爲メ過納稅ノ返還ヲ乞フ者アリモ荷物通關後ハ之ヲ許サズ  
第十一款 海關官吏ハ輸出入荷物ノ全部又ハ一部ヲ荷物改所ニテ檢査スヘシ其運搬ノ費用ハ荷主ノ自辨タリ若シ荷物ヲ荷物改所ノ外ニ持往キ檢査スルトキハ其費用ハ海關ノ支辨タルヘシ又海關官吏ハ物品ノ損壞セサル様細心ニ之ヲ取扱ヒ檢査ヲ畢ラハ其荷物ヲ成ルヘキ丈ケ儘ノ如クニ包裝スヘシ且檢査ノ爲メ徒ニ時間ヲ費スコト莫ルヘシ若シ檢査ノ時不注意ニ因リ損毀ヲ致スコトアラハ海關之ヲ賠償スヘシ

第十二款 海關長若シ輸出入人ノ申立テタル價格ヲ不充分ナリト思フトキハ海關鑑定役ノ鑒定價格ニ從テ納稅セシムヘシ若シ輸出入人其鑒定ニ服セサルトキハ二十四時内ニ其次第ヲ海關長ニ申出ツ  
ヘシ然ルトキハ海關長ハ輸出入人ヲシテ自ラ評價人ヲ撰定シ其評價ニ從テ再度申立ヲ爲サシムヘシ海關長ハ其再度申立テタル評定價格ニ從テ稅ヲ課スルモ又ハ評定價格ニ其百分ノ五ヲ加ヘ本品ヲ買上ルモ自由トス但之ヲ買上ルニ於テハ再度申立ノ日ヨリ五日以内ニ其代價ヲ拂濟スヘシ

第十三款 輸入貨物ノ途中ニテ損傷シタルモノアレハ輸入人ハ其趣ヲ海關ニ届出テ二人以上ノ正實ナル鑑定人ヲ擇ヒテ其損高ヲ鑒定セシメ各包ノ記號番號ト其損高ヲ記載シタル證書ヲ認メ鑑定人ヲシテ之ニ調印セシメ之ヲ陸揚願書ニ添テ海關ニ差出シ減稅ヲ請フヘシ但シ此場合ト雖モ第十款ニ載スル如ク更ニ鑒定評價スルヲ妨ケス

第十四款 若シ陸揚願書或ハ船積願書ニ載セサル物品ヲ荷物ノ内ニ隠シテ關稅ヲ逋脱セント謀ル者アラハ該品ヲ官ニ沒收スヘシ又若シ荷物ノ品種數量等ヲ偽リ或ハ可稅品ヲ免稅品目錄中ニ混記シテ關稅ヲ逋脱シ又ハ減少セント謀ル者アラハ相當ノ關稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其逋脱若クハ減少セント謀リタル税金高ノ五倍ヲ課スヘシ

第十五款 船中乗組人及ヒ旅客ノ自用品ヲ陸揚或ハ船積スルニハ海關ノ免狀ヲ請フニ及ハス然レモ海關官吏ニ於テ其ノ品々ヲ検査シ若シ自用ト認メ難キ過分ノ可稅品ヲ所持スルトキハ稅目ニ照シ之ニ相當ノ稅ヲ課スヘシ又旅具中ニ禁制品ヲ隱スモノハ本品ヲ沒收シ阿片ノ如キハ第三十六款ニ從テ處分スヘシ

第十六款 日本公使館所用ノ物品ニハ總テ關稅ヲ課スルコトナク且之ヲ検査スルコト莫ルヘシ

第十七款 爆發質若クハ危險質ニ係ル荷物ノ揚卸場ハ豫メ之ヲ定メ置キ其場所ノ外之ヲ揚卸スルヲ許サス

第十八款 朝鮮國ノ通商港ニ輸入シタル關稅納濟ノ諸物品ハ之ヲ朝鮮國ノ諸部ニ輸送スルニ當テ運送稅或ハ内地通關稅其他一切ノ稅ヲ賦課スルコト莫ルヘシ又輸出ノ爲メニ朝鮮國ノ各部ヨリ通商港ヘ運送スル所ノ物品ニモ右同様運送稅内地通關稅其他一切ノ稅ヲ課セサルヘシ

第十九款 輸入物品關稅納濟ノ後更メテ之ヲ他ノ開港場ヘ轉送セントスル者アラハ其荷物ヲ解開ケ若クハ物品ヲ抽キ換ヘ或ハ挿シ入レタルコトヲ海關ニ於テ見届ケタル上ハ納

稅濟手形ヲ渡スヘシ他港ノ海關ニテハ其荷物ヲ右ノ手形ニ引合セテ相違ナケレハ重テ輸入稅ヲ課スルコトナシ若シ物品ヲ抽キ換ヘ或ハ挿入レタル等ノ事アラハ其抽キ換ヘ若クハ挿シ入レタル物品ニ付相當ノ稅ヲ納メシメタル上罰金トシテ其稅額五倍ノ金高ヲ課スヘシ

第二十款 輸入物品荷主引取タル後之ヲ積戻サンコトヲ請フ者アルトキハ海關ニテ之ヲ検査シ果シテ輸入品ニ相違ナキノ証左アレハ輸出稅ヲ課スルコトナク其積戻ヲ許スヘシ

第二十一款 日本商船朝鮮國ノ通商港ヘ積ミ回ル朝鮮國產物ハ最初朝鮮港ヨリ輸出セシ時ノ性質及ヒ有様ヲ變換セズ又ハ其輸出ヨリ起算シテ三周年ヲ經過セズ且其輸出ノ時受取タル船積免狀ヲ相添ヘ輸入人ニ於テ其朝鮮國產物タルコトヲ証明スルニ於テハ無稅通關ヲ許スヘシ

第二十二款 朝鮮國沿海運輸ノ便相整フ迄テノ間日本國商船ハ其何國ノ物品タルヲ問ハス之レヲ搭載シ通商各港ノ間ヲ往來スルヲ得ヘシ但シ各通商港ニテ買入タル朝鮮產物ヲ朝鮮國ノ他ノ商港ヘ輸送セント欲スルトキハ其物品ノ輸出稅ニ等シキ金額又ハ其金額ヲ

擔保スヘキ相當ノ保証人(稅關長ノ満足スヘキ者)ヲ選ミ其証書ヲ其輸出港ノ海關ニ預ケ置キ而シテ他ノ通商港ニ到リテ右物品ヲ陸揚スルトキ陸揚証書ヲ其港ノ海關ヨリ受取リ(尤輸入稅ヲ拂フコトナシ)輸出ノ日ヨリ六ヶ月以内ニ之ヲ輸出港ノ海關ヘ指出シ最初預ケ置キタル金額ヲ請戻シ又ハ証書ノ返却ヲ乞フヘシ然レトモ若シ其輸送船ノ難破ニ遭フコトアレハ輸出ノ日ヨリ一ケ年内ニ右証書ノ代リトシテ日本領事官ノ確認シタル破難証明書ヲ差出スヘシ但朝鮮國ノ船隻不足ナキ日ニ至レハ此口ノ貨物ヲ彼ノ口ヘ運載スルニ他國ノ船隻ヲ用ヒス

第二十三款 各通商港海關ノ荷物ヲ取扱所ニハ朝鮮政府ニテ上屋ヲ建設シ且又輸出入荷物等ヲ預置クヘキ借庫ヲ築造スヘシ尤藏敷料及ヒ其他ノ事ハ別ニ其規則ヲ協議設定スヘシ

第二十四款 輸入荷物ノ稅ヲ納メシテ之レヲ海關倉庫ニ預ケント欲スルモノハ倉庫規則ニ從ヒ海關長ノ免許ヲ受ケサルヘカラズ然ルトキハ右荷物ヲ再ヒ日本國ヘ積戻サントスルトキハ其マ、輸出タルヲ得ヘシ又既ニ納稅シタル荷物ト雖トモ右倉庫内ヨリ直チニ積戻ニ於テハ其既納ノ稅金ヲ返還スヘシ尤一旦荷主ソ許ニ引取タ

ル荷物ハ第二十款ノ例ニ據ルヘシ但朝鮮政府ニテ借庫ヲ建築セサル間ハ荷物ヲ引取リタル後ト雖トモ原包ノマ、ナレハ海關ニ於テ既納ノ輸入稅ヲ還付シ積戻スコトヲ許スヘシ尤一ケ年ヲ過ル者ハ第二十款ノ例ニ同シ

第二十五款 日本商船修復ノ爲メ其積荷ヲ陸揚スヘキコトアラハ關稅ヲ納メズシテ之ヲ陸揚シ海關所轄ノ上屋或ハ倉庫ニ入置キ(但藏敷料及諸雜費ハ船長ヨリ支辨スヘシ)修復濟ノ後之ヲ船積スルコトヲ得ヘシ然レモ若シ其荷物ヲ賣拂フコトアラハ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ又朝鮮海邊ニテ破損シタル船舶ノ船具及ヒ船用品ヲ賣却スルトキハ其輸入稅ヲ免除スヘシ

第二十六款 日本商船出港セント欲セハ拔錨前ニ船長或ハ其代理人ヨリ先ツ出港届書及ヒ輸出積荷目錄ヲ海關ニ差出シ領事ノ船書預証書ヲ請戻シ出港免狀ヲ得テ後出港スヘシ

第二十七款 出港ノ手數ヲ爲シ了リタル船舶都合ニ由リ再ヒ荷物ヲ船積シ若クハ船卸シセント欲スルトキハ更ニ入港ノ手數ヲナシ出港スルトキハ亦出港ノ手數ヲナスヘシ又出港手數ノ濟ミタル上出港時期ニ及フト雖モ拔錨シ能ハサルトキハ船長或ハ其ノ代理人ヨ

リ其旨ヲ海關ニ届出テ認可ヲ受クヘシ  
 第二十八款 船長出港免狀ヲ得ント欲スルモ海關諸規則ニ違犯スルノ事件アリテ未タ裁判ヲ經サル間ハ海關ニ於テ之ヲ與ヘサルヘシ尤領事官ニ於テ船長ニ至當ノ引受人ヲ立シムルカ又ハ相當ノ保証金ヲ出サシメタル上海關長ニ通牒スルトキハ海關長ハ出港免狀ヲ與フヘシ

第二十九款 郵船ハ同日若クハ同時ニ入港手數ト出港手數ヲ爲スコトヲ得ヘシ又輸入積荷目錄ニハ其港ニ於テ陸揚シ若クハ船移スル所ノ荷物ノ外之ヲ掲記スルコトヲ要セス又輸出積荷目錄ハ船長ヨリ差出シ能ハサルトキハ其郵船會社ノ代理人ヨリ出港後三日内ニ之ヲ指出スモ妨ケナシ

第三十款 船中ノ需用品ヲ求ムル爲メ若クハ災厄ヲ避ル爲メ朝鮮ノ通商港ニ立寄リタル日本商船或ハ漁船ハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲スニ及ハス但斯ノ如キ船舶ト雖トモ二十四時以上碇泊スルルハ其次第ヲ海關ヘ届出ツヘシ尤引續キ貿易ヲ爲ストキハ必ス第二款ノ規則ニ從フヲ要ス

第三十一款 朝鮮政府ニ於テ後來通商各港内ヲ修理シ及ヒ燈臺礁標ヲ設クヘシ尤之ヲ維持スル費用ニ充ツルカ爲メ日本商船ノ各通商港ニ來航スルモノハ噸稅トシテ每噸百二十五文ツ、ヲ納ムヘシ(但何石積ト稱スル船ハ日本ノ六石五斗五升ヲ以テ一噸ト算定スヘシ)右噸稅ヲ納レハ海關ヨリ四ヶ月限ノ手形ヲ渡シ右期限内ハ朝鮮國內何レノ通商港ニ到ルトモ復タ噸稅ヲ納ムルニ及ハス又入港ノ商船荷物ヲ陸揚セスシテ他所ニ赴カントスルモノ二日内ニ出港スルトキハ噸稅ヲ納ムルニ及ハス尤風雨或ハ大霧等ニテ出港シ難キモノハ其次第ヲ海關ニ届出ツヘシ但漁船ハ噸稅ヲ納メス尤噸稅ハ他國ノ商船若シ日本船ト全數ノ多キニ至レハ公同協議シテ改定スルコト有ルヘシ

第三十二款 軍艦其他日本政府ニ屬シ商品ヲ搭載セサル船舶ノ朝鮮國通商港ニ到ルモノハ入港手數及ヒ出港手數ヲ爲ナスコトナク又噸稅ヲ拂フコトナク且海關官吏之ヲ監守スルコト莫ルヘシ然レトモ其船中所用品ノ内不用ノ分ヲ陸揚シテ之ヲ賣拂フトキハ其買主ヨリ之ヲ海關ニ届出テ相當ノ關稅ヲ納ムヘシ

第三十三款 日本商船若シ朝鮮國ノ不開港場ニ於テ密商シ或ハ密商セント謀ルモノアラハ該商品ハ勿論其搭載スル所ノ商品ヲ朝鮮政

府ニ沒收シ船長ニ五十萬文ノ罰金ヲ課スヘシ但風波ノ難ヲ避ケ或ハ薪水食料ヲ求ムル爲メニ一時寄泊スル者ハ此例ニ非ス

第三十四款 朝鮮國政府又ハ人民ニテ荷物人員等ヲ不開口岸ニ運送セント欲スルハ日本商船ヲ雇入ル、コトヲ得ヘシ雇主若シ人民ナレハ朝鮮國政府ノ免狀ヲ得テ之ヲ備使スヘシ

第三十五款 此規則中ニ掲クル所ノ罰金沒收及ヒ其他ノ罰則ニ關スル事件ハ海關長ノ告訴ニ因リ日本領事官ニ於テ之ヲ裁斷スヘシ尤其ノ取立タル罰金及ヒ沒收シタル物品ハ總テ朝鮮政府ノ收領スル所トス故ヘニ朝鮮官吏ノ差押ヘタル物品ハ該官吏ト日本領事官ト立會ノ上ニテ之レニ封印ヲ施コシ裁斷了ルマテ海關ニ留置クヘシ若シ領事官ニ於テ之ヲ無罰ニ決スルトキハ其物品ハ領事ヲ經テ荷主ヘ引渡スコト勿論タリト雖トモ朝鮮官吏若シ其裁判ニ服セサルトキハ日本國相當ノ裁判所ヘ控訴スヘシ然ルトキハ荷主ハ其物品ノ代價ヲ裁判完結ニ至ルマテ領事館ニ預ケ置クヘシ若シ其差押ユル所ノ物品腐敗質變態質或ハ危險質ニ係レハ其代價ヲ領事館ニ預リ置キ物品ハ荷主ニ渡スヘシ

第三十六款 鴉片ハ輸入ヲ嚴禁ス若シ鴉片ヲ密輸シ或ハ密輸セント

謀ルモノアラハ其品沒收ノ上密輸高一斤ニ付七千文ツ、ノ罰金ヲ課スヘシ但朝鮮政府需用ノ爲メ輸入スルカ又ハ在留日本人民藥用ノ爲メニ日本領事官ノ証明ヲ經テ輸入スルモノハ此限ニアラス

第三十七款 若シ朝鮮國水旱或ハ兵擾等ノ事故アリ境内缺食ヲ致スヲ恐レ朝鮮政府暫ク米糧ノ輸出ヲ禁セント欲セハ須ク其期ニ先タツ一ケ月前ニ於テ地方官ヨリ日本領事官ニ照知スヘシ然ルトキハ豫メ其期ヲ在各港ノ日本商民ニ轉示シ一體遵守セシムヘシ米穀類ハ進口出口トモニ五分稅ヲ課スト雖トモ如シ朝鮮國ニ災荒アリテ進口ヲ要シ或ハ日本國ニ災荒アリテ出口ヲ要スルトキハ照知ヲ經テ進出稅ヲ免スヘシ

第三十八款 大小砲銃諸種彈丸火藥雷粉其他一切ノ軍器ハ朝鮮政府又ハ朝鮮政府ヨリ軍器買入ノ免許ヲ受ケタル朝鮮人ヲ除クノ外朝鮮人民ヘ賣渡スコトヲ許サス若シ之ヲ密賣スル者アラハ其品ヲ沒收スヘシ

第三十九款 此規則中罰科ヲ掲ケサル條款ニ違背スル者アルトキハ壹萬五千文以下ノ罰金ヲ課スヘシ

第四十款 此規則ニ定ムル所ノ稅銀及ヒ罰金ハ朝鮮銅錢ヲ以テ之ヲ

納ムヘシ或ハ日本銀貨ヲ以テ時ノ相場ニ從ヒ換用スヘシ尤墨斯哥弗ハ日本銀貨ト同價ナルヲ以テ之ヲ換用スルモ亦妨ケナシ又第二第三第四第六第三十三ノ諸款ニ掲クル所ノ罰金及ヒ手数料ハ其商船五百噸以下ハ二分ノ一ヲ科シ五拾噸以下ハ四分ノ一ヲ科スヘシ第四十一款 日本國漁船ハ期鮮國全羅慶尙江原咸鏡ノ四道朝鮮國漁船ハ日本國肥前筑前長門(朝鮮海ニ面スル所)石見出雲對馬ノ海濱ニ往來捕魚スルヲ聽スト雖トモ私ニ貨物ヲ以テ貿易スルヲ許サス違フ者ハ其品ヲ沒收スヘシ但其所獲ノ魚介ヲ賣買スルハ此例ニ非ス其彼此應納ノ魚稅及ヒ其他ノ細目ニ至テハ遵行兩年ノ後其景況ニ隨ヒ更ニ協議酌定スヘシ

第四十二款 此規則ハ調印ノ日ヨリ百日内ニ日本朝鮮兩政府ノ允准ヲ經ヘキモノニシテ右百日經過ノ後直チニ之ヲ實踐スヘシ然ルトキハ從來ノ貿易規則及ヒ其他ノ諸約書中此規則ノ諸條款ニ抵觸スルモノハ總テ其効ヲ失フモノトス尤現時若クハ後來朝鮮政府何等ノ權利特典及ヒ惠政恩遇ニ論ナク他國官民ニ施及スルモノアラハ日本國官民モ亦猶豫ナク一體均霑スルヲ得又此規則ハ實踐ノ日ヨリ五箇年ヲ以テ期トス故ニ其ノ滿期前ニ於テ兩國政府更ニ協議ヲ

遂ケ新規則ヲ設立スルヲ要ス但若シ協議中其ノ期ヲ過クルコトアルモ新規則設立マテハ此ノ規則ニ據テ辦理スルモノトス且又兩國ノ官吏此ノ規則内ニ掲載セサル條款ヲ增加スルヲ以テ彼此共ニ必要ト考フ時ハ隨時商議ヲ開クヲ得ヘシ  
右証據トシテ兩國ノ全權大臣此條約ニ名ヲ記シ印ヲ調スル者也  
大日本國明治十六年七月二十五日  
大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辦理公使竹添進一郎印  
全權大臣督辦交涉通商事務閔泳穆印

朝鮮國海關稅目  
輸入之部

- 第一 藥材製藥及香料
  - 五分稅 (從價)
    - 一藥材 他項ニ掲ル者ヲ除ク
    - 一膠(各種) 一樟腦
    - 一諸製藥類
    - 一明礬
  - 壹割稅 (從價)
    - 一龍腦
    - 一丁香
    - 一麝香

<ul style="list-style-type: none"> <li>○貳割稅 (從價)</li> <li>一安息香</li> <li>一乳香</li> <li>一沉香</li> <li>一白檀</li> <li>一甘松</li> <li>一線香</li> <li>一其外香料</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>第二 染料及顏料</li> <li>○八分稅 (從價)</li> <li>一乾藍水藍</li> <li>一漆</li> <li>一蘇木及蘇木越幾斯</li> <li>一五倍子</li> <li>一紅花</li> <li>一染粉</li> <li>一其他別項ニ掲</li> <li>載セサル一切ノ染料</li> <li>一色油</li> <li>一各色鉛粉</li> <li>及亞鉛粉</li> <li>一洋漆</li> <li>一紺青</li> <li>一雌黃</li> <li>一郡青</li> <li>一綠青</li> <li>一朱</li> <li>一其他別項ニ掲載</li> <li>セサル一切ノ顏料</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>第三 金屬及金屬製品類</li> <li>○五分稅 (從價)</li> <li>一日本銅</li> <li>○八分稅 (從價)</li> <li>一鍍、鋼、鉛、錫、汞、夾金其他別項ニ掲ケサル諸金屬類(塊錠條桿板葉等ノ別ナク)</li> <li>一鐵線及銅線</li> <li>一銅鐵釘類</li> <li>一水銀</li> </ul>	

<ul style="list-style-type: none"> <li>一ツルター</li> <li>一白銅</li> <li>一アンチモニー</li> <li>一鍋釜刀物及鉄製アリキ製其他總テ金屬製品類</li> <li>○壹割稅 (從價)</li> <li>一金銀銅錫ノ箔類</li> <li>○貳割稅 (從價)</li> <li>一金銀器及鍍金銀器</li> <li>第四 油蠟脂類</li> <li>○五分稅 (從價)</li> <li>一石炭油</li> <li>○八分稅 (從價)</li> <li>一諸種ノ油別項ニ掲ケサルモノ</li> <li>一蜜蠟木蠟</li> <li>一瀝青及タール</li> <li>一獸蠟</li> <li>一其他別項ニ掲載セサル一切ノ油蠟脂類</li> <li>一椿ノ油</li> <li>一レーア</li> <li>一セサナン</li> <li>一蠟燭</li> <li>一髮付油</li> <li>一氣油</li> <li>第五 布帛類</li> <li>○八分稅 (從價)</li> <li>一海黃</li> <li>一綉</li> <li>一綸子</li> <li>一生平</li> </ul>	
--	--

- 一郡内
- 一絹紹
- 一純子、綿子、綿紋子、綿綸子
- 一生金巾
- 一白金巾
- 一唐棧
- 一雲齋小倉織紋
- 羽類
- 一天竺布
- 一寒冷紗
- 一緋金巾、色金巾
- 紋金巾、綾金巾
- 一左良紗
- 一綿紹
- 一綿天鵝絨
- 一紋疋巾、襪巾
- 一純毛吳呂
- 一綾吳呂
- 一畔呂
- 一フヲチル(純駁ノ別ナク)
- 一モヘイル(全)
- 一毛縞子
- 一縮緬吳呂(純駁ノ別ナク)
- 一純毛羅紗
- 一綿毛羅紗
- 一毛純子羅世板セルチス、スバニスライプス(純駁ノ別ナク)
- 一アルバカ
- 一麻布麻綿布、及麻毛布類(生色白色ノ別ナク)
- 一臥氈
- 一帆布(綿麻共)
- 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ絹綿毛及麻布ノ類
- 一油布蠟布
- 壹割稅 (從價)
- 一紗
- 一縮緬
- 一琥珀
- 一羽二重
- 一緞子、縞子、綾類
- 貳割稅 (從價)
- 一天鵝絨
- 一諸種地氈類
- 第六 文具紙類

- 五分稅 (從價)
- 一日本人自用雜紙
- 八分稅 (從價)
- 一印刷用洋紙(何國製ニ拘ラス)
- 一包裝用洋紙
- 一諸日本紙
- 一墨池、封筒、鉛筆、洋筆、毛筆、石磬等
- 一各種墨
- 壹割稅 (從價)
- 一色紙
- 一紋紙
- 一印材
- 一印肉
- 一其他別項ニ掲載セサル一切ノ文具紙類
- 第七 飲食物及烟草類
- 五分稅 (從價)
- 一穀物穀粉
- 一生水菓
- 一日本人所食ノ物
- 一味噌醬油及酢
- 八分稅 (從價)
- 一鹽
- 一茶
- 一醃肉、醃魚、及罐詰食料
- 一素麵
- 一葛粉
- 一寒天
- 一浴花生豆
- 一檸檬水、生姜水、曹達水及諸飲料類
- 一其他別項ニ掲



載セサル一切ノ飲食物類	一白黑砂糖	一糖蜜糖水
一日本酒	一清國酒	一林檎酒
○壹割稅 (從價)		
一麥酒(諸酒ノ)一赤白葡萄酒		
○壹割五分稅 (從價)		
一冰糖精製糖	一果子類	
○貳割稅 (從價)		
一卷烟草紙卷烟草其他一切ノ烟葉		
○貳割五分稅 (從價)		
一ウエルムート	一ポルト	一シモリ
○三割稅 (從價)		
一ブランド	一ウイスキー	一シヤンペイン
一杜松子酒	一リキウル	一糖酒
一其他別項ニ掲載セサル一切ノ酒類		一燒酎及泡盛
第八 雜貨		
○五分稅 (從價)		
一石炭及コークス		一日本人常用器具

一家根板	一襖、障子	一疊	一石灰
一砥石	一砂紙	一摺附木	一諸石鹼類
一靴其他履及傘		一提灯	一膳、椀、重箱、鏡
一臺、箆筒、盆及總テ木製器具		一日本人建造房屋用竹木材	
○八分稅 (從價)			
一木材竹材石材	一煉化石及瓦	一皮、骨、牙、蹄、羽毛類(工ヲ經サ	
ルモノ	一木炭	一籐	一綿莢
一綿糸	一糸系、鬘斗系、屑糸		一天蠶糸
一羊毛其他獸毛	一苧麻	一運貨車船	一金剛砂
一綿子、菓子、麻子、亞麻子		一胡麻子	一燈心
一弗箱	一器械	一食器用、磁器陶器類	
一別項ニ掲載セサル一切ノ雜貨		一臥床、椅子、其他家具	
一衣服帽襪其他服飾品		一目鏡	一象牙及一角牙
一扇及團扇類	一齒磨	一窓玻璃及玻璃片	
一洋燈及其部分			
○壹割稅 (從價)			
一熟皮類	一馬具及馬車	一諸玻璃器類(別項ニ載セサル者)	

一 鏡類(廊ノ有無ニ拘ラス)	一 紫檀、黑檀、テイクス木、黃揚木、鉄
一 刀木及總テ堅硬木	一 蝙蝠傘(絹製鐵幹)
一 旅櫃、提囊、及佩袋類	一 寫真器
一 鈕釦扣子類	一 鑛山使用ノ爆發物
○壹割五分稅 (從價)	
一 烟管及烟囊	一 袋物類
○貳割稅 (從價)	一 毛皮、狐、獺、獺、海狸、兔等ノ類
一 蒔繪シタル漆器類	一 玩具
一 時辰鐘、及時辰表並其部分品類	一 首飾品
○貳割五分稅 (從價)	
一 寫真	一 花筒、置物其他室内裝飾品ニ屬スルモノ
一 鑿甲細工類	一 繪畫(裝ノ有無ニ拘ラス)
○三割稅 (從價)	一 彫刻物
一 烟花類	一 玻璃珠
一 珊瑚珠	一 眞珠及寶石類
一 戲品	一 衝球象棋骨牌
	一 其他一切ノ遊
第九 船舶	
一 蒸氣船	每噸 銅錢貳百五十文
一 風帆船	每噸 銅錢百貳十五文
第十 免稅品	
一 貨幣	一金銀地金
一 當ノ額數	一新聞紙
一 招牌	一 修藝勸業ノ雛形類
一 醫術用器具	一 尺度、衡量、寒暖計、晴雨儀、驗液器、針盤其他學術用器具並其使用品
一 消防器具	一 船用具、若レ不用ノ者ヲ陸上シテ競賣スル者ハ仍ホ定稅ヲ徵ス
一 鴉片(藥用鴉片ヲ除ク)	一 偽藥
一 淫猥私褻ノ畫圖肖像	一 軍器類(凡ソ軍械ノ式樣及ヒ防身ノ物件ハ須ラク領事官ニテ朝官ノ准單ヲ收到シタル上方ニ進口ヲ准ス但出賣スルヲ准サス)
第十一 禁制品	
朝鮮國海關稅目	
輸出ノ部	

○免稅

一貨幣

一金銀地金及砂金

一旅客行李ノ具

○五分稅 (從價)

一紅蔘(朝鮮ノ商民日本ニ帶入スルトキハ應ニ一割五分ノ稅ヲ納ムヘシ若シ日本ノ商民朝鮮政府ノ特許ヲ經スシテ私カニ輸出スル者アレハ查出沒收スヘシ)

右証據トシテ兩國ノ全權大臣此稅目ニ名ヲ記シ印ヲ蓋スル者也  
大日本國明治十六年七月二十五日  
大朝鮮國開國四百九十二年六月二十二日

全權大臣辨理公使竹添進一郎印

全權大臣督辦交涉通商事務閱泳穆印

○第二節 全手續

明治十六年十二月

第四十號布告

明治十七年二月一日ヨリ明治九年(十月)第百二十九號布告ヲ廢止候條朝鮮國トノ貿易ハ總テ他ノ外國貿易ノ手續ニ依ルヘシ

但當分ノ内各開港場ノ外長崎縣下對馬國嚴原山口縣下長門國下ノ關福岡縣下筑前國博多ノ三港ニ限リ朝鮮國貿易ニ關スル日本人所有ノ船舶ノ出入及貨物ノ積卸ヲ許シ日本形船舶ニ限リ出港

手數料トシテ正金壹圓入港手數料トシテ正金貳圓ヲ徵收ス  
右奉 勅旨布告候事

○第三節 朝鮮國渡航

朝鮮國渡航  
通商ノ事

明治十五年十二月  
第三十號布達

明治九年二月朝鮮國ト取結ヒタル修好條規第五款ノ旨趣ニ從ヒ兩國人民通商ノ爲メ朝鮮國ニ於テ開クヘキ二港ノ内京畿道仁川開港相成候條明治十六年一月以後該港ニ渡航通商スルヲ得ヘシ

但該地渡航ノ者ハ明治九年(十月)第百廿八號第百廿九號布告ニ從フヘシ

右布達候事

第二章

○第一節 金銀分析

金銀分析

五年三月第六  
十八號布告

金銀分析ノ儀自今無願營業禁止候條地方官ニ於テ不取締無之様可致候尤開業致度段願出候者有之候ハ、其者ノ身元並ニ開業ノ規則等詳細取調大藏省ヘ可伺出候事

○第二節 銘紙贋造

銘紙贋造

十年二月内務  
省丙第十號達東京府大阪府五港

諸印紙類贋造制禁ノ儀ハ人民熟知ノ筈ニ有之候所往々舶來麥酒等ヘ

貼付ノ銘紙ヲ偽造シ販賣致シ候向モ有之哉ニ相聞候條以來古銘紙等  
贋造不致様管下人民へ可相達此旨相達候事

沿革改 廢索引	伺指令及請訓 内訓	整頓沿革 改廢索引 伺指令 類聚	現行 改正大日本六法類編 訴訟
<p>日本 法學士 正六位 磯部 四郎 訂正          佛國 法學士 正七位 矢代 操 編纂          日本法律學士 島 巨邦 校正</p>			

### 第四編 訴訟

#### 第一類 [裁判所]

##### 第一章 位地事務

##### ○第一節 各裁判所位地及管轄區畫

明治十四年(十月)第五十三號同十五年(六月)第二十八號布告各裁判所ノ位置及ヒ管轄區畫別表ノ通改定シ始審裁判所支廳ハ本廳同一ノ權限ヲ以テ裁判セシム但明治十六年二月一日ヨリ施行ス

#### 裁判所一覽表

控 始 審	治 安 府	縣 國 名	區 郡 名
訴 本 廳 支 廳			

第四編○訴訟○第一類○裁判所○各裁判所位地及管轄區畫

第四編〇訴訟〇第一類〇裁判所〇各裁判所位地及管轄區畫

控					訴					裁			
栃木		浦和		前橋		静岡			甲府				
宇都宮		熊谷		大宮		沼津			掛川				
栃木縣		埼玉縣		群馬縣		静岡縣			山梨縣				
下野		武藏		上野		駿河			遠江				
上都賀 寒川 安蘇 築田 足利		北足立 新庄 入間 高麗 南埼玉 北葛飾 北埼玉 比企 男 衾 横見 大里 榛 澤 旗 羅 兒玉 賀美 那賀 秩父		東群馬 (南北勢多 佐位 那波 利根 吾妻 西群馬) 内 猪野川 以東 碓氷 (南北 井 樂 片岡 綠野 多胡 西群馬) 内 猪野川 以西		新田 山田 邑樂 庵原 有渡 安部 志田 益津 那加 加茂ノ内			駿東 富士 君澤 田方 加茂ノ内 豐田 磐田 長上 敷知 引佐 鹿玉 濱名 山名 周智 城東 佐野 榛原			東 山梨 西 八代 北 南 中 巨摩 南 都留	

大														
水戸			千葉			横濱			東京					
八日市場 八日市場			八王子			八王子			芝 橋區					
茨城縣			千葉縣			神奈川縣			東京府					
武藏			武藏			武藏			武藏					
常陸 下總 常陸 新治 筑波 河内 信太 行方 鹿島ノ内 北相馬			上總 大羽 周准 望陀 安房 全 國 四郡 海上 香取 匝 磯 山邊 武射			相模 津久井 (南北西) 多摩			本所區 深川區 南葛飾 橫濱區 久良岐 橋樹 都筑 三浦 鎌倉 高坐			芝區 麻布區 赤坂區 荏原 東多摩 麴町區 四谷區 牛込區 小石川區 本郷區 南豐島 神田區 下谷區 淺草區 南足立 北豐島		

第四編○訴訟○第一類○裁判所○各裁判所位地及管轄區畫

大阪													
大坂						京都							
奈良						宮津				相川		高田	
五條	奈良	堺	天王寺	中ノ島	宮津	福知山	園部	伏見	京都	相川	糸魚川	高田	
大坂府						京都府							
大和		河内	和泉	攝津	河内	攝津	丹波	山城	佐渡	東頸城			
宇智	吉野	葛上	忍海	高市	高市	丹波	船井	乙訓	紀伊	久世	相樂	綴喜	宇治
添上		添下		廣瀨		丹波		下京區		愛宕			
宇智		吉野		葛上		忍海		高市		高市			
添上		添下		廣瀨		丹波		下京區		愛宕			
宇智		吉野		葛上		忍海		高市		高市			

新瀧													
長岡						長野							
長岡		新瀧				上田		本		飯山		長野	
六日町	柏崎	長岡	村上	新瀧	新瀧	岩村田	上田	福島	大町	本	飯田	松本	飯山
新潟縣						長野縣							
越後						信濃							
南魚沼		古志		北魚沼		三島		刈羽		刈羽		内	
南魚沼		古志		北魚沼		三島		刈羽		刈羽		内	
南魚沼		古志		北魚沼		三島		刈羽		刈羽		内	
南魚沼		古志		北魚沼		三島		刈羽		刈羽		内	

裁		訴				控			
福井		大津		岡山		神戶			
小濱		彦根	津山	津山	豐岡	姫路	洲本		
敦賀	小濱	大野	福井	大津	岡山	岡山	岡山	明石	神戶
福井縣		滋賀縣		岡山縣		兵庫縣			
越前	若狹	越前	近江	美作	備前	備前	播磨	淡路	播磨
若狹	遠敷	大飯	大野	南條今立	丹生	吉田	坂井	足羽	神戶區
敦賀									八部
									原武庫川邊
									有馬

審									
所			判						
高知			德島		和歌山		金澤		
中村	高知		脇町	德島	田邊	和歌山	七尾	富山	金澤
中村	高知		脇町	德島	田邊	和歌山	輪島	魚津	小松
松山	高知縣	土佐	德島縣	阿波	紀伊	和歌山縣	能登	越中	加賀
	播多	安藝	香美	長岡	土佐	吾川	高岡	射水	鹿島

第四編〇訴訟〇第一類〇裁判所〇各裁判所位地及管轄區畫

所 判 裁 訴 控 島 廣														所 判 岐 阜																																													
松江							山口							廣島			岐阜																																										
西郷		濱田		今市			萩 赤間關 岩國 山口							尾道	三廣島		高山	御嵩	大垣	岐阜	美濃																																						
島根縣							山口縣							廣島縣			岐阜縣																																										
隱岐	石見	石見	出雲	出雲	長門			周防	周防	備後	備後	安藝	安藝	飛騨	美濃																																												
全國四郡	那賀	邑智	那賀	安濃	神門	島根	大原	意多	仁多	能義	秋鹿	大津	阿武	見島	赤間關區	厚狹	豐浦	熊毛	大島	玖珂	美禰	佐波	吉敷	安那	神石	御調	甲奴	世羅	深津	品治	沼隈	藤田	高田	三上	三次	三倉	高田	加茂	豐田	廣島區	沼田	安藝	佐伯	山縣	高宮	飛騨	全國三郡			賀茂	可兒	土岐	惠那	海西(上下)石津多藝不破本巢			安八	池田	大野

裁 訴 控 屋 古 名																																															
安濃津						名古屋						松山		宇和島		大洲		西條																													
山田	山田	上野	四日市	安濃津		岡崎	岡崎	一ノ宮	熱田	名古屋	丸龜	高松	宇和島	愛媛縣	高松	大洲	西條	岐阜																													
三重縣						愛知縣						愛媛縣		愛媛縣		愛媛縣		愛媛縣		美濃																											
紀伊	志摩	伊勢	伊勢	伊賀	伊賀	三河	尾張	尾張	尾張	讚岐	讚岐	伊豫	喜多	西宇和	宇摩	新居	周布	桑村	越智																												
厚見	羽栗	各務	中島	方縣	山縣	武儀	郡上	八名	南設樂	寶飯	渥美	額田	碧海	幡豆	西加茂	東加茂	丹羽	葉栗	中島	知多	愛知ノ内	名古屋區	東春日井	海東	海西	愛知ノ内	西春日井	豐田	鵜足	阿野ノ内	阿野ノ内	大内	寒川	三木	山田	香川	小豆	北宇和	東宇和	伊豫	喜多	西宇和	宇摩	新居	周布	桑村	越智



第四編〇訴訟〇第一類〇裁判所〇各裁判所位地及管轄區畫

所		判		裁	
鹿兒島		熊本		大分	
宮崎	鹿兒島	天草	八代	中津	杵築
延岡	大島	天草	山鹿	豆田	大分縣
宮崎	鹿兒島縣	天草	熊本縣	豐後	豐前
日向	大隅	薩摩	肥後	豐後	豐前
臼杵	宮崎	薩摩	山鹿	玖珠	下毛
諸縣ノ内	大隅	薩摩	山鹿	玖珠	宇佐
那珂ノ内	大隅	薩摩	山鹿	玖珠	宇佐
那珂ノ内	大隅	薩摩	山鹿	玖珠	宇佐

訴		控		崎		長	
鳥取		福岡		長崎		長崎	
米子	鳥取	小倉	久留米	嚴原	佐賀	長崎	長崎
米子	鳥取	小倉	久留米	嚴原	佐賀	長崎	長崎
鳥取縣	福岡縣	福岡縣	福岡縣	長崎縣	長崎縣	長崎縣	長崎縣
伯耆	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前
汗入	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前
會見	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前
八橋	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前
日野	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前	肥前

第四編〇訴訟〇第一類〇裁判所〇各裁判所位地及管轄區畫

訴 控 館 函				所 判			
函 館				秋 田			
弘 前				盛 岡			
八 戸				磐 井 磐 井			
壽 都	福 山	江 刺	函 館	八 戸	五 所 河 原	青 森	弘 前
函 館 縣				秋 田 縣			
後 志 島 牧	渡 島 松 前	後 志 久 遠	膽 振 山 越	陸 奥	陸 奥	羽 後 山 本	羽 後 由 利
壽 都 歌 乘 磯 谷		太 櫓 瀬 棚 奥 尻	函 館 區 龜 田 上 磯 茅 部	三 戸 上 北 内	北 津 輕	仙 北 平 鹿 雄 勝	川 邊 南 秋 田
				(西 中 南) 津 輕	東 津 輕 下 北 上 北 内	陸 前 氣 仙	陸 中 東 南 閉 伊

裁 訴 控 城		宮 仙 臺	
山 形		福 島	
酒 田 酒 田	米 澤 米 澤	若 松 若 松	平 白 河 中 村
盛 岡	山 形	福 島 縣	宮 城 縣
羽 前 最 上	羽 前 飽 海	磐 城 宇 多 行 方	陸 前 柴 田
(東 西 南) 置 賜	(東 西) 田 川	磐 城 代 岩 瀨 安 積 内	陸 前 伊 具 亘 理
		磐 城 代 田 村 内	磐 城 信 夫 安 達 伊 達
		越 後 東 蒲 原	桃 生 牡 鹿 登 米 本 吉
		陸 奥 二 戸	陸 前 志 田 加 美 玉 造 栗 原 遠 田
			仙 臺 區 宮 城 名 取 黑 川

院 裁		所					札 幌		石狩 札幌區 全國九郡	
根 室		岩 內		小 樽	增 毛	浦 川	札 幌	膽 振 四 有 珠 室 蘭 幌 別 勇 拂 白 老 千 歲		
厚 岸		根 室		根 室 縣		札 幌 縣		十 勝 全 國 七 郡		
北 見		後 志		天 鹽	北 見	日 高	全 國 七 郡	全 國 七 郡		
鉏 路		古 宇 岩 內		小 樽	宗 谷	利 尻	禮 文	全 國 六 郡		
全 國 七 郡		全 國 八 郡		忍 路	余 市	美 國	積 丹	高 島	全 國 七 郡	
全 國 七 郡		全 國 七 郡		常 呂	紋 別					

○十六年六月第二十號布告

明治十六年(月)第二號布告裁判所一覽表中左ノ通増補改正ス但新置裁判所開廳及實施ノ期日ハ司法卿ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

一富山佐賀宮崎ノ三支廳ヲ各本廳ト爲シ其ノ管轄ハ從前支廳ノ管轄ニ同シ

左ノ始審裁判所ニ支廳ヲ置キ其管轄ハ各該地治安裁判所ノ管轄ニ同シ 千葉始審裁判所管内 木更津

和歌山始審裁判所管内 田邊

岐阜始審裁判所管内 高山

山口始審裁判所管内 赤間關

長崎始審裁判所管内 平戶 福江

鹿兒島始審裁判所管内 大島

仙臺始審裁判所管内 石卷

秋田始審裁判所管内 大曲

浦和始審裁判所管内 川越ニ治安裁判所ヲ置キ武藏國入間高麗ノ兩郡ヲ管轄ス

神戶始審裁判所管内 龍野ニ治安裁判所ヲ置キ播磨國揖西楫東赤穂佐用宍粟ノ五郡ヲ管轄ス

長崎始審裁判所管内 平戶支廳管内 武生水ニ治安裁判所ヲ置キ壹岐國一圓ヲ管轄ス

福岡始審裁判所管内 留米支廳管内 柳川ニ治安裁判所ヲ置キ筑後國三池山門ノ兩郡ヲ管轄ス

熊本始審裁判所管内 牧ニ治安裁判所ヲ置キ肥後國阿蘇郡ヲ管轄ス

秋田始審裁判所管内 大館町ニ治安裁判所ヲ置キ羽後國北秋田郡及ヒ

陸中國鹿角郡ヲ管轄ス

弘前始審裁判所管内鯉ヶ澤ニ治安裁判所ヲ置陸奥國西津輕郡ヲ管轄ス  
水戸始審裁判所土浦支廳管轄中筑波トアルヲ筑波ノ内ト改メ同下妻  
支廳管轄ヘ「筑波ノ内」ノ四字ヲ加フ

京都始審裁判所管内福知山治安裁判所ヲ同宮津支廳ノ管内ニ改ム

金澤始審裁判所管内金澤治安裁判所ノ管轄タル越中ノ國礪波郡ヲ富  
山始審裁判所ノ管内高岡治安裁判所ノ管轄ニ改ム

鹿兒島始審裁判所管内鹿兒島治安裁判所管轄ニ「日向南諸郡」ノ五字  
ヲ加ヘ宮崎始審裁判所管内宮崎治安裁判所及ヒ都城治安裁判所管轄  
中諸縣ノ内トアルヲ各「北諸縣ノ内」ト改ム

○十七年十月第二十七號布告

明治十六年一月第一號布告裁判所一覽表中左ノ通増補改正ス但新置裁  
判所開應ノ期日ハ司法卿ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

一山形始審裁判所酒田支廳管内鶴岡ニ治安裁判所ヲ置キ羽前國東田  
川西田川兩郡ヲ管轄ス

一秋田始審裁判所大曲支廳管内横手ニ治安裁判所ヲ置キ羽後國雄勝  
郡及ヒ平鹿郡ノ内ヲ管轄ス

一千葉始審裁判所木更津支廳管内北條ニ治安裁判所ヲ置キ安房全國  
ヲ管轄ス

一福岡始審裁判所久留米支廳管内久留米治安裁判所管轄郡名中全國  
十郡トアルヲ三潞ノ内上妻下妻生葉竹野山本御原御井ノ十八字ニ  
改メ同柳川治安裁判所管轄中(三潞ノ内)ノ四字ヲ加フ

一秋田始審裁判所大曲支廳管内大曲治安裁判所管轄郡名中平鹿ノ下  
(ノ内)ノ二字ヲ加フ

一宮崎始審裁判所管内宮崎治安裁判所管轄郡名中北諸縣ノ内トアル  
ヲ(東諸縣)ト改メ那珂ノ内トアルヲ(北那珂南那珂ノ内)ト改メ同  
管内都城治安裁判所管轄郡名中北諸縣ノ内トアルヲ(北諸縣)ト改  
メ那珂ノ内トアルヲ(南那珂ノ内)ト改メ更ニ西諸縣ノ三字ヲ加ヘ  
同管内延岡治安裁判所管轄郡名中臼杵トアルヲ(東)臼杵ト改ム

○明治十九年六月三日

朕裁判所管轄區畫表中改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

勅令第四十五號

明治十六年一月第二號布告裁判所管轄區畫表中福島始審裁判所若松支

應管内若松治安裁判所管轄越後國東蒲原郡ヲ新潟始審裁判所新發田支應管内新發田治安裁判所ノ管轄トス

○明治十八年十月太政官第三十二號布告

明治十六年一月第二號布告裁判所一覽表中左ノ通増補改正ス但新置裁判所判開廳ノ期日ハ司法卿ノ告示ヲ以テ之ヲ定ム

一 佐賀始審裁判所管内伊萬里ニ治安裁判所ヲ置キ肥前國西松浦郡ヲ管轄ス

一 長崎始審裁判所管内大村ニ治安裁判所ヲ置キ肥前國東彼杵北高來兩郡ヲ管轄ス

一 鳥取始審裁判所管内倉吉ニ治安裁判所ヲ置キ伯耆國河村久米八橋ノ三郡ヲ管轄ス

一 盛岡始審裁判所管内福岡ニ治安裁判所ヲ置キ陸奥國二戸郡及ヒ陸中國南北九戸郡ヲ管轄ス

○明治十八年十二月太政官第四十號布告

明治十六年一月第二號布告裁判所一覽表中左ノ通改正ス  
一 札幌始審裁判所管内浦河治安裁判所ヲ日高國幌泉郡幌泉ニ移シ幌泉治安裁判所ト稱ス

一日高國沙流新冠靜内ノ三郡ヲ札幌治安裁判所ノ管轄ニ改ム

○明治十六年一月第二號布告裁判所管轄區畫表中福島始審裁判所若松支應管内若松治安裁判所管轄越後國東蒲原郡ヲ新潟始審裁判所新發田支應管内新發田治安裁判所ノ管轄トス

○勅令第六十二號（官報八月二十六日）

明治十六年一月第二號布告裁判所位置及管轄區畫表中左ノ通改正ス

栃木始審裁判所ヲ宇都宮ニ移シ宇都宮始審裁判所ト改稱ス

栃木始審裁判所宇都宮支廳ヲ栃木ニ移シ宇都宮始審裁判所栃木支廳ト改稱ス

栃木始審裁判所管内栃木治安裁判所管轄郡名中<sup>上</sup>都賀<sup>トアルヲ</sup>上都賀ノ内、下都賀ト改メ寒川安蘇築田足利ヲ併テ宇都宮始審裁判所栃木支應管内栃木治安裁判所ノ管轄トス

栃木始審裁判所宇都宮支應管内宇都宮治安裁判所管轄郡名中河内ノ上（上都賀ノ内）ノ五字ヲ加ヘ河内芳賀鹽谷那須ヲ併テ宇都宮始審裁判所管内宇都宮治安裁判所ノ管轄トス

新潟始審裁判所管内新潟治安裁判所管轄郡名中<sup>西</sup>蒲原<sup>トアルヲ</sup>中<sup>南</sup>蒲原<sup>トアルヲ</sup>（<sup>中</sup>西<sup>南</sup>）  
蒲原、南蒲原ノ内ト改ム

新潟始審裁判所長岡支廳管内長岡治安裁判所管轄郡名中(南蒲原ノ内)ノ五字ヲ加フ  
 大阪始審裁判所管内天王寺治安裁判所ノ管轄タル東區テ中ノ島治安裁判所ノ管轄ニ改ム  
 大阪始審裁判所管内中ノ島治安裁判所管轄郡名中西成ノ下ノ内木津川以西)ノ七字ヲ加フ  
 大阪始審裁判所管内天王寺治安裁判所管轄郡名中西成ノ内木津川以東)ノ九字ヲ加フ

○第二節 治安裁判所管轄町村名

明治十六年一月司法省  
 甲第一號告示

本年第二號公布裁判所管轄表中某郡ノ内ト掲載アル町村ノ區域ハ別紙ノ通心得ヘシ  
 右告示候事

治安裁判所管轄區郡分管町村名

水戸治安裁判所

鹿島郡ノ内  
 小堤村 駒場村 神宿村 城ノ内村

海老澤村	宮ヶ崎村	澤尻村	上釜村
成田村	神山村	上下太田村	田崎村
綱掛村	鉾田村	畑田村	白塚村
柏熊村	柏熊新田	徳宿村	塔ヶ崎村
當問村	飯名村	安房村	秋山村
鳥栖村	駒木根村	椴山村	瀧濱村
上下富田村	紅葉村	大和田村	鹿田村
造谷村	荒地村	子生村	勝下村
勝下新田	玉田村	大戸村	安塚村
二重作村	札川村	梶山村	青山村
阿玉村	江川村	中居村	大藏村
飯島村	上澤村	汲上村	臺濁澤村
大竹村	菅野谷村		

土浦治安裁判所  
 鹿島郡ノ内  
 水戸治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓  
 下田治安裁判所

加茂郡ノ内

沼津治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

沼津治安裁判所

加茂郡ノ内

網代村	下多賀村	熱湯村	伊豆山村
初島村	泉村	十足村	荻田村
鎌田村	岡村	竹ノ内村	吉田村
川奈村	新井村	和田村	松原村
湯川村	宇佐美村	篠場村	貴僧防村
姫ノ湯村	戸倉野村	地藏堂村	原保村
菅引村	中原戸村	徳永村	冷川村
柳瀬村	八幡村	關野村	城村
宮上村	梅木村	上白岩村	

松本治安裁判所

東筑摩郡ノ内

大町治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

西筑摩郡ノ内

奈良井村 贊川村

南安曇郡ノ内

大町治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

北安曇郡ノ内

七貴村

上伊那郡ノ内

小野村 三里村 伊那富村 中箕輪村

西箕輪村 南箕輪村 伊那村

飯田治安裁判所

上伊那郡ノ内

松本上諏訪兩治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

上諏訪治安裁判所

上伊那郡ノ内

藤澤村	長藤村	上山田村	小原村
勝間村	非持村	山下室村	荊口村
芝平村	長谷村	東高遠村	美薦村
伊那部村	澤岡村	西高遠村	東箕輪村
		福島村	

三日町村 福與村 樋口村 平井出村  
赤羽村 澤底村

大町治安裁判所

北安曇郡ノ内

松本治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

南安曇郡ノ内

有明村

東筑摩郡ノ内

生坂村

福島治安裁判所 信濃

西筑摩郡ノ内

松本治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

長野治安裁判所

埴科郡ノ内

上田治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

更級郡ノ内 上田治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

上水内郡ノ内

飯山治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

飯山治安裁判所

上水内郡ノ内

淺野村 大倉村 蟹澤村

埴科郡ノ内

南條村 中ノ條村 阪木村 磯部村

戸倉村 内川村 千本柳村 上徳間村

寂蒔村 鑄物師屋村 打澤村 櫻堂村

小島村 東船山村 屋代村 向八幡村

更級郡ノ内

網掛村 上五明村 上平村 力石村

新山村 上山田村 若宮村 羽尾村

須阪村 八幡村 桑原村 鹽崎村

稻荷山村

長岡治安裁判所



刈羽郡ノ内

八石山以东小國谷郷太郎村外二十四ヶ村

柏崎治安裁判所

刈羽郡ノ内

長岡治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

京都治安裁判所

宇治郡ノ内

第一組 第二組

伏見治安裁判所

宇治郡ノ内

第三組 第四組

宮津治安裁判所

加佐郡ノ内

福知山治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

福知山治安裁判所

加佐郡ノ内

河守町 關 村 天田内村 二俣村

内宮村 毛原村 佛性寺村 北原村

橋谷村 金屋村 上野村 波美村

南有路村 千原村 尾藤村 常津村

在田村 南山村 夏間村 日藤村

公庄村 小原田村 蓼原村

天王寺治安裁判所

志紀郡ノ内

南北木本村 太田村 沼村 柏原村

弓削村 市村新田 田井中村 老原村

天王寺屋新田 二俣村

堺治安裁判所

志紀郡ノ内

天王寺治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

奈良治安裁判所

高市郡ノ内

八木村

葛下郡ノ内

第四編〇訴訟〇第一類〇裁判所〇治安裁判所管轄町村名

平野村 今泉村 今市村 王寺村  
門前村 島田村 高村 上里村  
中筋村 中筋村出作方 上下牧村 藤井村  
五條治安裁判所

高市郡ノ内

奈良治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

葛下郡ノ内

奈良治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

岡山治安裁判所

賀陽郡ノ内

高梁治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

賀陽郡ノ内

日羽村 宇山村 延原村 槁村  
西村 北村 岨谷村 宮地村  
美袋村 種井村

高松治安裁判所

阿野郡ノ内

丸龜治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

阿野郡ノ内

丸龜治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

阿野郡ノ内

福江村

御供所村 阪出村 江尻村  
西庄村 氏部村 林田村 鴨村  
高屋村 神谷村 青海村 乃生村  
木澤村

名古屋治安裁判所

愛知郡ノ内

名古屋治安裁判所

愛知郡ノ内

日置村 東西古渡村 南北押切村 前津小林村  
上名古屋村 廣井村

熱田治安裁判所

愛知郡ノ内

名古屋治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

長崎治安裁判所

西彼杵郡ノ内

西彼杵郡ノ内

福江治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

福江治安裁判所

西彼杵郡ノ内

平島村

大分治安裁判所

速見郡ノ内

政所村	志原村	丹生村	宮河内村	北海部郡ノ内	下川村	川北村	南立石村	鶴見村	内窠村
濱角子原村	里川村	丹川村	廣内村	谷川村	塚原村	東山村	南北石垣村	野田村	野田村
竹下村	北尾村	市尾村	種具村	中川村	川上村	川上村	別府村	龜川村	龜川村
城原村	横田村	尾山村	久土村	川西村	川南村	川南村	濱脇村	鐵輪村	鐵輪村

野津市村	白岩村	西神野村	大野郡ノ内	板知屋村	臼杵村	搔懷村	望月村	市濱村	吉小野村	稻田村	嶽谷村	佐志生村	一尺屋村	大平村	細村	市村
八里合村	岩屋村	垣河内村	大泊村	二王座村	高山村	深田村	前田村	久木小野村	勝河内村	田尻村	下ノ江村	諏訪村	志生木村	馬場村	木田村	木田村
福良木村	落谷村	泊村	風成村	海添村	乙見村	中尾村	家野村	江無田村	武山村	末廣村	中津浦村	大野村	關村	木佐上村	久原村	久原村
龜甲村	野口村	清水原村	深江村	福良村	東神野村	左津留村	野田村	戸室村	中臼杵村	井濱村	大濱村	田井村	白木村	神崎村	上野村	上野村

王子村	山頭村	宮原村	老松村
都原村	鳥嶽村	千塚村	西塞田村
久原村	前河内村	吉田村	原村
藤小野村	柚ノ木村	大寒村	秋山村
西畑村	東谷村	下津合村	犬飼村
田原村	黒松村	長峯村	高津原村
柴北村			
佐伯治安裁判所			
北海部郡ノ内			
大分治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓			
大野郡ノ内			
重岡村	大平村	鹽見園村	河内村
小野市村	田原村	木浦内村	木浦鑛山
千束村			
竹田治安裁判所			
大野郡ノ内			
大分佐伯兩治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓			

杵築治安裁判所			
速見郡ノ内			
大分治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓			
鹿兒島治安裁判所			
日置郡ノ内			
水引治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓			
水引治安裁判所			
日置郡ノ内			
長里村	湯田村	養母村	大里村
伊作田村	神之川村	川上村	湊村
湊町	江口浦	上名村	下名村
荒川村	島平村	濱浦	串木野村
(明治十七年十月司法省甲第五號告示ヲ以テ宮崎都城兩治安裁判所管轄左ノ如ク改正)			
宮崎治安裁判所			
南那珂郡ノ内			
北河内村	郷ノ原村	大藤村	東辨分村

第四編○訴訟○第一類○裁判所○治安裁判所管轄町村名

松永村 益安村 殿所村 板敷村  
 今町 星倉村 楠原村 本町  
 吉野方村 酒谷村 塚田村 大窪村  
 橋ノ口村 贊波村 脇本村 瀧上村  
 谷ノ口村 中村 津屋野村 毛吉田村  
 萩ノ嶺村 上方村 下方村 隈谷村  
 西辨分村 戸高村 平野村 油津村  
 平山村 風田村 宮浦村 富士村  
 伊比井村

都城治安裁判所

南那珂郡ノ内

宮崎治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

福島治安裁判所

田村郡ノ内

平治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

白河治安裁判所

安積郡ノ内

若松治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

平治安裁判所

田村郡ノ内

小野新町村 谷津作村 南田原井村 和名田村  
 上羽出庭村 鹽庭村 小野赤沼村 葛浦谷村  
 皮籠名村 湯澤村 小戸神村 榎本村  
 上下道渡村 中津川村 榎山神村 谷田川村  
 田母神村 柳橋村 小野山神村 浮金村  
 糠塚村 雁股田村 菅谷村 吉野邊村  
 飯豐村 牧野村 神股村 栗出村  
 廣瀬村 堀越村 門澤村 桐山村  
 遠山澤村 永谷村 蘆澤村 船引村  
 上下大越村 川曲村 春山村 今泉村  
 西向村 久保村 常葉村 山根村  
 岩井澤村 古道村 堀田村 早稻川村  
 關本村 小檜山村 新田作村 鹿山村  
 若松治安裁判所

安積郡ノ内

馬入新田村 福良村 三代村 横濱村  
船津村 赤津村 館村 中野村

青森治安裁判所

上北郡ノ内

野邊地村 有戸村 横濱村 馬門村  
天間館村 中岫村 花松村 附田村  
榎林村 二ッ森村 野崎村 甲地村

八戸治安裁判所

上北郡ノ内

青森治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

○明治十七年十月司法省甲第五號告示ヲ以テ久留米治安裁判所以下追加

久留米治安裁判所

三瀨郡ノ内

柳川治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

柳川治安裁判所

三瀨郡ノ内

金納村 大藪村 立石村 矢ヶ部村  
高橋村 高島村 蒲生村 筏溝村  
三八松村 奥牟田村 榎津町 久々原村  
三ッ丸村 小保町 九綱村 幡保村  
大野島村 吉原村 津村 新田村  
南濱武村 上卷村 一ッ木村 古賀村  
北古賀村 紅粉屋村 西濱武村 鬼古賀村  
七ッ家村 東蒲地村 菰島村 間村  
西蒲地村 郷原村 田脇村 阪井村  
酒見村 諸富村 中古賀村 向島村

大曲治安裁判所

平鹿郡ノ内

角間川村 板井田村 袴形村 十日町村

横手治安裁判所

平鹿郡ノ内

大曲治安裁判所管轄ヲ除キ外一圓

○第三節 重罪裁判所區畫

十六年九月 第三十三號布告

明治十四年十二月第七十八號布告ヲ廢シ自今重罪裁判所ノ管轄ハ各始審裁判所管內ヲ以テ區畫ト定メ各其地名ヲ冒シ某重罪裁判所ト名稱ス

但沖繩縣札幌縣根室縣ノ地方ハ從前ノ通

○第四節 小笠原島裁判事務

十四年十月 第五十六號布告

小笠原島裁判事務當分東京府出張所ニテ治安裁判所即チ違警罪裁判所始審裁判所即チ輕罪ノ權限ヲ以テ裁判セシメ民事控訴及重罪裁判ハ東京控訴裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事但該島ニ於テ治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○第五節 伊豆七島裁判事務

十四年十月 第五十七號布告

伊豆七島裁判事務當分該島吏へ民事ハ百圓以下及勘解并ニ刑事ハ違警罪ノ裁判ヲ委任シ民事百圓以上ハ東京始審裁判所ノ管轄ト相定明治十五年一月一日ヨリ施行候條此旨布告候事

但該島ニ於テ裁判治罪ノ手續ハ適宜取扱フヘシ

○第六節

清國及朝鮮國各港駐在領事兼判事裁判事務

十五年八月廿一日 司法書記官通牒

清國及朝鮮國各港駐在領事兼判事へ別紙之通訓令相成候條爲心得此段及御通牒置候也

別紙

清國及朝鮮國各港駐在領事兼判事

新定刑法治罪法御施行ニ付其地裁判事務左之通相心得取扱フヘシ

第一條 清國并朝鮮國各港ニ在留スル日本國人相互ノ民事ノ訴訟及ヒ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ日本國人ノ輕罪違警罪ニ係ル公訴及ヒ日本國人ノ總テノ犯罪ニ係ル私訴ハ當分ノ内其港領事館ニ於テ治安裁判所違警罪裁判所始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ヲ以テ之レテ裁判スヘシ

但治罪ノ手續ハ便宜取計ヒ治安裁判所ノ權限ニ屬スル訴件ニ付テハ終審ノ裁判ヲ爲スヘシ

第二條 民事ノ訴訟及ヒ私訴ニ對スル控訴ハ長崎控訴裁判所重罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄スル所トス

第三條 我國人相互ノ民事及ヒ清國并朝鮮國人其他外國人ヨリ我國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ我國人犯罪ニ係ル私訴ハ領事館ニ於テ明治十四年第八十三號布告及ヒ治罪法ニ從ヒ之ヲ裁判スヘシ

第四條 治罪及ヒ刑ノ執行ニ關スル手續方法ハ治罪法并ニ監獄則ニ從フヘシト雖モ實際準備ノ都合ニ因テハ便宜取計ヒ禁錮禁獄場未設ノ場所ハ其最近地ノ禁錮禁獄場又ハ長崎縣所管ノ監獄ニ託シ之ヲ執行セシムルヲ得

第五條 徵收ノ罰金科料及ヒ沒收ノ物品ハ司法省ニ納完スヘシ

第六條 我國人ヨリ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル刑事ノ告訴告發ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ直ニ其被告人所在地ノ地方官若クハ其領事ニ照會シ審判ヲ求ム可シ

第七條 我國人ヨリ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訴ハ領事館ニ於テ之ヲ受ケ照會文ヲ作り其訴狀ト共ニ其被告人所在ノ地方官若クハ其領事ニ送附シ審判ヲ求ムヘシ

第八條 我國人ヨリ清國并朝鮮國人其他外國人ニ對スル民事ノ訴訟及ヒ私訟ニ付裁判アリタルハ領事館ヨリ速ニ原告人ニ送付スヘシ

第九條 民事ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ明治十年二月第十九號同十五年第二十一號布告ノ手續ニ從ハシメ刑事ノ上告及ヒ私訴ノ控訴上告ヲ爲ス者ハ治罪法ニ從ハシムヘシ

但内外國人ニ交渉スルモノハ必スシモ本人若クハ代理人ノ出庭ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スヲ得

第十條 郵便ヲ以テ控訴若クハ上告狀ヲ差出シ控訴裁判所又ハ大審院ニ於テ之ヲ受理セシキハ領事館ニ移牒シテ被告人ノ答辨書ヲ差出サシメ其判決文モ亦領事館ヲ經由シテ原告人及ヒ被告人ニ下付スヘシ

第十一條 控訴裁判所又ハ大審院ニ於テ訴狀答書ノ外審問スルヲ要スルハ其旨ヲ領事館ニ照會スヘキニ付領事館ニ於テハ速ニ審問ノ上其書類ヲ送致シ時宜ニ因リ原告人被告人ヲシテ出庭セシムヘシ

第十二條 凡民事ニ係ル事件ハ詞訟人ノ請願ニ因リ之ヲ勸解スヘシ

第十三條 勸解ヲ乞フ者ハ訴狀ヲ作ルニ及ハス直ニ其廳ニ願出テ其事由ヲ陳述スルヲ得セシムヘシ

第十四條 勸解ハ双方共必ス本人自ラ出頭セシムヘシ



但疾病事故等ニテ不得止場合ニ於テハ親屬或ハ雇人ナシテ代人  
トナシ出頭スルヲ得セシムヘシ

明治十五年六月八日

外務卿井上 馨  
司法卿大木喬任

●第二章 裁判所權限

○第一節 治安及始審裁判所

十四年十二月  
第八十三號布告

第一條 治安裁判所ハ訴訟事件ヲ勸解ス但諸官廳ニ對スル事件及ヒ  
商事ニ係リ急速ヲ要スル事件ハ勸解スルノ限ニアラス

第二條 治安裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓未滿ノ訴訟ニ付キ始  
審ノ裁判ヲ爲ス

第三條 治安裁判所ハ人事其他金額ニ見積ルヘカラサルモノヲ裁判  
スルヲ得ス

第四條 始審裁判所ハ請求ノ金額及ヒ價額百圓以上並ニ第三條ニ掲  
ケタル治安裁判所權外ノ訴訟ニ付始審ノ裁判ヲ爲ス

第五條 始審裁判所ハ其管轄地内ノ治安裁判所ノ始審裁判ニ對スル  
控訴ニ付キ終審ノ裁判ヲ爲ス但控訴ノ手續ハ明治十年第十九號布

告控訴手續ニ照準スヘシ

○第二節 行政裁判

十四年八月司法  
省甲第八號布達

從來人民ヨリ郡區長及戶長ノ職務上ニ對スル詞訟ハ各上等裁判所ニ  
於テ受理審判致シ候處自今地方裁判所ニ於テ受理審判候條此旨布達  
候事

但受理審判等ノ手續ハ是迄各上等裁判所ニ於テ取扱ヒ來候振合ニ  
可準候事

○明治十四年八月司法省丁第九號達

人民ヨリ郡區長ニ對スル詞訟取扱方今般甲第四號ヲ以テ布達候ニ付  
テハ是迄上等裁判所並ニ大審院へ相達置候諸達書別紙六通回付候條  
此旨相心得ヘキ事

別紙

第五號

各上等裁判所

人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ニ付明治七年第廿四號ヲ以テ相  
達置候處右ハ行政司法ノ裁判權限ニ於テ猶混淆ヲ免カレサル儀モ  
有之候ニ付追テ御規則相立候迄右ニ關スル訴訟ハ總テ本省へ伺出

指令濟ノ上受理可致候此旨相達候事

明治九年一月二十二日

司法卿大木喬任

丁第廿四號

行政裁判云々ノ儀本年五月八日丁第十三號ヲ以テ相達候處右ハ取消候條自今行政裁判ニ屬スル分ハ官府ヨリ償還スヘキ條理アルト否トニ拘ハラス總テ裁判見込案ヲ以テ具上申稟スヘキ儀ト可心得事

但司法裁判ニ屬スル者ハ七年第廿四號當省達第三條ノ通タルヘキ事

明治十六年六月二十九日

司法卿大木喬任

○第三節

身代限分配加入ノ訴十六年三月司法ニ關スル裁判所權限省丁第十一號達

身代限分配加入訴ノ義ニ付別紙ノ通長野治安裁判所伺ニ對シ及指令候條爲心得此旨相達候事

但該指令ニ抵觸スル從前ノ指令内訓ハ自今消滅シタル義ト心得ヘ

長野治安裁判所伺(明治十六年二月十七日)

治安裁判所ニ於テ金額百圓未滿ノ訴件身代限處分中金額百圓以上ノ

債主其分配加入ヲ始審裁判所へ出訴シ其權義確定セシ后該件ヲ受付シ來ルヲ以治安裁判所ハ之ヲ併セ其處分ヲ爲ス右治安裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ受ケタル原告ハ他ノ債主ヨリ始審裁判所へ金額百圓以上ノ訴ヲ爲セシヲ知リ得サル以前ニ在テハ(始審裁判所ヨリ金額百圓以上ノ訴件ヲ受付サル、カ又ハ原告ヨリ他ニ分配加入ノ事件アルトノ申述ヲ聽クニ非レハ)他ニ分配加入ノ訴ノ之レナキ者トナシ期ニ至リ分配處分濟ノ後始審廳ヨリ該件ノ到達スル如トキハ多少官民ノ手數錯雜スルノミナラス隨テ費用ヲ要ス前顯ノ場合金額百圓未滿ノ訴件治安裁判所ニ於テ身代限處分中同負債者へ掛リ其分配加入ノ訴ヲ爲サント欲スル者ハ其處分ヲナス治安裁判所へ直ニ出訴セシメ其治安裁判所ハ該分配事件ニ限リ金額百圓以上ト雖モ都テ之ヲ受理シ判決ヲ與フヘキハ之ヲ與ヘ而シテ該裁判權ハ始審裁判所ニ於テ裁判セシモノト同一トナシ其裁判不服ナルキハ直ニ上等ナル控訴裁判所へ控訴スル權ヲ有シシメナハ實際便益不少ノミナラズ明治十四年第八十三號御布告ノ權限ニモ敢テ抵觸セサル儀ト被考候條治安裁判所ニ於テハ身代限分配加入ノ訴ニ限リ金額百圓以上ト雖モ受理審判致不苦哉此段相伺候至急何分ノ御指令奉仰候也

指令(明治十六年三月五日)

伺ノ趣身代限分配加入ノ件ハ金額ノ多寡ニ拘ハラズ明治七年第七十一號布告揭示案ノ旨趣ニ依リ身代限ノ處分ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ受理スベク若シ其事件裁判ヲ要スルニ至ルキハ明治十四年第八十三號布告ノ權限ニ照ラシ之ヲ管轄裁判所ニ送附シ其裁判ヲ受ケシメタルト身代限ヲ爲シタル裁判所ニテ分配ヲ爲スヘキモノトス

○第四節 控訴裁判所

○十年二月第十九號布告拔抄

第一條 上等裁判所ハ地方裁判所ノ裁判ニ服セスシテ控訴スル者ヲ覆審ス

○八年五月司法省甲第五號達

各人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟ハ當分各上等裁判所ニ於テ受理候條此旨布達候事

○八年十一月司法省甲第十四號達

各人民ヨリ院省使府縣等ニ對スル訴訟受理ノ儀ニ付本年甲第五號ヲ以テ及布達置候處自今各人民ヨリ開拓使ニ對スル訴訟ハ東京上等裁

判所ニ於テ受理候條此旨布達候事

○第五節 大審院

十年二月第十  
九號布告拔抄

第一條 大審院ハ民事刑事ノ上告ヲ受ケ上等裁判所以下ノ不法ナル者ヲ破毀シテ法憲ノ一統ヲ主持スル所トス

第二條 審判ノ不法ナル者ヲ破毀スルノ後他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシム又便宜ニ依リ大審院自ラ之ヲ判決スル事ヲ得

第三條 己ニ他ノ裁判所ニ移シテ之ヲ判決セシムルノ後其裁判所又大審院ノ旨ニ循ハサル時ハ大審院更ニ自ラ之ヲ判決ス

第四條 海陸軍裁判所ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ其裁判ヲ破毀シテ之ヲ當然ノ裁判所ニ付ス

第五條

第六條 内外交渉民事事件ノ重大ナル者ヲ審判ス

●第三章 裁判

○第一節 裁判事務心得

八年六月第  
百三號布告

第一條 各裁判所ハ民事刑事共法律ニ從ヒ遲滯ナク裁判スヘシ疑難

六年司  
法省五  
號及百  
八十五  
號達ヲ  
以テ廢  
ス

明治五年七  
月三日司法  
省達  
裁判ノ請託  
文從前士民  
打交ノ事件  
ハ各自別紙

第四編 ○訴訟 ○第一類 ○裁判所 ○控訴裁判所 裁判事務心得

ニ記載セシ  
所自今士民  
ノ別ナク一  
紙証文ヲ出  
サシム  
明治七年八  
月二十七日  
司法省達二  
十號  
司法裁判所  
ニ於テ終審  
裁判ノ後裁  
判逆リ執行  
セサル者ハ  
府縣裁判所  
ニ於テ執行  
セシム

アルヲ以テ裁判ヲ中止シテ上等裁判所ニ伺出ルヲ得ス  
但刑事死罪終身懲役ハ此例ニ非ラス  
第二條 凡ソ裁判ニ服セサル旨申立ル者アルキハ其裁判所ニテ辨解  
ヲ爲スヘカラス定期ニ依リ期限内ニ控訴若クハ上告スヘキ事ヲ言  
渡ス可シ  
第三條 民事ノ裁判ニ成文ノ法律ナキモノハ習慣ニ依リ習慣ナキモ  
ノハ條理ヲ推考シテ裁判ス可シ  
第四條 裁判官ノ裁判シタル言渡ヲ以テ將來ニ例行スル一般ノ定規  
トスルヲ得ス  
第五條 頒布セル布告布達ヲ除クノ外諸官省隨時事ニ就テノ指令ハ  
將來裁判所ノ準據スヘキ一般ノ定規トスルヲ得ス  
七年七月第十  
四號司法省達

○第二節 證據物  
聽訟上原告ヨリ差出ス處ノ證據物ハ其裁判官見認メ有無且取捨ノ  
振合ニ因リ後來ノ裁判ニモ差響ク筋ニ付今後出訴ノ者之ノアル時ハ  
事件採用不採用ヲ論セス其差出ス處ノ證據物本紙ニハ總テ年號月日  
番號ト判事誰或ハ見認メタル丁ヲモ記載シ押印可致此旨相達候事

七年百  
九號布  
告及同  
年司法  
省二十  
四號達  
ヲ以テ  
消ル  
八年司  
法省中  
第六號  
布達ヲ  
以テ廢  
ス  
明治四年九  
月晦日司法  
省無號達  
他府縣廳へ  
關涉ノ訴訟  
ハ本管廳ノ  
添翰ヲ以テ  
當省へ申出  
シム  
各人民ヨリ  
地方官並ニ  
地方裁判官  
ヲ訴フルヲ  
許ス  
明治八年十  
二月十日布  
告百九十號  
本年第九十  
一號ヲ以テ  
巡迴裁判規  
則布告ノ處

○十三年十一月丁第二十五號司法省達  
本年當省丁第八號達左ノ通改正候條此旨相達候事  
明治七年第十四號ヲ以テ聽訟上原告ヨリ差出ス處ノ證據物云々相  
達置候處公債証書地券等ハ記名捺印スヘキ義ニ無之候條此旨爲心得  
相達候事  
○十四年六月丁第七號司法省達  
裁判上諸役所之帳簿入用ノ節ハ可成必用之分ヲ寫取候儀ト相心得有  
寫本ニ正寫之証トシテ各役所之印ヲ捺シ差出シ候様照會シ紙丁多數  
ヲ要スルキハ其費用仕拂可申事  
但可成寫本ニテ可取計等ニ候ヘモ裁判事件ニ依リ元帳ヲ要スル節  
ハ取寄方照會可致尤遠隔之地ニテ運送不便ナルキハ其地最寄之裁  
判所へ右取寄方及調方共依頼可致事

○第三節 宗教上ニ關スル訴訟  
○十三年十一月一日司法省伺定  
別紙熊本裁判所長寺島判事ヨリ宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀伺出  
候處右ハ元來司法裁判所ニ於テ受理スヘキ件ニ無之儀ト存候得共目

當分ノ内府  
縣裁判所ニ  
於テ罪案ヲ  
濫擬律案ヲ  
具シ上等裁  
判所ヘ出シ  
上等裁判所  
ニ於テ審案  
檢査シ巡廻  
再審ヲ要セ  
サルモノハ  
直ニ大審院  
ノ批可ヲ請  
ヒ原裁判所  
ヘ還付シ決  
行セシム

明治十年八  
月廿四日司  
法省達丁六  
十號

律例中刑事  
附帶ノ民事  
ハ刑事裁判  
官其處分ヲ  
行フト雖不  
服ノ者ハ民  
事ノ手續ニ  
據ルヘキ儀  
ト心得ヘシ

今ニ在リテハ尋常民事ノ詞訟同様該裁判所ニ付シ審判爲致可然歟何  
分ノ御裁令ヲ仰キ度訴答書類相添ヘ此段相伺候也

明治十三年八月廿日  
司法卿田中不二磨

太政大臣三條實美殿

朱書  
伺ノ趣ハ受理裁判スヘキ者ニ非ラス

明治十三年十一月一日  
別紙

宗教上ニ關スル訴訟受理方ノ儀ニ付伺

明治十一年内務省第五十七號達ニ依リ廢寺再興願ノ儀ニ付信徒共ヨ  
リ宗教取締リニ對シ本山管長ヘ差出ス添翰願書ノ取次ヲ要メタリシ  
カ其願書取次吳レサルトテ信徒共ニ於テ取締ヲ被告ト爲シ本山添翰  
拒一件ノ目安ヲ掲ケ訴出候然ルニ右一件ハ宗教取締ノ職掌ニ關カリ  
候得共既ニ僧徒ノ儀ハ明治七年第八號ヲ以テ一般ノ職分同様ニ可心  
得云々ノ公布有之ノミナラス宗教上ニ關スル訴訟事件ノ取扱方別段  
ノ御規則モ無之上ハ尋常民事ノ訴訟同様受理裁判致シ不苦哉否伺上  
候條尤モ差掛リ候事件有之ニ付至急何分ノ御指揮有之度候也

他管交  
涉ノ部  
七年百  
九號布  
告及同  
年司法  
省二十  
四號達  
ヲ以テ  
消ス

明治四年九  
月晦日司法  
省達無號

他府縣廳ヘ  
關涉ノ訴訟  
ハ本管廳ノ  
添翰ヲ以テ  
當省ヘ申出  
テシム

明治八年六  
月十二日司  
法省番外  
死罪見込ノ  
者府縣裁判  
所ヨリ届出  
ル節檢事取  
扱方ヲ定ム

明治十三年五月廿六日  
熊本裁判所長  
判事 寺 島 直  
田中司法卿殿

○第四節 院省使府縣ニ對スル訴訟假規則

第一條 凡人民ヨリ院省使府縣ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個  
ノ訴訟ハ司法省ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ  
但闔區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做ス  
ヘシ

一 院省使府縣所有ノ土地ニ關シタル事  
一 院省使府縣ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事  
一 官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル院省使府縣ハ其長官ヨリ其代人ヲ  
撰ミ差出スヲ得ヘシ

其代人ノ外更ニ事件ノ証ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サ、ルヲ得  
サルキハ其本人ヲ呼出スコトモアルヘシ

但奏任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處ス

明治八年九月十二日  
 司法省外  
 九號布  
 出取調ノ上  
 死刑ノ著大  
 審院ノ批可  
 フ請フ節其  
 糾問ニ列席  
 セル地方旗  
 補ノ判事ト  
 必疎著差出  
 スヘシ

第三條 裁判上院省使府縣ヨリ人民ヘ對シ償還スヘキ條理アルキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟ス可シ  
 若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其者ヨリ償還ス可キハ具狀申稟スルニ及ハスト雖モ事情止テ得サル場合ニテ院省使府縣ヨリ償還セサルコトヲ得サルキハ具狀申稟スルコト前項ニ同シ  
 但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ始審トシ更ニ控告スルコトヲ得ス

第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニラサル一般公同ノ爲メニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ販スル者ト雖モ當今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルキハ先以テ之ヲ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フヘシ

一官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事  
 一道路ヲ作ルコトニ付一般ノ人民ニ關スル事  
 一工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事  
 一此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事  
 一行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事  
 但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

八年司  
 一月廿八日  
 司法省布達  
 四十六號  
 各人民ヨリ  
 地方官並ニ  
 違フ以  
 テ廢ス  
 フ訴フルヲ  
 許ス

七年司  
 二月十五日  
 司法省布達  
 百九十八號  
 司法裁判所  
 ノ裁判ニ服  
 セサル者ハ  
 司法省ヘ訴  
 ルヲ許ス

○第五節 裁判所取締規則

七年五月司法省甲第九號達

第一條 訟廷ハ訴訟口詰必ス出席シ詞訟人ヲ順次ニ呼込ニ裁判官ノ命ニ從ヒ失敬又ハ紛鬧ノコトヲサレ様其取締ヲ爲スヘキ事

第二條 原被告人ヲ初メ代理人等總テ訟廷ニ出ル者ハ呼込ノ次第ニ從ヒ沈黙整列シ裁判官出席スレバ各々起テ禮ヲ爲スヘシ

第三條 原被告等共其事情ヲ餘蘊ナク幾回モ詳細ニ陳述スヘシト雖モ互ニ先ツ發言スル者ノ言終リタル後ニ非サレハ更ニ其言ヲ發スヘカラズ

第四條 凡ソ進退動作ハ輕躁ニ涉ラス言語ハ憤怒高激ニ涉ラス諄々トシテ其事件ヲ陳述シ且裁判官ニ對シテ尊敬ヲ致スニ注意スヘシ

第五條 (明治七年十月八日司法省甲第十九號達ヲ以テ左ノ通り改正ス第六條以下モ亦同シ)

前條ニ記載シタルコトヲ守ラズ裁判官ニ對シ尊敬ヲ欠ク者アルキハ裁判官直チニ譴責ヲ加フヘシ

第六條 譴責ヲ加フヘキモノアルキハ其裁判ヲ中止シ犯則ニ關係ナキ者ハ一旦扣所ニ退カシメ然ル後犯則ノ者ヲ譴責スヘシ

第四編○訴訟○第一類○裁判所○裁判所取締規則

控訴ノ  
部八年  
九十三  
號布告  
同年司  
法省甲  
六號布  
達ヲ以  
テ消ル  
明治七年九  
月廿二日司  
法省達二十  
六號  
終審始審權  
限ヲ定ム

十四年  
司法省  
丙四號  
達ヲ以  
テ附屬  
代理人  
ヲ廢ス  
ルニ依  
テ消ル  
明治十二年  
十一月七日  
司法省尙定  
附屬代理人  
規程第一項  
ヲ改正ス

第七條 裁判官ヲ罵ルモノアルハ前條ノ如ク其裁判ヲ中止シ之ヲ  
斷獄課ニ付シ本律ヲ科スヘキ事  
第八條 裁判ノ時公聽ヲ許サレタル者ハ人々皆沈黙敬聽スヘシ  
但裁判官審問ノ際公聽ノ者若シ紛鬧ニシテ審問ノ妨礙アリト思  
量スルハ便宜ヲ以テ訴訟口詰ニ命シ公聽ノ者ヲ退カシムヘシ

### 第二類 「代言人代人」

#### ●第一章 代言人

##### ○第一節 代言人規則

十三年五月司法省  
甲第一號布達

明治九年當省甲第一號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事  
但該規則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タルヘシ

##### 第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ  
被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ  
依リ定式ノ試験ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受クヘシ

第三條 免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及諸裁判裁ニ於テ代言ヲ爲シ  
得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

- 一 未丁年者
- 二 身代限ノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者
- 三 盜罪詐僞罪ニ付キ刑ヲ受ケタル者
- 四 懲役並ニ禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者  
(十四年一月司法省第二號達ヲ以テ改正ス)

五 官更准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組合ニ  
入りテ其規則ヲ守ルヘシ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲スハ其地  
組合ノ規則ヲ遵守スヘシ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲スル  
ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事(檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ  
履行スル者以下之レニ倣フ)并ニ議  
員長ヘ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納スヘシ

第七條 代言免許ハ滿一年(月ヲ以テ算フ)ヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓トス  
其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ納メタル

免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セズ

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受クル時免許料ヲ直チニ檢事ニ納ムヘシ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢事ニ差出ス可シ但シ手續ヲ爲シタル日ハ期限後ニ至リ未タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得ヘシ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フヘシ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出スヘシ但願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下付迄ハ之ヲ以テ免許代理人タルノ証ト爲スヘシ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受クヘシ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分スヘシ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代言人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クスヘシ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ因リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ合スルコトアル可シ

一 互ニ風議ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ選延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閱ヲ經可シ其改正増補モ亦之ニ同シ

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ二名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ムヘシ若シ投票ノ數相均シキハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキハ長年ノ者ヲ以テ之ニ充ツヘシ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支



アルトキハ之カ代理ヲ爲スヘシ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ルモノト雖モ其職務繼續スルハ三期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アルキハ各代言人

ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發スヘシ

若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ルキハ各代言人ヨリ直チニ檢事ニ告發スヘシ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クテ得ス若シ己ムテ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスル

カ又ハ臨時會ヲ開カントスルキハ必ス檢事ノ認可ヲ受クヘシ但其會費ハ各代言人ニ於テ之ヲ擔當スルモノトス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツヘシ

第三十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯スルハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰スヘシ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹譏スル者
- 二 訟廷ニ於テ吏官ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者
- 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ凌辱罵詈シタル者
- 四 詞訟ヲ教唆シタル者
- 五 證據ト爲ルヘキ者ヲ捏造シタル者
- 六 他人ノ詞訟ヲ買取り自己ノ利ヲ圖ル者
- 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
- 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人并ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
- 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ビ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
- 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者

- 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
- 一 譴責
- 二 停業
- 三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコアルヘシ

第二十五條 罷責ハ止タ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代官人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非ラサレハ復タ代官人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ修身之ヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルキハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示スヘシ

第四款 出願

第二十六條 代官免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現住戸長又ハ區長ノ與印ヲ受ケ履歷書ヲ添ヘ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受クヘシ

第二十七條 出願定月

二月 八月 各上半ケ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
- 二 刑事ニ關スル法律

三 訴訟ノ手續

四 裁判ニ關スル諸規則

第二十九條 願書及ヒ履歷書式

代官願

本貫住所(寄留ナルキハ其寄留ヲ記入ス可シ)

身分

氏

年

名 齡

代官營業仕度ニ付御試験ノ上免許被成下度此段奉願候也

右

氏

名

印

司法卿某殿

前書ノ通出願候ニ付與印致候也

右戸長(又ハ區長)

氏

名

印

履歷書

本貫住所(寄留ナルキハ其寄留ヲ記ス可シ)



第五條 大審院裁判所并ニ檢事ニ於テハ代言人名簿ヲ製シ年月日ヲ詳ニシテ左ノ件々ヲ登錄スヘシ

- 一 氏名身分住所年齢
- 二 新規及ヒ引續免許
- 三 住所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等
- 四 懲罰

第六條 代言人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シ代言人規則ニ照シテ之ヲ取扱フヘシ若シ犯則ノ者アル時ハ其處分ヲ裁判官ニ求ムヘシ訟廷ニ於テノ犯則ハ裁判官直チニ之ヲ處分シ後テ檢事ニ通知ス可シ

第七條 議會ノ規則ハ檢事之ヲ認許シ其副本及ヒ會長副會長組台人ノ氏名簿ヲ司法卿ニ進達スヘシ

第八條 代言人他ノ裁判所管内ニ轉住シ又ハ廢業スルトキハ檢事ヨリ司法卿ヘ上申スヘシ尤モ廢業ノトキハ其免許狀ヲ返納スヘシ

第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ書換等ニテ更ニ下附ヲ願出ル者アル時ハ檢事ヨリ司法卿ヘ上申シ其免許狀下附ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スヘシ但右出願ノ時其願書ノ寫ヘ檢印ヲナシテ本人ヘ與ヘ置クヘシ

第十條 檢事ハ免許料ヲ收領シタル上ニテ免許狀ヲ本人ニ授與スヘシ

第十一條 免許料ハ一月毎ニ司法省ヘ納ムヘシ

但シ檢事所在ノ裁判所ハ該會計課ヘ交附スル義ト心得可シ(第十三條第十四號ヲ以テ改正)

第十二條 代言人ノ處刑懲罰ハ其都度檢事ヨリ之ヲ司法卿ヘ上申スヘシ除名ノ時ハ其免許狀ヲ褫奪シテ返納スヘシ

第十三條 檢事ハ停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ某年月日ヨリ某年月日マテ停業シタル旨ヲ裏書シ檢印ヲ爲シテ之ヲ本人ニ下附スヘシ

〔括弧〕内朱書

免	〔何 某〕
許	〔免 許 期 限〕
	〔從 何 年 何 月〕
	〔至 何 年 何 月〕

〔代 言 人 免 許 申 請 書 授 與 書〕

形 雜 狀

明 治 年 月 日
省 印
司 法

停業期限

〔從何年何月何日  
至何年何月何日〕

印

○明治十四年一月十八日司法省伺定

仙臺裁判所檢事代人規則疑義伺書第二條ノ義ニ付伺

別紙仙臺裁判所檢事中川忠純伺書第二條之旨趣ハ代人規則第四條  
 第四項ハ新聞條例說謗律等ニ觸レ禁獄一年以上ニ處セラレシ者ヲモ  
 包含セルヤ否ヤノ疑問ニ係レリ右審案候ニ諸罰則ヲ犯セシモノト雖  
 モ禁獄一年以上ニ至テハ同シク代言免許ヲ與フ可カラサル者ト爲サ  
 ハルヲ得ス如何トナレハ法律ノ稱呼ハ常律ニ止マラス諸罰則ト雖モ  
 亦裁判所ニ於テ處斷セシ者ハ之ヲ特別一種ノ制議トハ爲シ難ケレハ

然ルニ國事犯ノ儀ハ必スシモ政府ニ抗敵スル者ニ限ラス社會ノ組織  
 及ヒ政体ノ設立ニ關スルノ法ヲ犯シ直接ニ其國ヲ害スルノ犯罪ハ皆  
 之ヲ國事犯トス然レハ則チ新聞條例集會條例中其政事ニ關スル諸項  
 ノ如キハ無論國事犯ノ部内ニ包含スル者ト爲シ禁獄一年以上タリモ  
 代言免許ヲ與ヘ苦シカラサル旨指令ニ及ヒ然ルヘキ哉此段相伺候也  
 明治十三年十月廿七日  
 司法卿田中不二磨

太政大臣三條實美殿

朱書

伺之趣新聞條例集會條例ニ依リ處刑ヲ受ケタルモノハ國事犯ノ限  
ニアラス

明治十四年一月十八日

別紙

改正代言人規則之儀ニ付伺

這般本省甲第一號ヲ以テ布達相成候改正代言人規則及丙第八號代言  
 人取扱手續中疑義有之左ノ條件相伺候

第一條 凡代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者五項ノ内各其一ニ牴觸ス

ルモノハ素ヨリ免許權ヲ有セサルモノニ候得共其第三項ノ詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者云々ト之アリ右ハ詐僞律ヲ總稱スル儀ニ可有之哉

第二條 前條第四項ニ國事犯ヲ除クノ外懲役并ニ禁獄一年以上ノ刑ヲ受ケタル者ト有之ハ假令ハ新聞記者ノ該條例及讒謗律ニ觸レ禁獄一年以上ニ處セラレタルモノモ免許ナラサルヤ新聞紙上ニ付受刑ノ者ハ常律トハ自カラ差異アレハ國事犯罪ニ準シ可然哉

第三條 改正規則御頒布相成候處從來免許ヲ受ケタル者其期限中ハ既ニ改正免許人ト同様營業可爲致ハ勿論ナレモ右期限終レハ繼續願差出スルニ斷然棄却シ更ニ新規出願ノ手續ヲ履踐シ試驗可致哉

第四條 既ニ前條期限終レハ改正規則ニ依リ試驗スルモノトセハ其本人共ニ於テ假令ハ客歲七月ヨリ本年六月迄一週年期限ノ者其期終レハ出願定月迄其業務ヲ經營スルヲ得サル儀ニ可有之哉

第五條 現今代言免許期限中ハ改正免許狀ヲ受ケタルモノト同様代言スルコトヲ得ル以上ハ改正規則ニ依リ組合ヲ立テ議會ノ規則編製爲致可然哉

右條々相伺候條至急御指令相成度候也

仙臺裁判所兼務

明治十三年五月廿四日

檢事 中川忠純

司法卿田中不二齋殿

裁判所

○司法省令丙第七號

明治十三年五月當省丙第八號達代言人取扱手續第七條中及ヒ以下ノ十四字ヲ刪除ス

明治十九年六月二十六日

司法大臣伯備山田顯義

○第三節 所屬代言人規則

十四年十二月司法省甲第八號布達

第一條 治罪法中所屬代言人ト稱スルハ大審院及ヒ各裁判所々在ノ地ニ居住スル免許代言人ヲ云フ

第二條 裁判官ノ職權ヲ以テ選任シタル代言人辨護人ハ正當ノ事由ヲ証明スルニアラサレハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第三條 代言又ハ辨護受任中ハ代言免許滿期ニ至リ引續營業セス又ハ廢業スト雖モ該事件終結ニ至ルマテ其代言辨護ヲ擔當スヘシ

第四條 代言又ハ辨護受任中ハ他ノ訴訟事件ヲ以其任ヲ闕クコトヲ得ス

第五條 裁判官ノ職權ヲ以テ代理人辨護人ヲ選任シタル場合ニ於テ  
モ其謝金ハ被告人ノ擔當スヘシ  
總テ謝金ニ付テハ出訴スルコトヲ許サス

○第四節 法律學卒業者  
十三年十一月司法  
省丙第十六號達

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得候事  
文部省所轄東京大學法律學部ニ於テ法律學卒業ノ者代言營業出願セシ  
キハ明治十三年五月司法省甲第一號布達改正代理人規則第二十七條  
(出願)第二十八條(試驗)ニ關セス免許狀授與候條右出願ノ節ハ卒業免  
狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨相達候事  
但本文試驗ニ關スルモノ、外代言人規則ニ準據スルハ一般代言  
人ト異ナルコトナシ

●第二章 代人

○第一節 代人規則  
六年六月第二  
百十五號布告

●長崎縣伺  
明治十七年  
三月廿六日  
本年第一號布達  
ヲ以テ詞訟代人規  
則改正相成候ニ  
付テハ從前ノ通  
代人ハ於區戶長  
公證スルニ不及  
儀トハ存候得共  
爲念此段相伺候  
也  
○司法省指令  
十七年四月  
十四日  
●新潟縣伺(電報)  
明治十七年  
五月五日  
人民ヨリ縣令及  
ヒ郡長ニ係ル訴  
訟ニ付屬官ヲ以  
テ縣令并ニ郡長  
ノ代理トナシ一  
人ニテ之ヲ兼ル  
モ差支ヘナキヤ

第一條 凡ソ何人ニ限ラス己レノ名義ヲ以テ他人ヲシテ其事ヲ代理  
セシムルノ權アル可シ  
但本人幼年者ニテ其事理ヲ辨シ難キハ其後見人及ヒ親族ノ者  
協議ノ上代人ヲ任スルヲ得ヘシ

第二條 凡ソ他人ノ委任ヲ受其事件ヲ取扱フ者ハ代人ニシテ其事件ヲ  
委任スル者ハ本人ナリ故ニ代人委任上ノ所行ハ本人ノ關係タルヘシ

第三條 凡ソ代人ハ心術正實ニシテ滿二十歲以上ノ者ヲ撰ム可シ  
第四條 代人ハ總理代人部理代人ノ別アリ總理代人ハ其代人身上諸  
般ノ事務ヲ代理スル者ニシテ部理代人ハ特ニ其委任スル部内ノ事  
務ヲ代理スルヲ得ルモノトス

第五條 凡ソ本人ヨリ代人ヲ任シ他人ト契約取引等ヲ爲サント欲ス  
ルトキハ必ラス實印ヲ押シタル委任狀ヲ與フ可シ  
但シ其家業取扱フ場所ニ於テ通常ノ事務ヲ取扱ハシムルノ類ハ  
別段委任狀ヲ與フルニ及ハス

第六條 委任狀ハ總理代人又ハ部理代人タル事及ヒ其委任シタル權  
限ヲ明白ニ記載ス可シ

第七條 委任狀書式左ノ通

○司法省指令(電報)

五月五日付伺人  
民ヨリ係ル訴訟  
ニ付テハ屬官一  
人ヲシテ縣令及  
ヒ郡長ノ代理ト  
爲シ兩職ノ區別  
ヲ立テ答辯ヲ爲  
サシムルハ苦シ  
カラズ

拙者儀某ノ事件ニ付何誰ヲ以テ總理代人ト定メ拙者ノ名義ニテ左ノ  
權限ノ事ヲ代理爲致候事  
一何々ノ事但權限ノ次第ヲ  
分條記載ス可シ  
右代理ノ委任狀仍テ如件  
年號何年何月何日  
住所身分  
姓 名 印  
(後見人等ハ住所身分何誰  
ノ後見人何誰ト記ス可シ)  
第八條 代人ヲ任スルノ期限ハ豫メ規定シ難キモハト雖モ其本人幼  
弱疾病事故等ニテ長ク委任セントスル時ハ其地方ニ新聞紙アラハ  
之ニ記入セシメ世上ニ公布ス可シ

●福岡縣伺 (電報)

明治十七年五月十日  
詞訟代人裁判所へ出願ノ節戸長又ハ區長ノ公證ニ及ハサルモ戸長ノ與書ヲ要スヘキヤ

○司法省指令 (電報)

十七年五月十五日  
詞訟代人ノ儀ニ付伺ノ趣ハ戸長ノ與書ヲ要セス

●札幌縣伺 (電報)

明治十七年二月廿八日  
郡區長戸長殘務ニ關スル民事訴訟ニ付所屬員事務多忙ニシテ代理セシムル能ハサル節  
ハ代人等ニ屬スルモ苦シカラズヤ

○司法省指令 (電報)

十七年三月二日  
郡區長戸長殘務ニ關スル民事訴訟ニ付伺ノ趣ハ代人ニ代言ヲ委任スルモ苦シカラズ

○第二節 詞訟勸解代人

十七年一月  
第一號布達

明治十三年五月司法省甲第二號布達左ノ通改正ス

詞訟又ハ勸解ニ付キ已ムヲ得ズ代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相  
當ノ者ヲ選ニ管轄裁判所ノ許可ヲ受クヘシ但シ代人タル者同時ニ二  
人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁  
判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアルヘシ

○第三節 民事裁判引合人

明治十六年二月  
司法省丁第六號

大審院 裁判所へ達

民事裁判所引合人トシテ出庭セシメタル官吏着席ノ義ハ明治十五年  
丙第三十二號達ニ準シ取扱フヘク此旨相達候事

但人民ヨリ官廳ニ係ル事件ニ對シ引合人トナリ出庭シタル官吏着  
席ノ義ニ付テハ本文ノ限ニ無之候事

▲參看 明治十五年十月司法省丙第三十二號達  
總テ官吏ナシテ職務ニ關スル事件ニ付證明セシムル爲メ其呼出ヲ  
要スルキハ本年當省丙第十號達ニ準シ取扱フ可シ此旨相達候事



准判規  
程ハ裁  
判決改

十年司  
法省丁  
二十九  
號達ヲ  
以テ消  
ル

明治四年六月廿二日達  
訴訟判規程  
第十一條境  
界論地ハ解  
訟ヲ許スヘ  
カラス堤防  
用惡水ハ彼  
我害ヲキハ  
説諭ヲ加ヘ  
解訟セシム  
ヘシ  
明治八年十  
二月十二日  
司法省布達  
中第十六號  
民事訴訟目  
安糺ノ際不  
受理又ハ願  
下ケノ取扱  
方ヲ定ム

### 第三類 (勸解出訴)

#### 第一章 勸解

##### ○第一節 勸解

○九年十一月司法省甲第十七號達

民事ノ詞訟ハ可成丈ク一應區裁判所ノ勸解ヲ乞フ可シ此旨諭達候事

##### ○第二節 勸解畧規則

勸解畧規則左ノ通相定候條此旨相達候事

##### 勸解畧則

第一條 治安裁判所ニ勸解掛ヲ置キ專ラ訴訟事件ヲ勸解セシム

第二條 勸解掛ハ判事補二名ヲ以テ之ニ充ツヘシ

但治安裁判所長ハ隨時勸解掛トナリ勸解ヲ爲ス事ヲ得

第三條 勸解掛ハ年齢三十以上ノ者ニ非レハ之ニ充ツル事ヲ得ス

第四條 第二條ノ人員ニ不足アルキ又ハ其人員ニテ不足スル時ハ他

ノ判事判事補又ハ出仕ヲ以テ之ヲ補フ可シ

第五條 勸解ヲ爲スニハ勉テ願人被願人ノ實情ヲ得ルニ注意シ雙方

ヲ勸誘調和セシムルヲ主トス

第六條 勸解ノ手續ハ從前ノ通タルヘシ

##### ○第三節 本人罷出

八年十月九日  
司法省番外達

勸解ハ其爭論ノ始末ヲ本人ヨリ直チニ聞取ルニアラサレハ事情ヲ盡  
シ難キ儀ニ付本人ニテ罷出候條此旨布達候事

但本人病氣等不得已事故アルキハ親類ノ内ヲ以テ代人トシテ差出  
可申事

##### ○第四節 歎願及再審願

十四年三月司法  
省甲第三號布達

刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省ヘ對シ歎願或ハ再審願ト唱ヘ書面差  
出候者往々有之候處右ハ固ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指令ニ  
及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

#### 第二章 出訴

##### ○第一節 出訴期限規則

十六年十一月第三  
百六十二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ雙方  
ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ヒ置キタルニ一方ノ者其條約

茨城縣伺

明治十六年  
十月廿三日

明治十四年第八  
十三號公布第一  
條ニ治安裁判所  
ハ訴訟事件ヲ勸  
解ストアレハ簡  
ハ是レ偏ニ治安  
裁判所ノ權限ヲ  
定メラレタルモ  
ノニシテ訴訟者  
ニ對スルノ命令  
ニ非ラサレハ勸  
解ハ仍ホ從前ノ  
通(明治九年御  
省甲第十七號論  
達ニ遵フ)勸解  
ヲ經ルト經サル  
ハ訴訟者ノ意中

ヲ破リタルモハ早速裁判所へ出訴致シ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加へ出  
訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴致シ候  
トモ又ハ勘辨ヲ加へ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定  
候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候キハ貸方借方請人  
証人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判  
上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定メ候條來  
明治七年一月一日ヨリ後ニ結ヒタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去  
リ出訴セサル者ハ自今條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ  
受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト  
相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候此旨布告候事

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手付金
- 一 商人互ノ賣掛金

ニアルモノニシ  
テ訴訟者カ勸解  
ヲ請フモ到底其  
効ナシト認ムル  
者ハ直チニ本訴  
ヲ起スモ固ヨリ  
苦シカラサル筋  
ト相心得可然哉  
又其但書ニ諸官  
廳ニ對スル事件  
(中零)ハ勸解ス  
ルノ限テ在ラス  
ト有之官廳カ人  
民ニ對スルモ人  
民カ官廳ニ對ス  
ルモ訴訟ニ殊異  
ハアラサレハ明  
治七年第廿四號  
御省達及ヒ八年  
甲第五號十四年

- 一 職人ノ手間代金
- 一 日雇人ノ給料
- 一 請負金
- 一 芝居等ノ木口錢又ハ棧敷錢等
- 一 男女藝者ノ揚代金
- 右ハ六ヶ月限

第二條

- 一 醫師ノ脈診及ヒ藥料
- 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
- 一 商人ヨリ商人ニ非ラサル者ヘノ賣掛代金
- 一 一ケ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ケ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
- 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
- 一 小作米金

第四編○訴訟○第三類○勸解出訴○出訴期限規則

甲第四號御省布  
 達ニ依リ考フル  
 片ハ右ハ全ク字  
 面之通人民カ官  
 廳ニ對スルモノ  
 ニ止マリ官廳カ  
 人民ニ對スルモ  
 ノハ含蓄セサル  
 儀ト相心得可然  
 哉

- 一 証據金
- 一 敷金
- 一 物品ノ借貸又ハ損料
- 一 養育料
- 一 七ケ年期マテノ奉公人給料
- 一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金
- 右ハ五ケ年限

第四條

一條約証書中期限ナキ者ハ出訴ノ日ヲ以テ期限ト看做シ候故何時出  
 訴致シ候テモ苦シカラサル事

第五條

一 從前取結ヒタル條約ニテ明治六年十二月三十一日以前ニ條約期限  
 ノ切レタル事件ハ右明治六年十二月三十一日ヲ條約ノ期限ト看做  
 ス可シ又從前結ヒタル條約ニテ其期限ノ明治七年一月一日後ニ及  
 フ事件ハ條約期限ノ切レタル翌月ヨリ第一條第二條第三條ノ種類  
 ニ從ヒ出訴ノ期限ヲ起算致スヘキ事  
 但明治五年壬申第三百號布告第三條ニ定メタル規則ハ格別ナリトス

人民ヨリ官廳ニ對スルト官廳ヨリ人民ヘ係ルトニ拘ラス其事件ハ總テ勸解セサルモノ  
 トス

●千葉縣伺 明治十六年十月一日

町村會ニ於テ評決シタル費用ノ怠納者アル片ハ土木費ヲ除ク外總テ其施行者ヨリ裁判  
 所ヘ訴出ヘキ筈ニ候處右ハ貸借買賣等人民相互ノ取引トハ同シカラサルニ付出訴ノ期  
 限無之儀ト相心得可然哉此段相伺候也

○司法省指令 伺之通 十六年十月十三日

●三重縣伺(電報) 明治十七年五月二日

戸長ヨリ協議費不納ニ付人民ニ對スル訴ハ十四年第八十三號布告第壹條但書ノ限外ナ  
 ルヲ以テ勿論勸解ヲ經ヘキモノナルヤ

○司法省指令(電報) 十七年五月八日

協議費不納ニ付戸長ニ對スル事件伺ノ趣ハ勸解ヲ經ヘキモノニアラス

●和歌山縣伺 明治十七年三月三日

町村會ニ於テ評決シタル費用怠納者ニ關スル出訴期限ノ儀ニ付客年十月一日付千葉縣  
 伺ニ對シ同月十三日御指令ノ趣ニ依レハ出訴ノ期限無之儀ニ候處區町村會法頒布以前  
 即明治十一年以前ニ係ル町村教育費ヲ怠納スル者ノ如キハ町村會ニ於テ評決シタル費  
 用同様出訴期限無之儀ト相心得可然哉

○司法省指令 伺之通 十七年三月十二日

●岩手縣伺 明治十七年三月十日

官廳ヨリ人民ニ對シ人民ヨリ官廳ニ對スル民事訴訟ハ總テ勸解ヲ須ヒス直ニ本訴ヲ起  
 シ得ル儀ニ有之候處茲ニ町村立小學資金ヲ貸付シ其辨償ヲ怠ルモノアルニ際シ之カ主

第四編 ○訴訟 ○第三類 ○勸解出訴 ○出訴期限規則

管者則學務委員ニ於テ出訴セントスルモノアリ右學務委員ハ素ヨリ官等アルニ非ス又  
其事務所ハ官廳ト云フ能ハスト雖ヒ其資金ハ學區ノ公財ニシテ之ヲ人民互相ノ貸借ト  
同視スルヲ得サルモノト被考候ニ付右等ハ無論官廳ヨリ人民ニ對スル訴訟同様相心得  
可然哉

○司法省指令 十七年三月廿七日

伺之趣ハ勸解ヲ經ヘキモノトス

●福島縣伺 明治十七年五月廿八日

貸下金負債者失踪後ノ出訴明治八年第六號公布ニ據リ履行候節ハ十五年第十二號公達  
ニ準シ取扱可然哉

○大藏省指令 伺之通 十七年十一月十九日

●兵庫縣伺 明治十七年二月廿九日

官金拜借主他債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受クルトキ追訴之儀ニ付明治十五年二月四日太  
政官第拾貳號御達有之候處右第一項用紙ハ通常公文用紙ニナスト雖ヒ其書式ハ從前ノ  
通訴答文例ニ據リ可認儀ト被存候得共爲念此段相伺候也

○司法省指令(電報) 十七年三月十日

追訴書式ノ儀ニ付伺ノ趣ハ訴答文例ニ據ルヲ要セス

●福岡縣伺 明治十七年二月十六日

甲乙之坑主有リ元ト二區之借區場ヲ甲ヨリ乙ニ讓リ渡シノ約ヲ成シ一區ハ既ニ順序ヲ  
經テ乙之借區ニ歸ス一區ハ約束上不完全爲ニ數年葛藤ヲ生シ終ニ訴訟トナリ始審裁判  
所ニ於テハ甲ノ敗訴トナリシニ甲ハ之ニ服セス且下控訴中ニ有之然ルニ其坑區ノ權ハ  
未タ甲者ニ存スルヲ以テ依然其坑業ヲ繼續ス此ニ於テ乙ハ已ノ損害ヲ辭柄トシ坑業ノ

五年九  
月十三日辨  
官ヨリ刑部  
省ヘ達

以テ廢  
神社及ヒ神  
官ノ訴訟ハ  
刑部省ニ於  
テ取扱ハシ

控訴上

告手續

等ヲ以

テ消ル

明治四年正  
月廿四日民  
部省ヨリ刑  
部省ヘ問答  
越訴函既准  
判規程ヲ設  
ク

司法省  
職務定  
月二日司法  
省伺正院指  
制訴答  
令

中止ヲ請求ス判事未タ審判ヲ下サ、ルニ先チ乙ノ申立ヲ容レ坑業中止ヲ本縣ニ請求ス  
本縣ハ該判事ノ請求ヲ正當ノ順序ヲ盡サ、ルモノト認定スルヲ以テ之ヲ拒絕セントス  
然ルニ從來如斯例規モ無之ニ付一應相伺候條何分之御指揮相成度相伺候也  
○工部省指令 十七年三月八日  
書面之趣拒絕候儀ト可相心得候事

### ○第二節 金穀貸附出訴濟方

明治六年一月  
第十號布告

金穀貸付証文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ証書取  
置後日訴出ルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二ヶ月ノ内濟方可申付事  
但從前今後共無年季貸付中内証屢々返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ至  
ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤土地家屋等ノ貸賃ハ不動産  
ニ屬スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖ヒ可及裁判事

### ○第三節 預金穀

明治十年一月  
第十二號布告

預ケ金穀ノ訴訟ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使  
用ヲ爲サ、ル明文アルモノハ年數ニ拘ハラテ受理スヘキ成規ニ候處  
自今二十年以前ニ係ルモノハ一切裁判不及候條此旨布告候事

文例三  
テ消ル

原告被告條  
例並附錄

○七年三月第二十七號布告  
預金穀ハ其証書中ニ封印ノ儘預リ置候歟或ハ預リ中融通使用ヲ爲サ  
ルノ明文ナキ分ハ出訴候トモ本年五月二日ヨリ以後ハ貸金同様ニ  
裁判可致候條此旨布告候事

○第四節 地所質入書入  
出訴期限

明治十八年六月内  
務省甲第貳拾號達

地所質入書入建物船舶書入質ノ公証ヲ受ケタルモノハ出訴期限無之  
旨今般太政官ノ裁令ヲ經候條爲心得此旨相達候事

○明治十四年十月十五日司法省伺定  
質地出訴期限ノ儀ニ付伺

尋常貸附<sup>米</sup>金ノ詞訟ハ滿五ヶ年ヲ以テ出訴期限トナス成法ナリト雖モ  
質地ヲ以テ擔保シタル貸附<sup>米</sup>金ノ詞訟ハ固ヨリ之ト同視シ難ク負債主  
カ其債主ナシテ質地ヲ保有セシメ置キ而シテ之ヲ取戻サハルニ於テ  
ハ其負債アルヲ認識セシハ言テ埃タス且債主カ質地ヲ保有スルハ  
其權利ヲ拋棄セサルヲ徵証スルニ足ルヲ以テ期滿得免アルノ理ナシ  
因テ出訴期限規則第三條第一項ニハ依準シ難キモノニ付<sup>出訴期限</sup>ハ  
無之儀ト相心得可然哉自今伺出ノ向モ有之候ニ付至急御指令相成度

此段相伺候也

明治十四年五月三十一日

司法卿田中不二啓

太政大臣三條實美殿

朱書

伺ノ趣出訴期限規則第三條第一項ニ據ルヘキ儀ト可相心得事

明治十四年十月十五日

○第五節 裁判執行

十一年三月司法  
省丁第九號達

裁判所執行ノ出訴期限ニ付高知裁判所ヨリ甲號ノ通り伺出ニ因リ乙  
號ノ通太政官ヘ伺候處伺ノ通ト御裁令有之ニ付丙號ノ通指令候條爲  
心得相達候事

甲號 高知裁判所長判事石井忠恭伺(十一年一月十二日)

明治八年四月廿五日滋賀縣伺ノ御指令ヲ玩味スルニ主タル訴件ニ  
附帶シ訴訟入費曲者ヨリ直者ヘ償却可致旨裁判言渡ノ後直者ヨリ  
滿六ヶ月ヲ經過シテ其償却ヲ請求スルキハ出訴期限第一條ニ據リ  
直者ニ於テハ要償權利ヲ失シ曲者ニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得ルニ  
至ル然ルニ主タル訴件ニ限リ權利者ニ於テ荏苒數年ノ久ヲ經過ス

第四編○訴訟○第三類○勸解出訴○地所質入書入出訴期限

ルモ裁判執行ヲ請求スルヲ得ルハ允當ナラサル様被相考等シク是  
レ直者ノ曲者ニ於ケル如ク本案ニ關スル(資掛代)等ノ訴件モ初審又  
ハ終審裁判言渡當日ヨリ起算シ夫々該訴ノ種類ニ應シ出訴期限ノ  
約條ヲ經過シテ權利者ヨリ裁判執行ヲ請求スルハ權利者ニ於テ  
ハ裁判權利ヲ拋棄シ義務者ニ於テハ其義務ヲ免レタルモノト看做  
シ裁判執行ノ請求狀及却下可然哉至急御指令ヲ仰キ候也

乙號 太政官へ上申(十一年二月八日)

別紙高知裁判所伺ノ趣ヲ審思スルニ裁判言渡ノ後更ニ執行ヲ請求  
セス荏苒歲月ヲ經過スル者ハ固ヨリ期滿得免ノ效ヲ得ヘシ何トナ  
レハ裁判言渡ニ因リ裁判ヲ執行スルノ權義ヲ生セシムルヲ以テ其  
權義ニ付必ス期滿得免ノ効アラサルヘカラサレハナリ抑モ斯ノ期  
滿得免ハ訴訟原案ノ種類ニヨリ期滿得免ノ長短ニ拘ハラサル可シ  
蓋シ裁判言渡ナル者ハ雙方ノ間ニ更ニ裁判上ノ契約ヲ生セシムル  
ノ理アルヲ以テナリ我國現行ノ出訴期限(六年第三百六十)ヲ視ルニ裁  
判執行ノ出訴期限ニ於テハ明文アルヲナシ而シテ其最モ長キ者五  
年ナリトス因テハ該伺ノ如キ訴訟原案ノ種類ニ拘ハラヌ滿五年ヲ  
以テ期限トナスコ允當ト思考スルニ因リ左ノ通指令可及ト存候得

共明文ナキヲ以テ此段申稟候也

丙號 指令

伺ノ趣裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年  
タルヘシ

○第六節

勸解中出訴期限  
滿期ノ者處置方

九年四月司法省  
第四十四號達

區裁判所或ハ裁判所支廳ニ勸解願出候者勸解中出訴期限滿期ノ者處  
置方左ノ通り可相心得此旨相達候事

第一條 勸解出願ノ者勸解中ニ出訴期限ノ滿期ニ至ル者ハ其勸解不  
調ノ翌日ヨリ滿三十日マテハ出訴期限ノ猶豫ヲ與フヘシ

第二條 勸解調ハサルトキ右滿三十日迄ニ府縣裁判所へ出訴ヲ爲サ  
ルニ於テハ其ノ事件ニ付出訴スルノ權利ヲ拋棄シタルト看做ス  
ヘシ

○第七節

課税ニ關スル出訴

十五年五月第二  
十二號布告

課税ニ關スル處分ニ就キ不服アリテ出訴セントスル者ハ先ツ其旨ヲ  
申立課額ヲ上納シ領収証書ヲ添ヘ其翌日ヨリ六十日內ニ訴出ツヘシ

但納稅期限前ニ訴出テ訴訟中ト雖モ其期限ニ至レハ課稅ヲ上納スヘシ

○第八節 負債者失踪後ノ訴訟 八年一月第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿期ニ至リ直ニ裁判所へ訴出ツヘキ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラス定約滿期又ハ出訴期限將ニ尽ントスルヲ以テ裁判所へ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其旨届ケ出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪者所管ノ戶長へ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シタル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ末行衛相分ラサルニ付追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ者ニ掛リ此裏書証

書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻ス可キ事

第四條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見當リ又ハ搜索三十六ヶ月ノ時限ハ明治六年(十一月)第三百六十二號布告出訴期限ノ限内ニハ加算致サル事

●第二章

○第一節 代人ニ對スル訴 十六年六月司法省丁第十八號達

義務ノ証書之某代理某ト代人ノ名ヲ以テ捺印結約シタル者ハ權利者ニ於テ此証書ヲ提供シ出訴スルニハ其本人ヲ相手取ルヨリ當然ナリト雖モ便宜ニ隨ヒ記名捺印シタル代人ヲ相手取ルコトアルモ必ス棄却スルヲ要セス他ノ本人又ハ代人ヲ引合人トシテ召喚シ俱ニ之カ答辭ヲ爲サシメ被告者ノ義務ニ販スル片ハ被告ヲシテ負擔セシメ引合人ノ義務ニ販スルニ於テハ引合人ヲシテ負擔セシムル様相當ノ裁判ヲ爲シ與フヘキ筋ニ有之候條豫テ心得モ可有之候得共爲念此旨相達候事

○第二節 支廳出訴 十六年一月司法省甲第二號告示

本年第二號布告ヲ以テ始審裁判所管内ニ支廳ヲ被置候付テハ民事ノ訴訟ハ支廳へ出訴スヘキモノト雖モ被告人ノ承諾ヲ得タル上ハ其承諾書ヲ添へ始審裁判所へ出訴スルコトヲ得

但支廳管内ニアル治安裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ニ於ケルモ本文ト同シ

○第三節 訴訟ノ取捨

明治六年六月  
第二百號布告

諸道各驛附屬村々助郷其他驛費ニ關スル滯金丁卯十二月以前ノ分ハ一般不及裁判候事

○明治六年四月司法省第六十九號達  
爾來郵便等ヲ以テ訴狀差出候者往々有之右ハ體裁ニ於テモ不都合ニ涉リ實際ニ於テモ裁判難相成候ニ付以來右等ノ書類差出候節ハ一切不取上其時々燒捨候條此旨相達候事

○明治十四年三月司法省甲第三號布達  
刑事民事ノ裁判上ニ係リ司法省へ對シ歎願或ハ再審願ト唱へ書面差出候者往々有之候處右ハ固ヨリ法律ニ戻リタルモノニ付自今指令ニ及ハサルハ勿論却下ノ手續ヲモ不致候條此旨布達候事

○第四節 外國人訴訟規則

明治六年六月  
第二百五號布告

(編者曰) 此外國人訴訟規則ハ明治六年六月十九日當分施行ヲ停止ト達セラル故ニ現行ニアラサレトモ當分ノ内施行ヲ停メテラレタルモノナレハ何レ解停ノ日アルナラシ故ニコ、ニ掲出ス

外國人訴訟規則別紙ノ通被相定候條此旨相達候事

外國人日本人ニ對シタル事件各開港場或ハ開市場裁判所へ訴出ル者ハ總テ左件ノ定則ヲ遵守スヘシ

聽訟手續第一章

一 訴訟ヲ爲ス者ハ都テ書面ヲ以テシ原告人或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受ケタル代人ヨリ左ノ箇條ニ從ヒ明細ニ認メ出スヘシ其訴狀或ハ他ノ書類ニテモ外國文ヲ以テ認アルモノハ裁判所ニテ要スル時ハ一々日本文ヲ添へ出スヘシ

- 第一 原告人ノ本國並日本居留ノ住所地名
- 第二 被告人ノ住所身分姓名
- 第三 求ムル所ノ金額或ハ賠償ノ高



第四 訴訟ノ由テ生スル明細ナル情實

第五 取引中被告人ヨリ原告人ノ請取タル金及品物アレハ其員數ヲ明細ニ記載スヘシ

第二章

一 訴狀ノ書類ハ總テ本書ト真正ノ寫ト都合ニ通テ出スヘシ

第三章

一 訴狀ヲ請取タル上ハ其證據明確ナルキハ直ニ其被告人ヲ裁判所ニ呼出シ答辨ヲ爲サシムヘシ

一 證據明確ナラサル時ハ裁判所見込ヲ以テ原告人ヨリ證據金又ハ請合證書ヲ出セシ上被告人ヲ呼出スヘシ

第四章

一 被告人ノ答辨モ亦自身或ハ正ク法ニ隨テ委任ヲ受ケタル代人ニテ記名シタル書面ヲ以テ其訴狀中ノ件々ニ對シ一々答辨ヲ爲スヘシ

第五章

一 被告人ノ答書モ亦正副二本ヲ出スヘシ原告人一見センコトヲ乞フ者アラハ副本ヲ以テ貸與ルコトヲ得セシムヘシ

第六章

一 訴狀ハ被告人ヨリ書面ヲ以テ開申セル時日ヲ以テ順次ヲ立テ裁判ヲ爲スヘシ但事故アリテ原告人及被告人ノ雙方或ハ其一方ヨリ裁判猶豫ヲ願出ル時ハ此例ニ非ス

第七章

一 審問及裁判ノ日限ハ前以テ雙方ノ者共ヘ報知シ置一件始終ノ審問ハ凡テ之ヲ公ニスヘシ諸引合人ハ其訟庭ニ出テタル時ハ先引合トシテ差出セシ本人ヨリ引合人ヘ對シ一々其事蹟ヲ質問シ而シテ後相手方亦審官ニ乞ヒ右ノ引合人ヘ對シ眞否ヲ質問スルヲ得ヘシ若シ又一方ノ人自ラ證明センコトヲ申立ルキハ審官ノ令ニヨリ相手方之ニ對シテ質問スルヲ得ベシ審官ハ此間何時ニテモ引合人ニ質問スベシ引合人ハ引合ノ任ニ當ル前毫モ欺詐ヲ用ヒス誠實ニ應答ヲ爲ス可キコトヲ陳述スヘシ

第八章

一 引合人ノ申立ヲ聞終リテ後尙一方ヨリ申立ル事アリト乞フ時ハ其對論ヲ聞キ若シ双方ヨリ申立ルコトアルキハ原告其對論ヲ始メ且ツ之ヲ終ルヲ得ヘシ

第九章

一原告人或ハ被告人孰レニテモ差出セル證據書ハ裁判所ノ允許ヲ得テ寫チ差出シ本書ヲ取下クルヲ得ヘシ

第十章

一譯官ヲ要スルハ双方自ラ之ヲ差出スベシ若シ出シ能ハサルハ裁判所ニテ相當ノ人ヲ得ヘキハ裁判所之ニ命シテ辨セシメ其用ニ供セル方ヨリ相當ノ料ヲ差出サシムヘシ

第十一章

一都テ訴訟ノ裁決ハ其裁判ノ條理ヲ書面ニ認メ訴狀ニ添ヘ置クヘシ孰レノ方ニテモ望ミアル時ハ右裁決或ハ意見ノ書及其訴訟ニ關シ差出セル書類ノ寫チ一見スルヲ得ヘシ

第十二章

一裁決ノ後十日ヲ經サル内裁決ヲ受ケシ方ヨリ相手方ニ掛合ノ上再ヒ裁判ヲ乞フ時ハ裁判所之ヲ聽用スヘシ尤モ裁判所ニテ以前ノ裁斷不當ナリト思フ時歟或ハ裁決ノ後新々ニ肝要ナル證據ヲ得如斯證據ヲ差出スニ於テハ裁判所必ス以前ノ裁決ヲ更變スルノ理アリト思フ時ニ限ルヘシ

第十三章

一各開港場裁判所ニ於テ處斷セル裁判ノ趣ニ不伏ナル時ハ司法省裁判所へ上告スルヲ得ヘシ

第十四章

一前條ノ如ク上告スルニハ裁決ノ後三ヶ月ヲ越ユヘカラス且右ノ情由豫メ相手方或ハ代人ノアル時ハ其代人ニ書面ヲ以テ告知ラセ且其開港場ノ裁判所へモ豫メ其情由ヲ申立ヘシ

但上告スルモノ故アリテ此期限ヲ延ンテ欲スルモノハ預ケ金ヲ爲シ又ハ証書ヲ出シ豫メ願立ルルハ事實不得止分ハ六ヶ月迄ハ裁判所之ヲ許容スヘシ既ニ上告ニ及フ時ハ其裁判ヲ爲シタル開港場或ハ開市場ノ裁判所ヨリモ司法省裁判所へ其情由ヲ告知シ双方ノ口書及其訴訟ニ關シタル諸書附ノ寫チ差出スヘシ

第十五章

一裁判所ハ裁判ニヨリテ決定スル所ノ償還ハ速ニ之ヲ遂ケシムル様取計フヘシ

治罪手續第一章

一日本人ノ罪科アルヲ外國人ヨリ申出ルルハ公然之ヲ吟味スヘシ原

告人及ヒ其引合人トナルヘキト申出タルモノ或ハ被告人及其引合人タルヘキ者ヲ吟味スルヲ猶訴訟手續ニ於ケルカ如シ

第二章

一 裁判所ハ訴訟裁判ニ於ケルカ如ク罪科裁判ニ於テモ原告人或ハ被告人ヲ論セス孰レノ方ニテモ其引合人トナルヘキ者ヲ呼寄セント欲スルルキハ其裁判所ノ權限ニ循ヒ之ヲ扶助ナスヘシ

第三章

一 罪科ノ裁決ハ書面ヲ以テシ被告人罪科ニ伏スルルキハ之ヲ普通至當ノ罪科ニ處スヘシ

○第五節

外國人ヘ係ル訴訟手續

明治八年五月司法省甲第三號布達

內國人ヨリ外國人ヘ係ル民事刑事ノ訴訟手續左ノ通相定候條此旨布達候事

內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟ハ原告人其事由ヲ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ヘ申訴スヘシ

▲參看 明治九年十月司法省甲第三號ヲ以テ本令中刑事ノ二字ヲ

剛除スル旨布達セラレタリ

○明治九年九月司法省甲第拾二號布達

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左之通相定候條此旨布達候事

第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民事附帶ノ訴訟ハ檢

事其他ノ警察官(東京ニテハ警視廳其他ノ府縣ハ地方官)ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ムヘシ

第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル者其償ヲ求ムル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

○第六節

諸費額ニ關スル出訴

十五年十二月第七十四號布告

備荒儲蓄金及ヒ區町村會若クハ水利土功ノ集會ニ於テ評決シタル土木費ニ關シ不服アリテ出訴セントスル者ハ都テ明治十五年(五月)第二十二號布告ニ依ルヘシ

○十六年八月第三十一號布告

徵發令ニ依リ負擔ス可キ費用ノ怠納者ハ明治十年十一月第七十九號布告ニ依リ處分ス可シ但財産公賣ノ際買受望人ナキトキハ徵發區ニ沒

入シ不足金アルトキハ其區ノ損失ニ歸ス  
右費用ニ關スル處分ニ就キ不服アル者ハ明治十五年五月第二十二號布告ニ依ル可シ

○第七節

人民郡區戶長ニ對スル訴訟

十五年三月司法省丁第十五號達

人民ヨリ郡區戶長ニ對スル訴訟取扱方ノ儀ニ付昨明治十四年丁第九號達モ有之候處受否又ハ判決案伺出ノ際往々不都合ノ向モ有之候條右伺出ノ節ハ原被ヨリ差出シタル訴答書ハ勿論一切ノ書類正本一通及ヒ謄寫ノ副本一通合セテ二通并ニ判決案モ正副二通相添可差出儀ト可心得此旨相達候事

○第八節

人民官衙ニ對スル訴訟

明治七年九月司法省第二十四號

今般人民ヨリ院省使府縣ニ對スル訴訟取扱ニ付假規則別冊ノ通相設ケ候間以後右ニ準據可致候條此旨相達候事

人民ヨリ官府ニ對スル訴訟假規則

第一條 凡人民ヨリ官府ニ對シ一般公同ニアラサル人民一個ノ訴訟ハ司法官ニ於テ受理スヘシ其事件左ノ如シ

但箇區内又ハ幾個ノ人民共有ノ物及會社等ハ一個ノ人ト看做スヘシ

- 一官府所有ノ土地ニ關シタル事
- 一官府ノ會計及ヒ金銀貸借ニ關シタル事
- 一官府ノ管轄スル建造物等ニ關シタル事

第二條 訴訟事件ニ付テ被告タル官府ハ其長官ヨリ其代人ヲ撰ミ差出スヲ得ヘシ

其代人ノ外更ニ事件ノ證ヲ取ル爲メ主務ノ官吏ヲ呼出サ、ルヲ得タルトキハ其本人ヲ呼出スヲモアルヘシ  
但シ奏任以上ニ係ル者ハ奏請ヲ經テ區處ス

第三條 裁判上官府ヨリ人民ニ對シ償還スヘキ條理アルトキハ其事由及ヒ裁判ノ見込ヲ具狀申稟ス可シ  
若シ主務ノ官吏一己ノ失錯ニ出テ其官ヨリ償還スベキハ具狀申稟スルニ及ハスト雖モ事情止ムヲ得サル場合ニテ官府ヨリ償還セサルヲ得サルハ具狀申稟スルヲ前項ニ同シ  
但具狀申稟ヲ經テ裁決スル者ハ之ヲ終審トシ更ニ控告スルヲ得ス

第四條 右ニ記載シタル場合ノ外人民一個ノ事ニアラサル一般公同ノ爲ニ起ル訴訟ニテ行政裁判ニ歸スル者ト雖モ常今其設置ナキヲ以テ之ヲ訴ル者アルトキハ先以テ具狀申稟シテ正院ノ指圖ヲ乞フベシ

- 一官ノ會計ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一道路ヲ作ルコトニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一工部ノ製造建築ニ付一般ノ人民ニ關スル事
- 一此官廳ト彼官廳トノ間ニ起ル權限ノ事
- 一行政官ト司法官トノ間ニ起ル權限ノ事

但右ノ裁判ニ付テノ手續ハ第二條第三條ニ同シ

▲參看 明治七年九月司法省第二十五號達ヲ以テ本文中官府ノ二字ハ總テ院省使府縣ノ五字ノ誤ノ旨達セラレタリ

### ●第四章 訴答控訴

#### ○第一節 訴答文例

六年七月第二百四十七號布告

#### 第一卷 原告人ノ訴狀

第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管内ノ(町村)役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ(町村)役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取リタル後訴狀ヲ作ルヘシ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書附ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某(府縣)管下某國某郡某(町村)住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類若シ一戸ノ本主ニ非ラスシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某ノ厄介ト記スヘシ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ(町村)役場ニ願ヒ役場ノ交通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ取ルモ亦妨ケナシトス但シ役場交通ノ入費ハ原告人ヨリ償フヘシ但此章原告外國人ナルキハ本人名前本國職分及ヒ寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載スヘシ

第二章 代書人ヲ用フル事

第三條

第四條

第五條

(右第二章三ヶ條ハ明治七年七月十四日第七十五號布告ヲ以テ代書人ヲ撰ミ代書セシムルト否トハ本人ノ情願ニ任セラレテ訴答文例中之レト抵觸スル廉々ハ總テ廢止セラレタリ)

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作クルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ憑據ト爲スヘキ事件ヲ掲ケ文飾冗長ナラサルコトニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ヲキ事件ヲ述フルコトヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印スヘシ(附錄第一號ヲ見合)

但外國人ノ爲メニハ第一章但書ヲ見ルヘシ  
第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署スルコト能ハサルハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具スヘシ但外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルコトヲ得ヘシ其日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受クヘキ裁判所ノ八里ノ距離外ニ在ルルハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載スヘシ若シ八里以内ナルルハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ過キテ返濟セサル事情ヲ書スヘシ(附錄第二號ヲ見合スベシ)

田島ヲ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

但以下十九條迄原告外國人ナルルハ其訴訟ノ趣意並願意ヲ簡明ニ記載スヘシ

但附錄第十八號ヲ見合スヘシ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル年月日トヲ標記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル

事情ヲ書スヘシ  
借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等  
ノ仕送り金ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照スヘシ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀  
賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總  
計ノ高ヲ出シ之ニ被告人ノ証印アルヲ記入シ次ニ違約淹滞シタ  
ル事情ヲ書スヘシ(附錄第三號ヲ)  
(此項ハ明治十年第四十四號布告及ヒ  
司法省丁第二十七號達ニ因リ消滅ス)  
(照ヲ施ス數字ハ明治十年第  
四十四號布告ニ因テ消滅ス) 賣掛代金云

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀  
諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル片ニ  
至リ被告人違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ買  
附タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物  
品ヲ受取ルヘキ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫  
載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ(附錄第四號ヲ)  
(見合スヘシ)  
諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ到リ殘金ヲ受取ルヘキ片  
ニ被告人違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金  
ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡スヘキ約定期限ノ

年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス  
ヘシ(附錄第五號ヲ)  
(見合スヘシ)

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀  
諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負  
ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トヲ標記シ次  
ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀  
奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサ  
ル者ヲ取還サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入レタル年月日  
ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載  
シ次ニ違約ノ事情ヲ書スヘシ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ  
其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀亦本條ニ照ラス可  
シ  
奉公又ハ弟子奉公人ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞  
ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ模倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受ケタル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ証印又ハ証書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書スヘシ  
諸商工專賣ノ免許ナクシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨ケアルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴フルヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ証書確實ナル者ハ之ヲ訴フルヲ得ヘシ其訴狀ハ取引ノ模様ニ付キ各種ノ本條ニ照スヘシ  
先キニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相抵觸スルヲナカルヘシ(第十三號ヲ見合スヘシ)

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離婚ヲ爲スヘキ理由ヲ書スヘシ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母、祖父母アラザレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲スヘシ(附錄第六號ヲ見合スヘシ)

原告人妻ナルモ前條ニ照ラシテ其父母親族等ヨリ訴フヘシ若シ事危急ニ出テ親族等ニ告グルニ暇ナキハ自ラ訴フルヲ得ヘシ

第十六條 養子女離別ノ訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女ト爲シタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別スヘキ理由ヲ書シ原告人親族アラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ與書連印ヲ爲スヘシ

本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照スヘシ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴フルヲ得ヘシ養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ爲スヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被双方ノ戸籍人別



ト讓狀遺狀等ノ証書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續スヘキ條  
理ト被告人相續スヘキ條理ナキコト書スヘシ(附錄第六號ヲ  
見合スヘシ)

第十八條 田畑山林等賣買違約ノ訴狀

田畑山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸  
家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照スヘシ

田畑山林建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價ヲ受取ラントスル訴狀  
モ第十條第二項ニ照スヘシ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪  
圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書スヘシ

舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱書スヘシ  
繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃  
色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用フヘ  
シ(附錄第七號ヲ  
見合スヘシ)

但シ第七條但シ書ヲ見ルヘシ

第二十條 被告ノ訴狀

原被告人豫審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスノ之ヲ上

等ノ裁判所ニ控訴セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目  
ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日ト訟廷ニ臨ミタ  
ル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得ヘキニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言  
渡書ノ寫ト應決ニ服セサルノ旨趣ト書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊  
ト爲シ訴出ヘシ(但書ハ明治八年第九十三號布告登訴上告手續ニ因テ刪除シ第三  
項ハ同年第九十一號布告七等裁判所章程第一條ニ因テ刪除ス)

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止マルヘキ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ハラズ訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書  
スルニ限ルベシ又原告人一名ニシテ全時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ  
各冊ニ作ルヘシ

第六章 一冊ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スルヲ得ル事

第二十二條 貸借二事以上ニシテ原被告人共別人ニ非ラザレハ一冊  
ノ訴狀ニシテ二件以上ヲ合スヲ得ヘシ

第七章 原告人連名ノ訴狀ノ事

第二十三條 債主連名ノ証文ヲ以テ米金等ヲ貸附タル訴狀ハ連名ヲ  
以テ訴フヘシ若シ債主連名三人ナルチ一人ニシテ訴フル片ハ他ノ  
二人ヨリ依頼ノ証書ヲ以テ訴フヘシ(附錄第八號ヲ  
見合スヘシ)

第二十四條 債主二人以上ニシテ管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄

ニ訴フルモ乙ノ管轄ニ訴フルモ其便宜ニ從フ可シ

第八章 連名ノ被告人ヲ訴フル事

第二十五條 負債主連名ノ借用証文ヲ以テ貸渡シタル米金等ノ訴狀ハ連名ノ人數ヲ尽ク相手取ルヘシ

第二十六條 負債主連名中若シ失踪死亡等ニテ相續人ナキ者アラハ連名ノ末ニ其人名ヲ記シ年月日失踪死亡等ノ事ヲ其者ノ管轄戶長某ヨリ承ルト附載スヘシ(附錄第九號ヲ見合ス可シ)

第二十七條 負債主ノ連名中管轄ヲ異ニスル者アラハ甲ノ管轄ニ於テ審判スルヲ願フモ乙ノ管轄ニ於テスルヲ願フモ原告人ノ情願ニ任スヘシ

第九章 讓証文ヲ以テ訴フル事

第二十八條 (本條及次條ハ但書ヲ除クノ外明治九年七月六日第九十九號布告ニ因テ削除セラレタリ第九十九號布告ハ此末尾ニ在リ)

第二十九條 (刪除)

但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得ヘシ

第十章 代言人ノ事

第三十條 (刪除)

第三十一條 (刪除)

第三十二條 (刪除)

(本章ハ明治九年二月二十日第十八號布告ヲ以テ刪除ス)

第二章 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フヘシ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ルト原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾セハ解訟ヲ請フヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈スヘシ(第四十七條及第四十八條ヲ見合スヘシ)

第二 原告人ノ述フル所非理不實ニシテ辨解スヘキ確証アラハ其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書スヘシ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アルヘシ(附錄第十三號ヲ見合スヘシ)

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用フヘシ若シ本人自署スルコト能ハサルハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記スヘシ

第五 答書ハ十六行ニテ一行十五字詰ニ認テ正副二通ヲ具スヘシ

第二章 代書人ヲ用ユル事

第三十四條 (此章ハ明治七年第七十五號布告ヲ以テ刪除ス)

第三章 代官人ノ事

第三十五條

第三十六條

第三十七條

(此章ハ前卷第十章ト同ク削除ス)

第四章 原告人ノ返リ証書ヲ所有シタル答書ノ事

第三十八條 負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ証書ヲ還附セサルヲ以テ二重ノ催促ヲ爲ス訴訟ハ被告人其答書ニ返リ証文(返リ証文ハ債主ヨリ原ノ証書ヲ還付セスシテ其米金受取ノ証書ヲ交付スルヲ云フ)ヲ寫載シ次ニ原告人二重ノ催促ヲ爲シタル旨ヲ書スヘシ

第三十九條 原告人米金穀等ヲ受取タルノミノ證書ニシテ貸附ノ米金ヲ受取リタル確証ノ文字ナク又ハ他ノ証據トスヘキ証跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ証書ヲ以テ返リ証文ト看做スヲ得ス  
第五章 原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條 借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債主ニ熟識シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其証書ニ押印ヲ爲シタル債主ヨリ其約ヲ破リ本証文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札(對談一札トハ返濟延期ノ証書ヲ云フ)アルヲ記シ次ニ其証書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告人ノ約ヲ破リタル旨ヲ書スヘシ

第四十一條 負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ債主本証文ニ據リ訴出タル原由アルキハ負債主ナル者已レヨリ約ヲ破リタル返濟延期ノ証書ヲ以テ原告人破約ノ証ト爲スヲ得ス

第六章 原告人証書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條 被告人ノ証書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ証スル爲ニ管轄村ノ役場ニ届ケ置キタル年月日ノ人別帳ノ寫ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト証書ノ印ト相違シタル旨ヲ書スヘシ

第七章 經界ヲ爭フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照スヘシ

第八章 既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ルヘキ米金アリテ其請取ルヘキ期限モ亦過キ未ダ訴ヘスト雖モ双方均ク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ニ接續シ差引ノ精算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ルヘキ米金ノ証書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書スヘシ

第四十五條 負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答フルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未ダ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲スヘキ米金ヲ以テ乙某ニ返濟センコトヲ答フルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ラス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章 對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルコト能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十四號ヲ見合スヘシ)

第四十七條 前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被告双方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ定約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照スヘシ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十五號ヲ見合ス可シ)

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及原告人ノ與書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十六號ヲ見合スヘシ)

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原被告入對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被告人ノ負債ヲ延期代償センコトヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ証書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシムヘシ(附錄第十七號ヲ見合スヘシ)

▲參看

九年七月第九十九號布告

金穀等借用証書ヲ其貸主ヨリ他人ニ讓渡スルハ其借主ニ証書ヲ書換ヘシムヘシ若シ之ヲ書換ヘシメサルニ於テハ貸主ノ讓渡証書有之トモ仍ホ讓渡ノ効ナキモノトス此旨布告候事  
但相續人へ讓渡候ハ此限ニアラス

○第二節 同附錄

○同上

第一號

訴狀表紙ノ式(美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユヘシ)

年月日

某 訴 狀

住所

身分

氏 名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴フルハ貸金催促ノ訴狀ト記シ流質地ノ爭訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類

訴狀ノ式

住所

身分

原告人 氏 名

住所

身分

被告人 氏 名

標記云々

右原告人氏名申上候私儀云々  
年月日

住所 氏 名 印  
身分

某

御裁判所

代書人 氏 名 印  
住所 身分

(明治六年九月第三百十二號布告參看本節末尾ニ在リ)

第二號

貸金催促ノ訴狀

貸金催促ノ訴

原告人 住所 氏 名  
身分

被告人 住所 氏 名  
身分

一元金何圓 (年月日貸附)  
年月日期限  
一利金何圓 一年又ハ一月幾分ノ利  
合何圓

右証文ノ寫左ノ如シ  
借用証文  
一金何圓  
右云々

貸主

名 宛

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所 氏 名 印  
身分

借主 氏 名  
証人 氏 名

某

御裁判所

住所

身分

代書人

氏

名印

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

賣掛代金淹滞ノ訴

住所

身分

被告人

氏

名

一金何圓

某

御裁判所

住所

身分

代書人

氏

名印

右賣掛帳ノ總計高ニ御座候

但帳面ニ被告人ノ証印有之候

若シ賣掛帳ニアラスシテ証文ナレハ其証文全文ノ寫ヲ

出スヘシ

右原告人氏名申上候云々

住所

氏

名印

年月日

第四號

買附米引渡違約ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

買附米引渡違約ノ訴

住所  
身分  
被告人 氏 名

一米何石 (年月日買取約定済  
此度受取ルヘキ石高)

代金何圓 (一石ニ付  
何圓換)

内何圓 年月日手付金トシテ渡済

残何圓 年月日限現米引替ニ渡スヘキ約定

右約定証書ノ寫左ノ如シ

証書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

住所  
身分  
氏 名 印  
代書人 氏 名 印

某

御裁判所

第五號

賣附生糸代金引渡違約ノ訴狀

住所

身分

原告人 氏 名

住所

身分

被告人 氏 名

賣附生糸代金引渡違約ノ訴

一金何圓 (年月日限生糸引替ニ  
テ受取ルヘキ殘金高)

元金何圓 (年月日生糸何斤  
賣附約定金高)

但何斤ニ付何圓替

内何圓 (年月日手付ト  
シテ受取済)

右約定証ノ寫左ノ如シ



証書云々  
 右原告人氏名申上候云々  
 年月日  
 氏  
 住所  
 代書人 氏  
 身分  
 氏  
 御裁判所  
 某  
 御裁判所  
 氏  
 住所  
 代書人 氏  
 身分  
 氏  
 名印  
 名印

第六號

妻離別ノ訴狀

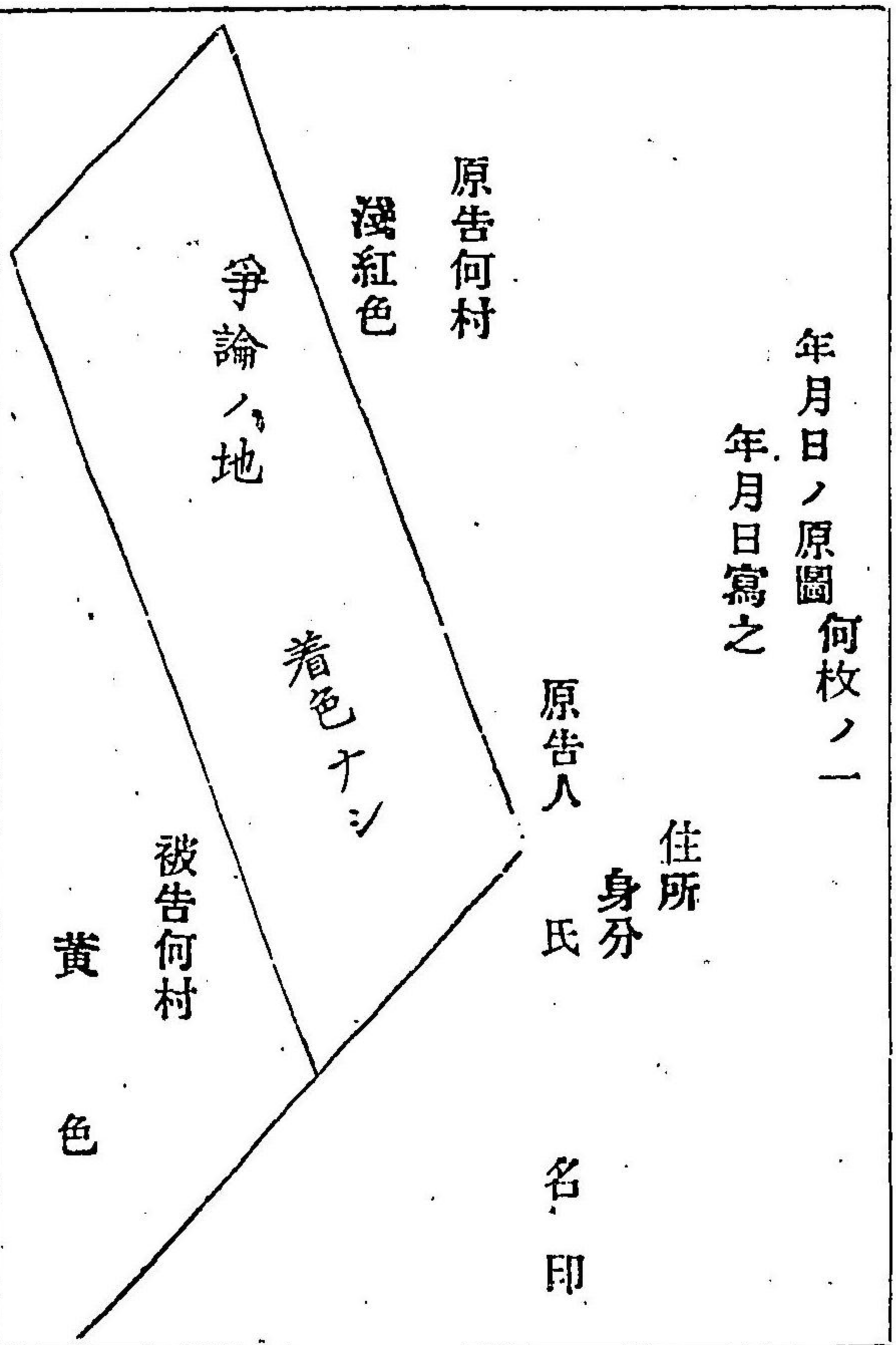
妻離別ノ訴  
 原告人 住所  
 身分  
 氏  
 名  
 被告 住所  
 身分  
 氏  
 名

夫 氏名 當何歳  
 妻 氏名 當何歳  
 年月日 娶ル  
 某御役所ニ差出置候年月日ノ戸籍人別帳ノ寫左ノ如シ  
 人別帳  
 右原告人氏名申上候云々  
 年月日  
 氏  
 住所  
 代書人 氏  
 身分  
 氏  
 前書申上候處相違無御座候  
 原告人ノ祖  
 父母父母等  
 住所  
 代書人 氏  
 身分  
 氏  
 御裁判所  
 某  
 御裁判所  
 氏  
 住所  
 代書人 氏  
 身分  
 氏  
 名印  
 名印

第七號

經界ヲ爭フ繪圖ノ式

年月日ノ原圖 何枚ノ一  
年月日寫之



原告人三人以上ナルチ一人ニ任スル訴狀

第八號

住所 身分 名印  
原告人 氏 名

住所 身分 名印  
被告人 氏 名

標記云々  
右原告人氏名申上候云々

年月日 氏 名印

住所 身分 名印  
代書人 氏 名印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申等ニ御坐候處病氣云々ニ  
テ難罷出ニ付何ノ誰ニ總代相頼候然ル上ハ何ノ誰ヨリ申上候  
事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異議申上間敷候  
爲後証與印仕候

某			年月日		
住所	身分	氏	住所	身分	氏
名	印		名	印	
代書人	住所	身分	代書人	住所	身分
氏	氏	氏	氏	氏	氏
名	印		名	印	
御裁判所			御裁判所		

第九號

被告人連名中脱走又ハ病死人アルノ訴狀

住所	身分	氏	住所	身分	氏
名			名		
原告人	住所	身分	原告人	住所	身分
氏	氏	氏	氏	氏	氏
名			名		
某ノ訴			某ノ訴		

右原告人氏名申上候云々					
年月日					
住所	身分	氏	住所	身分	氏
名	印		名	印	
代書人	住所	身分	代書人	住所	身分
氏	氏	氏	氏	氏	氏
名	印		名	印	
御裁判所			御裁判所		

住所	身分	氏	住所	身分	氏
名			名		
被告人	住所	身分	被告人	住所	身分
元住所	氏	氏	元住所	氏	氏
名			名		
被告人	住所	身分	被告人	住所	身分
氏	氏	氏	氏	氏	氏
名			名		
右何ノ誰ハ年月日脱走致候段			右何ノ誰ハ年月日脱走致候段		
何村役人何ノ誰ヨリ承知仕候			何村役人何ノ誰ヨリ承知仕候		
住所			住所		
被告人			被告人		
氏			氏		
名			名		
右何ノ誰ハ年月日死亡致候段			右何ノ誰ハ年月日死亡致候段		
何村役人何ノ誰ヨリ承知仕候			何村役人何ノ誰ヨリ承知仕候		
住所			住所		
被告人			被告人		
氏			氏		
名			名		

第十號

讓証文ヲ以テ催促スル訴狀（此一號ハ明治九年第九十九號布告  
ヲ以テ消滅ス故ニ畧ス）

第十一號

代人ヲ頼ム訴狀

第十二號

一時假リノ代人ヲ出ス証書

（右兩號ハ明治九年第十八號布告ニ因テ消滅ス故ニ畧ス）

第十三號

答書表紙ノ式（用紙寸法第一號  
訴狀ノ法ノ如シ）

年月日

某ノ答書

住所

身分

氏

名

答書ノ式

住所

身分

被告人

氏

名

某ノ答書

右住所身分何ノ誰何々儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見  
仕御答申上候

私儀云々

証據ノ書類アラハ其寫ヲ記載スヘシ  
右之通御座候

年月日

住所

身分

代書人

氏

名印

某

御裁判所

第十四號

對決前熟議解訟ノ答書

住所  
身分  
被告人 氏 名

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜見仕原告人へ熟談濟方仕候趣申上候

私儀云々

年月日

住所  
身分  
氏 名 印

代書人 氏 名 印

前書被告人何ノ誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候ニ付此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所

年月日

原告人 氏 名 印

住所  
身分  
某  
御裁判所  
代書人 氏 名 印

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

住所  
身分  
被告人 氏 名

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人へ熟談ノ上濟方日延約定仕候段左ノ通り御座候私儀云々

年月日

住所  
身分  
氏 名 印  
代書人 氏 名 印

前書被告人何之誰申上候通熟談ノ上濟方日延約定仕候ニ付來  
何年何月何日マテ御裁斷御猶豫奉願候

住所	身分	氏	名	印	
原告人	住所	身分	氏	名	印
代書人	住所	身分	氏	名	印
某	御裁判所				

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所	身分	氏	名	
被告人	住所	身分	氏	名
某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口ノ答				
右住所身分何之誰何々之儀訴出候ニ付今何日御呼出之御狀拜				

見仕原告人へ熟談ノ上 <small>親族</small> 中何ノ誰ヨリ日延代償約定仕候段						
左ノ通り御座候						
私儀云々						
年月日	住所	身分	氏	名	印	
	代書人	住所	身分	氏	名	印
前書被告人何ノ誰申上候通り私共ヨリ日延代償ノ約定仕候段						
相逢無御座候						
年月日	住所	身分	氏	名	印	
	代償人	住所	身分	氏	名	印
	代書人	住所	身分	氏	名	印
前書被告人何ノ誰申上候通私共承諾仕候ニ付此上對決ノ御裁						
斷不奉願候						

年月日 原告人 住所 身分 名印  
 某 御裁判所 代書人 住所 身分 氏 名印

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

住所 身分 被告人名  
 某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答  
 右住所身分何ノ誰何々ノ儀訴出候ニ付今何日御呼出ノ御狀拜見仕原告人へ熟談之上親族中何之誰ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左ノ通御座候

年月日	原告人	住所	身分	名印
年月日	代書人	住所	身分	氏 名印
年月日	代償人	住所	身分	氏 名印
年月日	代書人	住所	身分	氏 名印
年月日	原告人	住所	身分	氏 名印
年月日	代書人	住所	身分	氏 名印

前書被告何人何ノ誰申上候通熟談ノ上何ノ誰ヨリ代償濟方日延約定仕候ニ付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

前書被告何人何ノ誰申上候通私共ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段相違無御座候

某  
御裁判所

第十八號

外國原告人ノ訴狀

本國住所

身分

原告人 氏 名

住所

身分

被告人 氏 名

訴狀

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判所へ左ノ通訴  
訟申上候

第一云々

第二云々

第三云々

但シ訴訟ノ根源事實ノ大畧ヲ明  
白ニ認ムベシ若其事實混交シテ  
長文ナルキハ第一第二第三條ト  
之ヲ區別スヘシ

依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願  
ニ候ヤ金子ノ拂カ其金高何程カ  
右判然ト認メ其他公正ノ御裁判  
ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ

日本地名

年月日

原告人 氏 名 花押

若シ原告ノ代言者ナルキハ  
左ノ如ク加判スヘシ

代言者 氏 名 花押

某

裁判所長

氏 名

▲參看 六年九月第三百十二號布告

訴答文例附録中訴狀宛所某御裁判所ト有之處每號トモ同第十八號  
書式ノ通相定メ候條此旨更ニ布告候事



十年二月第十九號布告

○第三節 控訴上告手續

第一章

控訴ノ事

第一條 凡ソ地方裁判所ノ初審ニ服セスシテ再ヒ上等裁判所ニ訴ヘ覆審ヲ求ムル者之レヲ控訴ト云

第二條 控訴ハ民事ニ止マリ刑事ニ及ハス(本條ハ治罪法實施以後ハ自然ニ消滅ニ歸シタリ)

第三條 控訴ハ一タヒスルヲ得再ヒスルヲ得ス

第四條 地方裁判所ニ於テ裁判ノ言渡ヲ爲シタルハ原告被告ノ双方又ハ一方ノ者其裁判ニ不服ナルハ裁判言渡ヨリ第七日マテニ(裁判言渡ノ翌日ヨリ數フ)裁判言渡ノ事理ヲ熟考シ其翌日ニ至リ控訴スルヲ得可シ但シ訴訟ノ案件商事ニ係リ急速ニ控訴スルヲ要スルノ場合ニ於テハ七日内ト雖モ控訴スルヲ得

第五條 (明治十五年四月二十六日第二十一號布告ヲ以テ本條中三ケ月トアルハ總テ二ケ月ト改正ス)

地方裁判所ノ裁判言渡ヨリ二ケ月(三十日ヲ以テ一月トス)ヲ過クルハ控訴スルヲ許サス但シ地方裁判所ヨリ上等裁判所ニ至ルノ距離八里ヨ

同年同省丁十八號達ヲ以テ取消ス

人民ヨリ院省使府縣等ハ對スル詞訟ニシテ上等裁判所ノ裁決ニ不服ヲ唱エ上告スル者アル時ハ自今其都度書類ヲ添へ受理不受理ノ義一應當省ヘ伺出ヘキ旨大審院ヘ達ノ趣ヲ大坂ノ外各上等裁判所ヘ達ス

明治十二年六月十四日 司法省達丁十六號

八年司法省甲六號布達ヲ以テ廢ス

件ニ付右訴訟人ヘ地方裁判所又ハ裁判官ヨリ添翰ヲ渡サシム

明治六年二月廿五日司法省廿三號達五年第四十六號達ノ件ニ付右訴訟人ヘ地方裁判所又ハ裁判官ヨリ添翰ヲ渡サシム

明治六年八月司法省達判所ヘ司法省達

各省達各人民ヨリ地方裁判所ノ裁判ヲ受ケ未タ其言渡ヲ受ケズシテ司法裁判所ニ控訴

第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル地方裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受取リタル地方裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ上等裁判所ノ請求アルハ地方裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 上等裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章 上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之ヲ上告ト云フ

第十條 上告スルヲ得ルノ事件ハ

第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ

第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クルノ所ニアラス故ニ控訴スベキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ

第四編○訴訟○第二類○勸解出訴○控訴上告手續

スル者アル  
モ之ヲ受理  
セサラシム  
明治八年六  
月七日百號  
布告上告者  
預ケ金ハ當  
分差出スニ  
及ハス  
明治六年二  
月廿五日司  
法省達廿三  
號  
五年第四十  
六號達ノ件  
ニ付右訴訟  
人ハ地方裁  
判所又ハ裁  
判官ヨリ添  
翰ヲ渡サシ  
ム

得  
第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルヲ得  
第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フル  
コトヲ得ス  
第三章  
民事上告ノ事  
第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ上等裁判所ニ控訴シ其  
審判ヲ經タル者ニ限ル  
第十五條 上告ヲ爲サント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告狀  
ヲ大審院ニ捧クヘシ而シテ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁  
判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ二月ノ外八里毎ニ  
一日ヲ増ス此定期ヲ過クレハ上告スルコトヲ許サス  
上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ  
第一 原告人ノ住所身分氏名  
第二 代官人アレハ其住所身分氏名  
第三 被告人ノ住所身分氏名

明治六年八  
月三十日司  
法省達司法  
省裁判所ヘ  
各人民ヨリ  
地方裁判所  
ノ裁判ヲ受  
ケ未タ其言  
渡ヲ受ケズ  
シテ司法裁  
判所ニ控訴  
スル者アル  
モ之ヲ受理  
セサラシム  
明治七年五  
月十九日布  
告五十四號  
民事控訴略  
則ヲ定ム  
八年九  
月十四號  
布告ヲ  
以テ廢  
ス  
各上等  
明治八年五  
月三十日司

第四 証人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名  
第五 地方裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及  
ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日  
第六 上等裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及  
ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日  
上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ  
上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ届出スヘシ  
第一 地方裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫  
第二 上等裁判所ニ於テノ訴狀并ニ答書ノ寫及裁判言渡書ノ寫  
第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ  
編ノ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編シテ幾冊ト爲シタル者  
右之訴狀又ハ答書及ヒ憑據ノ書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所  
ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟廷ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ  
取ルコトヲ得ヘシ  
若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サハルニ因リ上告人其寫  
ヲ出シ能ハサルトキハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ  
第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添ヘテ金十圓ヲ大審院ニ預クヘシ若

第四編 ○訴訟 ○第三類 ○勸解出訴 ○控訴上告手續

裁判所  
開聽ニ  
依テ消  
ル

十年十  
月七日  
九號布  
告ヲ以  
テ消ル

法省布達甲  
八號  
控訴上告規  
則御布告ヲ  
承知セシ日  
ヨリ大審院  
並各上等裁  
判所開聽ノ  
達ヲ承知セ  
シ日迄ハ控  
訴上告期限  
日數ニ算入  
セス  
明治八年六  
月七日布告  
百號  
上告者預ケ  
金ハ當分差  
出スニ及ハ  
ス

シ其金高ヲ預ケサルトキハ上告ヲ爲スコト得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタルハ預金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケテ原  
裁判ヲ破毀セサルハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規則ニ  
照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム(被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云)

第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所ニ於  
テハ書類ヲ二日內ニ大審院ニ遞送スヘシ

第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判ヲ破  
毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シ(大審院ヨリ郵便ヲ發ス)執行ヲ停メ更ニ  
審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ  
但内國人ニテ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内國人  
ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ之ヲ  
捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スルハ  
何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ旨ヲ  
言渡タルハ其後二日內ニ被告人呼出狀ヲ仕出スヘシ此呼出狀ニ  
ハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日內ニ答辨書ヲ  
作り自分又ハ代言人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人ノ住所ヨ  
リ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キハ八里毎ニ一日ヲ増スヘシ

第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辨書ヲ受取リシハ院長ヨリ  
判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遅緩ナク一件  
始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被告對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被  
對審ノ呼出狀ヲ原被告雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被告對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末  
ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被告交互ノ論辨ヲ審  
聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルハ何々ノ理由ヲ以テ  
原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ其裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘ  
キ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルハ何々ノ理由ヲ以  
テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四編〇訴訟〇第三類〇勸解出訴〇控訴上告手續

第四章

刑事上告ノ事(此章第二十六條ヨリ第三十六條ニ至ル十一ヶ條刑事ノ上告ニ係ル件ハ治罪法ニ明條アルヲ以テ之ヲ略ス)

○第四節 朝鮮人ニ對スル控訴 十五年八月司法省 丁第四十三號達

大 審 院  
裁 判 所

御國人民ヨリ朝鮮國人ニ對スル控訴ノ儀ニ付大坂控訴裁判所ヨリ甲號ノ通伺出テ乙號ノ通及指令候條爲心得此旨相達候事

甲 我國人ヨリ在朝鮮國同國人へ係ル控訴被告人召喚ノ儀ニ付伺大坂府下秋宗清兵衛ヨリ全府羈留朝鮮國人朴琪淙へ係リ大坂始審裁判所へ出訴ノ末別紙控訴狀(零之)ニ掲載ノ如ク裁判ヲ受ケ之ニ服セス及控訴候然ルニ被告人ハ右裁判後歸國致シ現今ハ釜山浦辦察衙門中ニ罷在候趣ニ付召喚ノ手續ハ當廳ヨリ直チニ彼港在留我國領事へ照會シ領事ヨリ彼ノ官衙へ移シ候順序ニ而可然裁別紙照會案(零之)相添へ併セテ伺候間至急御指令ヲ乞ヒ候也

大坂控訴裁判所長

明治十五年七月廿二日

大木司法卿殿

判事 清岡公張

乙

伺ノ趣必スシモ被告人ノ出廷ヲ要セサル儀ニ付訴狀ヲ添へ領事廳へ移文シテ被告人ノ答辨書ヲ差出サシムル様可取計事

明治十五年八月廿一日

第五章 訴訟印紙

○第一節 民事訴訟用印紙規則 十七年二月 第五號布告

民事訴訟用印紙規則別紙ノ通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス但明治八年(十二月)第百九十六號布告訴訟用野紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

第一條 凡民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用スヘシ

●静岡縣伺 明治十七年 五月六日 諸訴訟濟口証文及ヒ財産又ハ物品公賣或ハ身代限取消シ願書等御規則中明文無之ニ付印紙貼用ノ限ニ無之哉若

民事訴訟用印紙規則ヲ制定シ本年四月一日ヨリ施行ス但八年第百九拾六號布告訴訟用野紙規則ハ同日ヨリ廢止ス

明治十七年二月廿三日 日布告 五號ヲ以テ消

第四編○訴訟○第三類○代官ハ○民事訴訟用印紙規則